

〔語釋〕
(三)かく御文のあるは

(五)此下脱文あるべし

〔考異〕
(一)みたのとり―えたとか

(二)すみのえは―すみよしは

(四)淵瀨思ひ―淵瀨をば思ひ

る。こよには更に思ほえずなむ。人々に消息したりしに、それも、此頃は惱ましくて、物せず。みたのとり草木だに、待たずともなるめれ。あなすどろや。

うちはへてまつのみ繁るすみのえは下葉も枝も何かかはらむ

とのみを、己平かにてぞ。何事もかくては得こそ。

と宣へれば、おとど見給ひて、正頼かく宣ふめるを、参り給へかし」御方、あて宮何

しにか。梨壺参り給ひなむ。人少なればこそあらめ」とて御返

あて宮み山木の下には風のはやくとも枝には露もすぐなとぞ思ふ

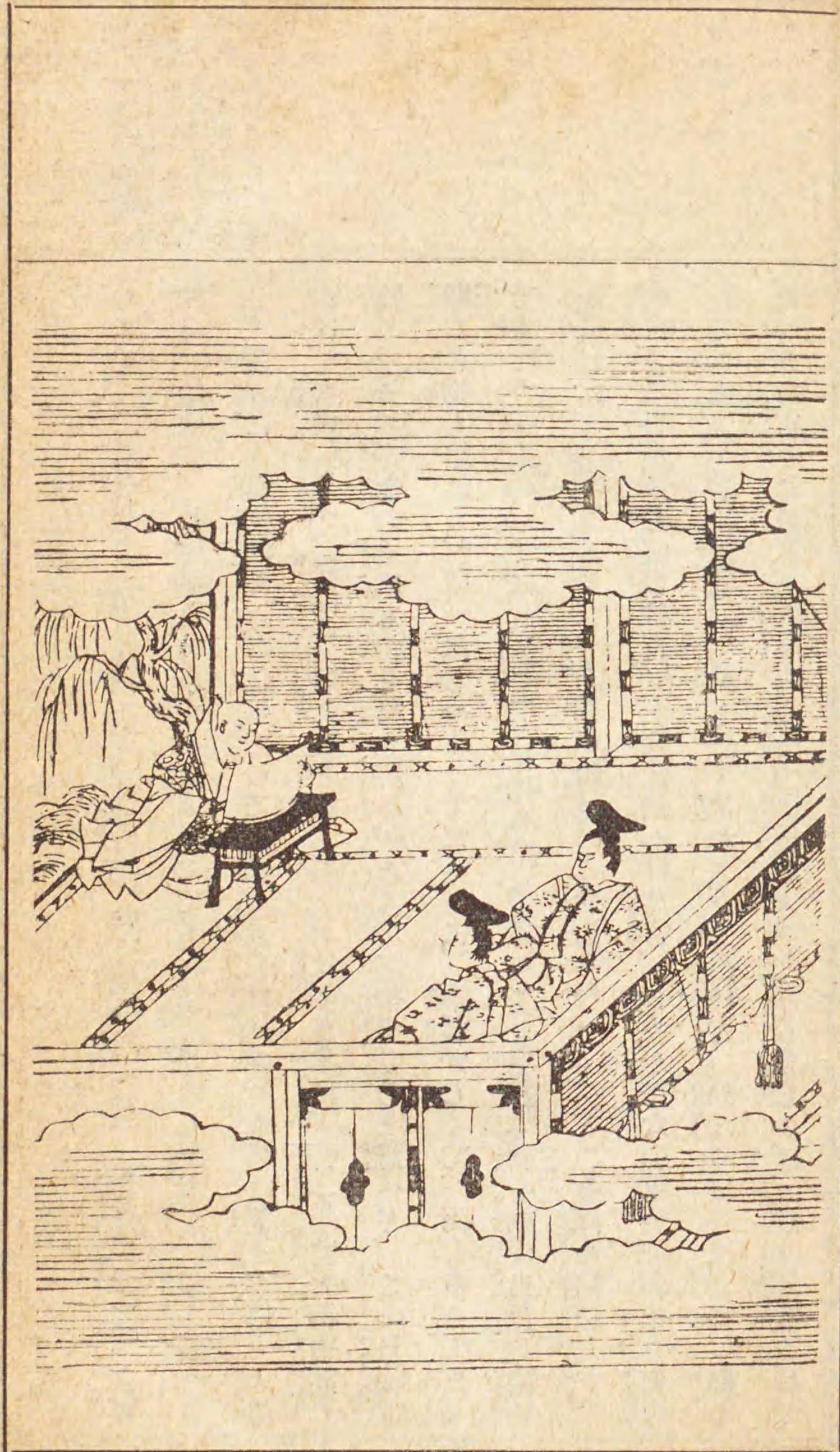
數ならぬ身の、淵瀨思ひ給へすや。

とのみ聞え給ふ。

かくてこの生れ給へる御子をば、今宮と聞ゆ。御湯殿参りて、寐起きたまへるを、

大宮はいだき給ひて、大宮をかしくもおはするかな。たど若宮にこそあめれ。こ

れはわが子にし奉らむ」



女一宮懐胎。彈正宮の
見舞。仲忠の痛心。兼雅、
仲忠を招きて立太子に關
する后宮の密旨を告ぐ。
仲忠、思こそを招きて女
一宮を加持せしむ。帶を
忠こそに示す。

〔語釋〕
(一) 仲忠妻

(二) 正賴

(三) 實忠

(四) 誤あるべし

畫詞 ことばは畫なり。

かくて一宮五月より孕み給ひぬ。此度はいたく悩み給へど、大將の君には、さも
知らせ給はず。たゞ御心地なやみ給ふ様にてあれば、思ほし騒ぎて、祭祓せさ
せ、所々にも御修法おこなはせ給ひて、ありきし給はず。女御の君もおはしまさ
ねば、夜晝、醫師、陰陽師、驗者など召しつゝおはしますに、彈正宮と御物語し
給ふ。女二藤壺の里にもし給ふ時に、まうでて物申さむと思へど、この月頃は
殿など物し給ふめれば。はじめまうでたりしに、物騒がしくて、物も申さでまう
で來にき。人の志は、いとよく見知り給へるにこそあめれ。新中納言出だし給ふ
を見れば、思康、まろが志を知り給はぬにやあらむ。女二とこそ語り給ひしか。
大宮さる事ありと宣ひけれ」と聞え給へば弟宮、思康、かひなの事や。あまり侮ら
れて、過せられ給はむに、誰もく何わざかし給はむ。幼かりければこそ、然り
ぬべき折有りけれど、人々の心をつゝみつゝ。今ならましかば、かく妬き心地せ

〔語釋〕

(一) 誤あるべし

(二) 我を高官に任じ給ふ
とも我にあて宮がつれな
かりし報は必ずすべしの
意歟

(四) 女一宮

(三) などにやーなどや
〔考異〕

ましや」女宮、女二「あなむくつけ。如何は宣ふ。人をば徒らになさむと思すか。
いとど、この見ゆる物さぞあらむといふものを、戯にてもあなゆよしや」と宣へ
ば、思康、よく宣ふなめり。心ある人の、思ふことをぞ知るかし。たゞ今かく有る
ほどなめれば、まめやかには然も思はず。世中定まりなむ時、大臣たかき位に物
し給ふとも、憎くもてなし給ふらむ本意とけむとす」と宣へば、いみじく怖ぢ給
ふ。
かよる程に大將入り給ひて、仲忠「今の程は、醫師どもに問ひ侍れば、熱などにや
おはすらむとなむ。物問ふには、靈氣とぞ。されば、眞言院の律師のもとに、消
息言ひ遣はしつ。参り來ば、護身せさせ奉らむ。三條より、「言ふべき事あり」と
度々侍るを、たゞ今の間にかかりて、いと疾くまうで來なむ」とて参りぬ。
仲忠「召侍りけるを、即ち候はむとせしかど、彼處に侍る人の、日頃いたく悩み給
へば、女御など物し給はぬ程なれば、見讓る人なくて、えさふらはす侍りつる」北

〔語釋〕
 (一)懐胎
 (二)兼雅の同胞也
 (三)立太子の事をいへる也
 (四)梨壺が歸らぬとて催促せらるれば
 (五)梨壺を
 (六)諺なるべし
 (七)諺なるべし、鎌倉時代の諺に「鼯のなき間の貂ほこり」といへると同義なるべし
 (八)正頼方より

の方、俊隆女「え更に承らざりけり。如何様にか。などか、斯くなど宣はざりし。参りて見奉らましものを」大將、仲忠「知らず。靈氣などいひて物まるらずなむ有りつるを、昨日今日は重くなりてなむ」おとど、兼雅「いとほしきかな。参るべうこそあめれ。もし前にありし筋にやあらむ」と聞え給へば、仲忠「さも見え侍らず。然りし時も、かくは物し給はざりき。さても、程なくは如何」と聞え給ふ。おとど、兼雅「消息申したりしは、後の宮より宣ふ事なむ有りし。如何なる事にか、「思ふ時には、然もありぬべき事なれど、世の亂となり、騒がしかりぬべき中に、天下にまさる心ありと、誰々も思ほえし」となむ。如何なる事ぞ、と申さむとてなり。宮もかしこ参らずと宣ふめるに、今宵なむ参らせむと思ふ。藤壺参り給ひなば、しやうぞくの薰物のやうなるべし。鼯のなき間の鼠としも仕うまつれとてなむ」と宣へば、仲忠「如何なるべき事にか侍らむ。仲忠は、いかでかとり申さむ、殿の御爲にやごとなき事なり。それによりて、侍らむ所に思ひ疎まれむも苦しう

〔考異〕
 (一)なむ一なむ侍る
 (九)なき間の一まへの
 (一〇)仲忠は「は」ナシ

〔語釋〕
 (一)脱文あるべし
 (二)「ちとぎ」なるべし
 (三)「かへり」まかて
 (四)梨壺の御供にも行か

なむ。たど後の宮の宣はむ、奉り給へ。非常と見る事も侍らば、いとよき事なり」と聞え給へば、いとど、兼雅「身の爲には、いとよかるべき事なれど、大方騒がしかるべければ、こよにも然ぞ思ふや。さらば早物せられよ。つとめて此處にもまうでむ」と宣へば、大將かへり給ひぬ。梨壺、御車二十ばかりして、御前いと多くて参り給ひぬ。うまれ給へる宮は、母宮のもとにおはす。

〔畫詞〕こよは三條殿。

かくて大將歸り給ひて、宮に、仲忠「今の間はいかど。言ふべき事有り」と侍りしかば、まかりたりつるに、やんごとなき事ども申されつれど、僻答をなむしてまうで來ぬる。さるは、梨壺、今宵ぞ参られける。されど、其方にもまからずなりぬ。里人も今参らむ」と聞え給ふほどに、「律師参り給へり」と申せば、仲忠「なほ此方に」とて、簀子に御座敷かせて請じ入れ給ふ。仲忠「これは恥かしき人ぞや」とて直衣装束にて出で給ふ。律師は、綾の装いと清らにて参り給へり。姿、顔頭つき、

〔語釋〕
〔四〕させむは作善歟

〔五〕思こそは生佛なれば
とて頼みたる也

〔考異〕
〔二〕大將―ちとゞ

〔二〕大將―ちとゞ

〔三〕給ひつるをなむ―給
へるをなむかしこ思ひ
給へるさて

いとめでたう、御供の者ども、装束清らに、容貌よき、十人ばかり、若法師十人、大童子三十人ばかり、擯榔毛の車の新しきに乗りて参り給へり。中門より、大童子はとどめて、侍法師、童して入り給ひて居給へり。大將、仲忠宮の中などにては、對面賜はれど、その事となくては、え取り申さぬ事をなむ。さるは、昔より志侍れど、自然に怠り侍りてなむ」律師、思こそ山伏も、いかでかと志し侍れど、殿の仰せごと賜はらぬを嘆き侍るに、たましく仰せ給へれば」と申し給ふ。大將、仲忠いと嬉しくて。こよにも、數に思さねばや、訪はせ給はざらむ、と思ひ給へるに。内裏の召などにも参り給はぬ時おほきを、如何ならむと思ひ給へるに、かくものし給ひつるをなむ。消息聞えたりつるは、此處に、立ちぬる月の晦より惱み給へるを、日頃重くなりまさりてなむ。これかれに物問はせ侍れば、邪氣など申す。させむなど行なはせ侍れど、なほ心もとなきを、たゞ今は現れたる藥師佛にこそはとてなむ。一夜二夜ばかりものせさせ給へ」と聞え給ふ。思こそ「心

〔語釋〕

〔二〕后宮より召されても
行かずに此方へ來られし
を疎末にしては勿體なし

〔三〕女一方

〔四〕懐胎を仲忠に知らせ
ぬをいふ

〔七〕御懷胎の事を仲忠に
申上げむ

〔考異〕
〔二〕侍りつれど―侍れ

〔五〕ちとゞ―大將

〔六〕心して―志ありて

〔八〕ちとゞ―大將

には、久しくさふらひ候ひなむを、佛と宣はするなむいと恐ろしくて、まかり逃げぬべく。此の頃は、所々に斯くなむ。后宮の姫宮も、かくなむ惱ませ給ひて仰侍りつれど、まづ殿にをとてなむ」など聞え給ふ。大將、仲忠「おほやけの御許よりだに然りけむ御心を、恐ろしや。奥の方におはしませむ」とてしつらはせて入れ奉らせ給ひつ。かくて「まうのほり給へ」とあり。南の廂に、よき御屏風立てたり。例の空薫物などして参り給ふ。かくて宮に、内侍のすけの申し給ふ。すけ「いと腹きたなくおはします。これは何の罪にてある御心地にもあらず。知らせ奉り給はねば、おとどはさわぎ給ふ。それはとまれかうまれ、生きてはたらき給ふ佛と言はれ給ふ、加持参り給へば、ともかうもこそあれ、かよる人は、さる心してこそ加持まるれ。いと恐ろし。おとどに聞えむ」と申せば宮、女「何心地とも知らず、いと苦しきは、死ぬべきにこそあんめれ」と宣へば、すけ「あなさがなや」などむつかり給

(語釋)
 (五)山より
 (七)故なく聞くわけにもゆかぬを

(考異)
 (一)見給へつるを給へるを一つるを
 (二)おはしけりおはします

(三)佛神一神佛
 (四)多うは一おのれは
 (六)思ひ一思う
 (八)思ひ一思う
 (九)仕うまつるまじかなる一仕うまつり合すまじかなる

へり。律師は加持參り給ふ。さらに、はやき陀羅尼讀ます。童より、聲かぎりなく有りし人なれば、まいていと尊し。

曉になりて、大將殿、仲忠「世の中のこと、とざまかうさまに、皆承り見給へ

つるを、この御陀羅尼をのみなむ、音に承れど、まだ承らざりつる。けにいと

尊くおはしけり。いかで秋深からむ程に、木葉の降り落ち、風の聲心細からむ時、

人の聞かざらむ山里にて琴に合せて承りにしがな」律師、忠こそいと尊き仰せご

とも侍るかな。たゞこれをのみなむ、夜晝佛神にも申し侍る。御琴なむ、昔ほ

のかに承りて、多うはこれによりてまかり出でしなり。されど、仰せごをだ

にえ承らざりつれば、思ひ給へ嘆きつるを、かく仰せらるれば、思ひの叶ひ侍

るなりとなむ。わいても、御琴の音は、いと承らまほしく、たゞにもえ仕うま

つるまじきにぞ思ひ給へわびぬる」仲忠「琴ぞ、え仕うまつるまじかなる。そもく

いと怪しくて、御行につき給ひけるは、などてにて侍りけむ。春日にて見奉

(語釋)

(二)此間脱文あるべし

(四)繼母の乞食になりたるにあひて

(五)侍りし」歎

(六)我身の事と

(七)脱文あるべし

(一〇)正頼

(六)侍る」なるべし

(考異)

(一)言ふこと一いひかくること一いぶかしきこと

(三)え知らず思ひ給へえ知らず思う給へ

(八)責め一せめて

(九)給へば一給ふ

り侍りしは、いとこそ悲しう侍りしか」思こそ「山にまかり籠りし故は、いといみじき

事の侍りけるを、更に知り給へざりき。たゞ漫に物悲しく、世には侍るまじき心地

のせしかば、親をも見捨ててまかり出でにし。その人、繼母に侍りし人なり。宮

仕し侍りし程に、言ふことの有りしを、その事便なかりしかば、聞かぬやうにて

侍りしに、怨じたるにや有りけむ。親に、怪しき事を申しけるを、え知らず、思

ひ給へ嘆きしを、不意に異様にて逢ひて侍りしに、「など斯くはなりにたるぞ」と

問ひ侍りしかば、「繼子なりし人の爲に、親の寶とする帯を取り匿して、これを賣

らすと言ひ、帝かたづけ奉らむとすと奏しけり、となむ聞かせ侍る」と申しよ

を、山伏の上に聞きなし侍りて、その日つひに後の事まで、先つ頃知り侍りにき。

此事を聞き侍りしかば、いとよう逃けてけりとなむ。然ることを聞き給ひて、責め

宣せざりける親の御心なむ、いとかなしき」と申し給へば大將、仲忠「恐ろしかり

ける人の心にこそは。その事は、左のおとどぞ宣ひしや。然る事ありける帯は、

(語釋) (二)千陰、忠こそその父

(三)忠こそが居合せたらば與へんと思ひしに

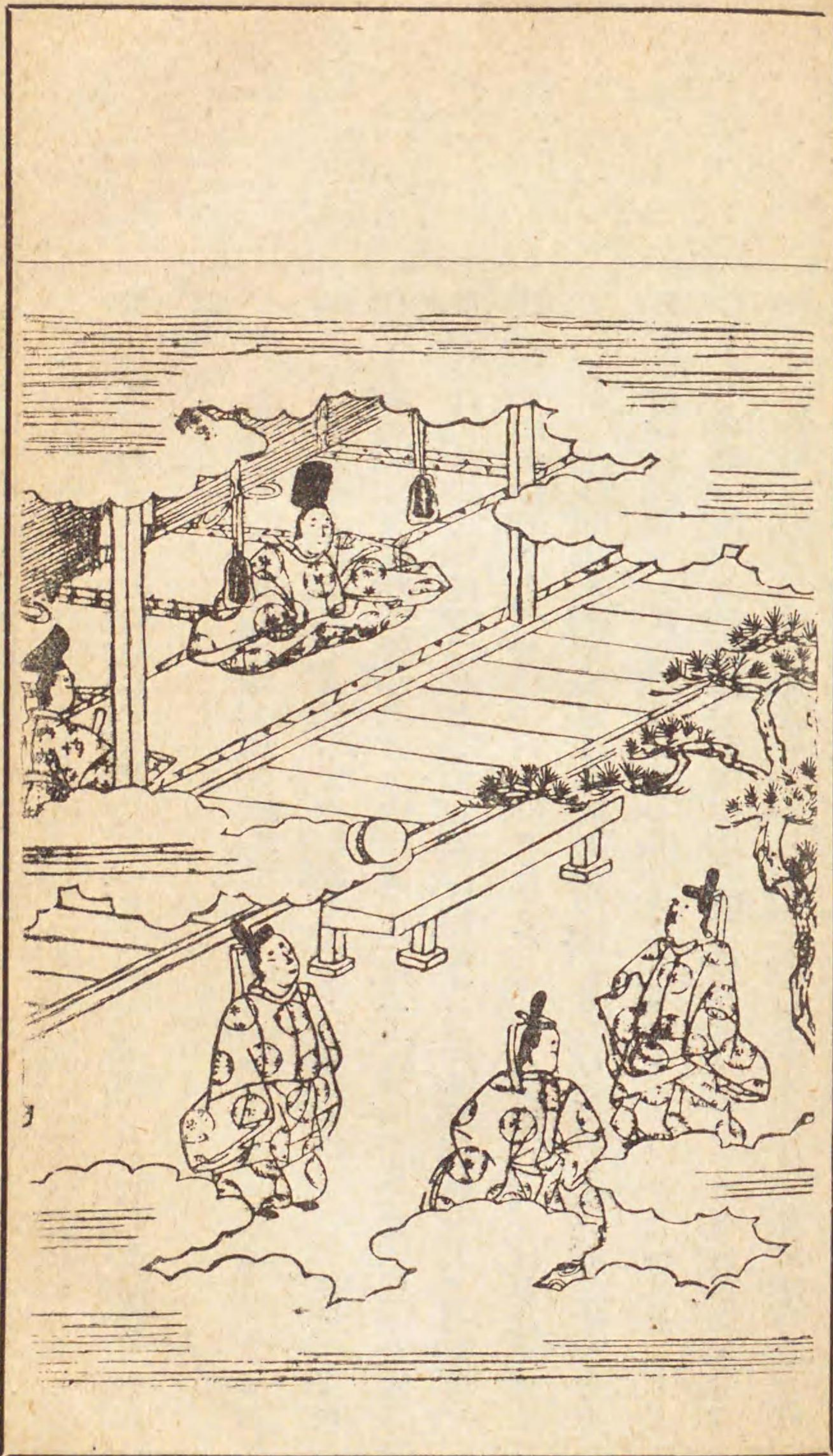
(考異) (一)仲忠の—仲忠が

(四)侍り—ナシ

(五)仕うまつりし—つかまつりしに

(六)侍る今暇に—侍りける今—侍るを今しも

仲忠のもとに侍り。このおとど、亡せ給はむとて、「そこに物し給はむと思ひしを、今は誰にかは」とて、院になむ奉られたりけるを、内裏になむわたりて侍りけるを、去年の十二月に御書仕うまつりし祿になむ賜はりて侍り。けに世になきいみじき寶にこそは。かよる物を、然間えなしけむが恐ろしき」律師、忠こそ「さる禍になむあたりて侍りし」大將、仲忠「この帯は、物し給はましかば、御物とぞならましか。奉りてむとなむ思ひ給ふる」律師、忠こそ「山伏は何の料にかし侍らむ。僧の具に玉の帶さし侍らばこそあらめ。もて侍らましかば、とかくの事、殿ばらにこそ奉らましか」大將、仲忠「たゞそれかと思給へ」とて見せ奉り給へば、律師見給ひて、いみじく泣き給ふ。忠こそ「この帯は、故千陰の内宴にまかり出で給ふとて、装束し給ひしになむ、見給へし」と聞ゆ。大將、仲忠「この春日に侍りし少將仲頼の、入道して侍るとぶらひに、その時の同じ人々などこれかれ、今は仲忠もかく上達部にて侍り、あるは頭などにても侍る、今暇に訪らひにまからむと



(一)女一宮

(二)兼雅

兼雅女一宮の病を見舞ふ。御鞠、仲忠女二宮を隙見す。兼雅正頼に小倉の遊覧を約す。

(三)承りになむ一歌

(考異)

(四)など一ナシ

す。そのかみ御前にてあそび侍りし頃、戀ひ申し給ふ事はまり無し」かくて明けぬれば、御方へ下り給ひぬ。大將、御心とどめて、家司どもに仰せ給ひて御前に物奉れ給ひつ。

畫詞

ことは大將殿、加持参り給ふ。

かくて、宮わづらひ給ふとて、右大臣殿参り給へり。左大將、いそぎて御迎へて入り給ふ。右の大殿、左の大殿にきこえ給ふ、兼雅「こよには、惱ませ給ふ事のおはしける。如何様にかと、承りなむ参りきつる」左のおとど、雅頼「正頼も然承りになむ参り來つる。さいつ頃より、かく承れど、けしうはおはせずと有りしを、この山籠の律師など召されけるに驚きてなむ。ことに、そこはかとおる御心地にはあらで、起り給ひなどして、物まるらずとなむ。かたへは暑氣などにやとて見給へ侍る。日頃は、かく極熱の頃に侍れば、苦しうて、内裏にも参り侍らず」右のおとど、兼雅「兼雅も、久しう参り侍らず。さるは、御國讓のこと近

(語釋)

(一)梨壺

(二)忠澄

(三)近澄

(四)仲忠

(七)誤脱あるべし

(八)何も召しあがらずに

(考異)

(五)大將殿一大將のもと

(六)大將殿官一大將官に宣ふ

(九)かしこ一もそらしや

くなり侍るを、宮へも参るものの侍るをいとあつしく侍りて、片時見給へ棄てがたう、引き入れておき侍りしを、辛うじて出だし立て侍りし。この惱ませ給ふと承り驚きてなむ」かくて御菓物参り御物語し給ふ。

かくて右のおとど参り給ひぬとて左衛門督の君、藏人の少將、宮あこの侍従など参り給へり。宮たち、おとどたち、「いざ、かよる所にて脚病勞らむ」と宣ひて、楓の青やかに茂りたるもとに立ち出で給ひ、「をかしき鞠のかよりかな」と興じ給ひて御鞠あそばす。皆上手なり。人々装束し給へり。宮たち、おとどたちは直衣奉れり。大將殿、藏人の少將、鞠も上手、様もよく見ゆ。宮たち、「怪しのわざや」とて御覽す。暮れぬればみな入り給ひぬ。宮たちは、二の宮の御方に入り給ひぬ。

大將殿、宮に、仲忠「今日は、例の風のいもるに」御前なる人々、「まして今日はいと物清くてくらさせ給ひぬ」ときこゆれば、仲忠「あなかしこ」とて水飯してまる

〔語釋〕
 (二)水飯を食はせて
 (四)女二宮の方を警戒せよと注意する也

(六)此處誤脱あるべし
 (九)女二宮姫宮

〔考異〕
 (一)見給はねば―入れ給はねば

(三)を―ナシ

(五)いかで聞き給へらむ―いかでかきく給ふらむ
 (七)給ひつれば―給へるは―見え給ひつるは

(八)いと―ナシ

(一〇)たれば―たるに

り給へど、御目ふたぎて見にだに見給はねば、犬宮膝にするて、さしくとめて参りて、仲忠「御徳をも見給ふるかな」と宣へば宮、女二「あつし。簀子にを」と宣へば、仲忠「昨夜をだに思ふ所に、今宵居眠ぞ用なきや」と宣ひて臥し給ひて、仲忠「かの御方に、いざとく人候へ。聞く様有り」と宣へば乳母胸潰れて、いかで聞き給へらむと。藏人の少將も、簀子に居給ひて、かの人見え給ひつれば、右大將殿とほくてさし出で給ひ、仲忠「あなかしこや。人去ぬれど、いと恐ろしき兵ありくなり。外にては知らず、此處にてはいとさがなからむ」と宣へば、宮たち御目もさめて起き居給ひぬ。乳母は、身も冷えはてて、我にもあらで居たり。かくて曉になり、御格子もおろさず。二の宮の御方と此方とは、高き御屏風立てたり。おはする所近ければ御屏風にて隔てたるなりけり。大將この折宮たち見奉らではいかでかと思ひて、一の宮いとよく御殿籠りたれば、脇息を踏みたてて、御屏風の上よりのぞけば、明けぬとおほえて、男宮たちは皆御殿籠りたり。二の

〔語釋〕
 (二)小用を足さんとて

(四)「ゆふらう」は「遊覧」歎又は「納涼」の誤歎一本「ゆらう」

(七)御讓位の事

(一〇)正頼の心を探る爲に

〔考異〕
 (二)かたびらは―かたびらは御たち

(三)給へる―給ひつる

(五)さて―まで

(六)さても―も―ナシ

(八)なれど―なれば

(九)をもの―ナシ

宮は、御几帳のかたびらは、うち懸けてまだおろさず、起き給ひて、いさよかなる事せむとおほして入り給へるを、いとよく見奉り給ふ。白き綾一かさね奉りて、御髪なども、御殿籠りふくだめたれど、いと氣近くうつくしげなりと見る。姫宮も、起きあがり給へるを、これはまだ小くかたなりにて、あてなり。よくも生みあつめ給へる御子たちかなと見て居給ひぬ。
 (三)ほのくくとをかしき朝ほらけなれば、おとどたち勾欄におしかよりて居給ひつよ、右のおとど、實正昔斯かりし極熱に、この釣殿へこそは度々ゆふらうしに参りしか。今日さて侍る人をや」左のおとど、正頼「今日も、昔のやうにせむかし。別いても、朝涼にこそは。さても公の御いそぎは、眞實に、月や定まりて侍らむ」右のおとど、兼雅「この八月ばかりには承れど、確にはまだ承らず。朱雀院みな造り果てたんなれど、なほ疾く急ぎて、あるべからむ事をものせよ」と仰せらるれば、さらば思し悩むことも侍らむかし。言はせしめ給へや」左のおとど、
 (二〇)気色

〔語釋〕
 (一)なりぬるを「歎」
 (二)兼雅の桂の別荘近ければ也

〔考異〕
 (一)月も一月の

(四)すさみなども「すみなし」

(五)承はりて「承はりぬ」

(六)如何「入りて侍る」ナシ

〔近澄等の女二宮に對する熱心〕

(七)女二宮

(八)聞えおき給へれば「聞え給ひつれば」

見むとて宣ふにやあらむ、と心づかひし給へど、誰もく、何心なくうち語らひ給ふ。大將殿は、御酒など參らせ給ふ。右のおとど、兼雅「かく惱ませ給はずば、月も残少くなりぬる、小倉の方へ御前たまはらむと思ふ給へるを」と聞え給へば左のおとど、正頼「何か、さやうにすさみなどし給はば、怪しうはあらじ」と聞え給ふ。兼雅「さらば、承はりて、晦がたにおはしませむ。昔御覽せしよりは水なども深くなり、魚もいと多く棲み侍り。如何なるにかあらむ、山の前より川なむ入りて侍る。賣り買ふものどもは、家の中よりなむ往き返り侍る、御覽せさせばや。春秋は、昔よりも木の數もあまたになりて、いとをかしく侍り」など聞え給ひて、みな還り給ひぬ。

かくて二の宮、姫宮は、このおとどの西の方におはします。彈正の宮は、二の宮の御乳母など具しておはしませど、女御の君の聞えおき給へれば、二の宮の御許に、夜も晝もおはします。藏人の少將、いかでなどは思せどおとど宮おはしまい

〔語釋〕
 (一)様子ありげに女二宮に物申上ぐる女中あるときは

(二)女二宮の

(四)「宮より」は「かく」の誤歟

(五)懐胎

(七)國母

〔仲忠、女二宮の懐胎を悟る〕

〔考異〕

(二)けりーナシ

(六)こそーとぞ

て、いさよか氣色ありて物聞ゆる御たちもあれば、氣色あしく宣へば、物聞ゆる人もなし。この二の宮に思ひ困じたる君たちは、皆御たちにつきて、物取らせつ、「盗ませ奉れ」と宣ふも有りけり。藏人の少將は、中納言の君とて、御身につき仕うまつる人に、萬の財物を取らせ給ひつと、「盗人に入れよ」と宣へど、さるべき折もなし。如何ならむ隙に入らむと、うかどひ給ふ人々あまた聞ゆる中に、五の宮より切に聞え給ふ。

宮より聞ゆる程に一の宮の御心地を、かよる筋に大將見なし給ひて、仲忠「さりともし著く思さるらむものを、宣はせて、心魂を惑はかせ給ふものかな。なほく斯くことなくしき御心こそ。世中に佗しかりしは、内裏にさふらひ困じて、南の宮に、御迎にとて参りて侍りしかど、はしたなく宣ひしに、えまからざりしに、藤壺の、國の親となり給ふべき御心なればにやあらむ、局などして賜ひしに、出で給はでやはせ給ひしこそ、忘れがたく。相思さぬ折おほくなむ。さては御遊し

〔語釋〕

(一)「なご」としてなるべし
(二)兼雅が桂の別荘へ御招待申す由なり

(四)思こそ

(六)仲頼を尋ねに同行すべき事

(八)君よりも音信し給へ

(一〇)「たひ」は袈裟

♀女一宮女二宮女四宮兼雅俊隆女仲忠等桂の別荘にゆく。兼雅、犬宮を愛す。鮎を捕りて所々に贈る。詠歌管絃。

〔考異〕

(三)と開ゆーとき

(五)大將ーおとど

(七)思したれー思し立て

(九)給へりー給ふ

給ひし夜一夜外に立ちて侍りしこそ。かの君の御聲のほど近う聞えしかど、この常(二)に聞ゆる事をも然も」などて、仲忠「三條に、桂におはしまさせむと聞ゆ。一日二日涼み給へ。宮たちなどして出で給へ」と宣へば宮、女「苦しきに何方か」と宣ふ。仲忠「何か、なほ」とて、十九日ばかりにと思ほす。律師も十日ばかり有りてまかで給へば大將、仲忠「さらば、かの聞えし水尾へは、必ず然思したれ。今よりはそれよりも宣へ、これよりも聞えむ」とて御弟子の中にきぬ、物につよみて出ださせ給へり。律師には、菩提樹の數珠具したるたひなど一くだり奉り給ひぬ。かくて十九日になりて、御車十二、絲毛には宮たち、孫王の君、犬宮いだき奉りて太輔の乳母。つぎくに大人、うなる、下仕、男宮たち、右のおとど、右大將、一つに、かんのおとど、御車六して、出で立ち給ふ。左のおとども引き續きてまうで給へれば、これかれ出で給ふ。宮の御車一に立てて、かんのとの二にて、おし合せて二十ばかりなり。御前は、宮ばら、殿ばら、二かたにおし合せて、數知



〔語釋〕
(一)物かなとて」歟

(四)「などとて」なるべし

(六)兼雅

〔考異〕
(二)ありく」のりありく

(三)そへーナシ

(五)おととー男

らず。男の御車、御簾あけて、こほれ出でて、道の程遠くて、御笛吹き、琵琶弾きなどしておはします。おはしまし著きて、寢殿の南面を、御方にしつらひ、西面にかんのおとと、中には一の宮、東に二の宮、姫宮としつらひたるまよに、下り給ひぬ。一の宮、女御の君を率て奉らぬこそ効なけれ。をかしきものかな」舟どものありくを御覽じて、興じて、苦しけになくて起き居給へば、大將の君いと嬉しと思ひ給へり。

犬宮いとをかしくて出で給へば、引き入れつ。左のおとと、正頼「なほく」おはせよや。彼は、すきものするそへ言を申すぞ」などて、御簾の前によりて、萬のをかしき物を取う出であざむき呼び出で給へば、たゞ出でに這ひ出で給へるに、かしこう抱き取り給ひつ。父君、おととの見給ふをば思さねど、外住し給ふ宮たちの見給ふを苦しとおほす。犬宮は、父おととの抱きありき、をかしき物取らせならはし給へれば、おととをば怖ぢず、面嫌をもせず。祖父おととはかなしや、

〔語釋〕
(一)誤あらんか

(二)梨壺

(三)生れおちから

(五)「いぬ宮」は「いま宮」の誤なるべし、今宮は梨壺腹の皇子

(六)兼雅自身をさふ

〔考異〕
(四)居給へりいぬ宮も一居給へりおととはかしこに物し給ふ犬宮も

呼び出でて見むと思して萬のをかしけなる物、宮、内侍のかみの御髪の箱なるを探し取りて、懐に入れて持給へりけるを、取らせ給へれば、悦びて抱かれ給へり。おとと宣ふやう、兼雅「人の子は、天下にいへども、女は睦ましく、男は疎くなむ有りける。この朝臣をば、親君のとかなむ思ひつる。かよれど、この犬を今まで見奉らざりつる、かよりけるものを。この宮にさふらふものは、年頃疎く、をさく見語らはず侍りしかど、彼處に物せらるゝ兒をば、すなはちよりの見侍る。今日もこの犬をば見せじとこそは思ひためれど、故あれば、吾が君こそ這ひおはしたれ」とて、懐に入れて、奥に向きて居給へれば、人はえ見ず。おとと斯く宣ふを、大將いとほしと思して、まめだちて居給へり。兼雅「いぬ宮もいとをかしくなり給へり。起きかへりつと、人見ては笑はせ給ふ。これを常に見まほしけれと、兒の里へまかれば、翁をもゆるさず。心にまかせても見侍らずや」宣へば、母宮たちわらひ給ふ。内侍のかみ、俊隆女「あな聞きにくや。翁をば、誰かゆるさぬ。

〔語釋〕
(一) 犬官が

(六) 「さか木」は「その木」なるべし

(七) 衛府の少將などなるべし

(八) 兼雅

(一) 二人共に兼雅の妾

(二) 梨壺の許へ

〔考異〕

(一) 手ささげて「て」ナ

(二) さして「見」て

(四) しばし「し」ばしは

(五) 給へる「給」ひつる

(九) それを「を」ナシ

(一〇) そへて「そへつ」

心ときめきなりきや」と宣ふ程に、父おとどを見つけて、手さよけて這ひ出づれば、兼雅「あれはあらぬ人ぞよ。いと恐ろしく憎き人ぞ」と居隠し給へど、泣きて這ひ下りて這ひ往けば、父君かき抱きて、御簾の内に入れ給ひ、仲忠「此處にか」とてさし入れ給へば、更に下り給はず泣けば、御簾と御几帳との中に入れて、こしらふれど、舟漕ぎうたふを見て、外のかたをさしてなむ、笑ひてしばし居給へり。祖父おとど、持たせ給へるをかしき物ども、多に持たり。
かよる程に、魚いと多く、川のほとりに、いかめしき木の蔭、花紅葉などさし離れて、玉蟲おほく棲む榎、二木あり。さか木の蔭に、時蔭、松方、近正ら、今かうぶり得て、このすけどもの官人にてある参りて、幄うちて居たり。魚、荒卷、人の奉りたらむ、多く有り。おとどの、斯かる折の料とて、鮎篝火、いとをかしけに造りおかせ給へり。それをとり出でさせ給ひて、荒卷そへて、梨壺、宮の御方、中の君に奉らせ給ふ。内裏には、たゞ御消息して奉らせ給ふ。

〔語釋〕
(一) 「大將の御方の惱ましく」歟

(二) 「三條の」なるべし、俊隆女をいふ

(三) 甘言をいふ

〔考異〕
(四) 給ひて「て」ナシ

兼雅まだ大將の惱ましくし給ふに、すゞませ奉るとて物しつればなむ、聞えずなりける。さてこれは、乳母たちの料に。
とて、ことさらに手づからぞ書き給ふ。中の君の御許には、兼雅日頃はいかでとなむ。近けれど、しばしも聞えぬを、今は覺束なき心地なむ。對面久しくなりにけりや。さてこれは、一條の御曹司の、手づから取りて侍りつる。かひなく、例の人々に取り散らさせ給ふな。
君がためあまのがはらに釣すとて月の桂もをりくらしつるとなむ今日は。
とかき給ひ、兼雅「これ見給へ」とてさし入れ給ふ。北の方、俊隆女「あな言よやと思ふためとか」とてさし出で給へれば、おし巻きて奉れ給ふ。
かくて遊などこれかれし給ひて、日やうく夕かけになる程に、主のおとど土器取りて、彈正宮に参り給ふとて、

兼雅（一）ゆく水とけふみるどちのこの宿（二）にいづれ久しとすみ比べなむ
彈正宮、取り給ひて大將にさし給ふとて、

忠康水のいろは君もろともにすみ來ともわれらはひとの心やはする
大將、

仲忠水はまづすみ替るともまとるぬる今日のならしはいつか絶ゆべき
とて宮に奉れ給へば、

女（一）三千世へて澄むなる川の淵は瀬になればぞ人のこよろをも知る
彈正宮、
人はいさわが身（二）にかなふ心だ（三）に行くさきまでは知られやはする

八の宮、
我らだにむすびおきてば行く水も人のこよろも何か絶ゆべき

と宣へば大將、仲忠吾が君、よく宣はせたり。このわたりこそ、あな心憂や」と

〔語釋〕
〔一〕「宿」と歎

〔二〕「六の宮」歎

〔語釋〕
〔一〕女一宮

〔二〕「つれば」なるべし

〔三〕「さへ」歎

〔四〕今宮

聞え給へば、みな笑ひ給ふ。

かよる程に、あかき色紙に書きて常夏につけたる御文、持て参りたり。彈正宮、
「何處のぞ」と取り給ふ。使「藤壺の御方の、宮の御方に参らせ給ふ」と聞ゆれば、

忠康「我こそは宮」とて見給へば、
あて宮日頃なやませ給ふと承りつれ、如何にして参り來むと思ひ給へれど、こよ

にもまたいと苦しく侍るを思ふ給へつる程に、いと遠くわたらせ給ひにけれ
ば、七瀬の旅にてなむ。とてや、
もろともに朝夕わかす祓せしはやくの瀬々に思ひでらるよ

忘れがたくのみこそ。
とて端書に、

あて宮「これはなめけなれど、こよにある人の小き、物食ひはじめけるを、若宮の、
犬宮にとて奉れ給ひける。

〔語釋〕
〔一〕誤あるべし。『そひ文』
「えい」を「ろ」などとも書
けり

と聞え給へり。彈正宮の、御ときよくえひ給ひて参れり。御覽すれば、一つに
は、参る物にはあらで、いと清らなる、今一つには参る物なり。取りひろけて、
宮たちまるり、遊びなです。彈正宮、忠康「この御返は聞えさせよとか。さらばい
らへ聞えむ」と、いらへ給ふ人のなきに、空答をし給ひつゝ、忠康「さらば」と聞
え給へば、一の宮、「あな見苦しや、御使の見るに。賜へ、その御文」と宣へば、
なほ聞えとり給ひ、忠康「御心地苦しと宣はず」など宣へば、大將、いとをかしと
思ひて、うちほよ笑み給へば、忠康「いで宣旨書き奉らむ。見給へ」とて書き給
ふ。

女二みづから聞えさせむとすれど、なほまだ筆も取られ侍らねばなむ。日頃は、
如何なるにかあらむ、うちはへ惱ましくなむ今朝は、心にもあらぬありきを
ぞ。御文は朝夕とか。

みそぎせし瀬々の瀧つせ思ひ出でわがころもでも忘れざらなむ

〔二〕我に書けと仰せらる
るか

それにも劣らぬ。犬にと宣ひつる物は、子の徳見つやとて、大將ひとり皆食
ひつめり。などかまるには賜はぬ。これさへ妬うこそ。

とて出だし給へば、大將かんのおとどに、仲忠「まうけの物や侍る」と聞え給へば、
單がさねのほそなが、小袿、あはせのはかま、具して奉れ給ふ。もて出で給ひ
て、かづけさせ給ひて奉れ給ひつ。

鮎の御使ども、いととく歸り参りて、御消息どもみな聞ゆ。御返事ども有り。中
の君は、

中君 近くても同じおほつかなさなれば、御文はさて手づからとぞ。さればこそ年
頃は、

わだのはら餘所になりにし魚とりはくもいづる原を誰かあけけむ
取り散らすなどあるは、ひとり言よく。

とあり。おとど見給ひて、兼雅「はかなし者は、例の乳母に取らせて、一つも食は

〔語釋〕
〔二〕中の君をいふ

〔語釋〕
〔二〕女二宮

〔四〕誤あるべし、頭の二本「かはの」

〔考異〕
〔一〕してありしつゝあり

〔三〕ちひつゝちひつゝ

でぞあらむ」とつぶやき給ひて、兼雅「これ見給へ」とてさし入れ給ふ。北の方見給ひて、後陸女「けにや」と宣ふ。

かくて、御前ごとに物まるる。御折敷どもして、わざと清らなり。鮎さまづくに調ぜさせて、いと多く、御たちの前に、衝重して有り。大將、宮の御許にまうで給ひて、仲忠「物は聞召しつや。何をか参るべき」と聞え給へば内侍のすけ、「物も聞食さず。削り氷をなむ食す」大將、仲忠「あな恐ろしや。いみじく忌むものを」宮、女二「かよればこそ、いや増りつれ。氷食はでは、いかでかあらむ。さきに、物忌むといひつゝ、食はまほしき物も食はせず」と宣へば、仲忠「あな心憂や。食物むつかりを。醫師侍り。言ひて聞えむ」とて出で給ひ、典薬頭に問ひ給へば、聞ゆ、典薬「めさぬにや。過し給ひぬる時は、あつく冷やかなる物を驚きて御胸やませ給ひ、まだしき時はいとあしき物なり」と申せば大將、仲忠「斯くなむ」と聞え給へば、女二「あな侘しや。いと暑し」と宣へば、仲忠「團扇も参らせむ」と宣ひて頭

のところは、かのほとり、おとどより西によりて、屋あるをしたり、そこに氷召せば、小さく割りて、蓮の葉につよみて、様器にするて、近江守もて参りたり。大將とり給ひて参り給へば、少しまるりて、女二「辛うじてよかりつる心地を、惑はすかな。此處にな來そ。去ね」と宣へば大將笑ひて、仲忠「前には、かくも宣はざりしを、ものの罪などにや」と宣へば内侍のすけ、「度々の事に侍れば、内裏の御方は、大宮の御時にはいとみじくなむ。この御時には、例よりも違はせ給ひもおはしまさざりき」と聞ゆ。犬宮這ひ出で給ひて、物どもに取りかよりて、掴み毀し給へば、父君、仲忠「この人こそ、いとまさなけれ。かよる業は、女はせぬものぞや。男おほかる簾のもとなどに、這ひ出づるものかは」と宣ふ。夜に入りぬれば、燈籠かけつゝ、御殿油まるりわたしたり。

亥の時に、「御はらへ時なりぬ」と申す。おとどの壇の上より、水いだして、石だたみのもとまで水せき入れて、瀧おとして、大井川の如く、簀子には、御簾かけ、

御床立てて御屏風ども立てたり。そこに、宮三所出で給ふ。かんのおとどは床もたてで出で給ふ。高欄におしかよりて御階の前に、おとど、宮たち四人、殿々の御たち、こなたかなたに居たり。陰陽頭、御穰ものして、仕うまつる。馬ども木綿つけて引きたり。御衣脱ぎ給ふ。一二の宮、唐綾のかいねり一かさね、姫宮御小袿、かんのおとど、白き緑のひとへがさね、男宮たちも脱ぎ給ふ。宮たち、御はらへ仕うまつり侍れば、夜更けぬ。御遊し給ふ。一の宮和琴、二の宮箏の御琴、かんの殿琵琶。宮たちおはすれば、御几帳の後におはす。一の宮、女二「いと暑し。なほ此處にを」と聞え給ひて、御几帳の中におしやりて、女二「いとよう侍る」とて、御床におしかよりて、琵琶ひき給ふ。し給はぬ、はたまうけ給ふ。大將、仲忠「こよもとは遠からず」と男たちの御あそばすにも聞え給へば、やがてならひ給ふやうなり。かよる程に、十九日の月山の端よりわづかに見ゆ。かんのおとど、扇に書きて一の宮に奉れ給ふ。

〔語釋〕
 (一)「侍れば」は「給へば」なるべし

(二)脱文あるべし

(三)脱文あるべし

俊隆女木綿かけて襖をしつよもろともに有明の月を幾夜待たまし宮見給ひて、

〔考異〕
 (一)おもーかは

女一ながき夜の有明の月も待つべきをみそぎの神やいかどと思ふ

二の宮、
 女二かくしつよ月をし待たば浅き瀬のみそぎのかみも何か知るべき
 姫君、

(二)あそび給ふ夜明けぬればーあそび給ふにあけぬれば

女四月まつと桂わたりにさ夜ふけてひく琴の音はかみも聞くらむとあるをかんのおとど、大將に奉り給へば、また取りて、

仲忠かみも聞けおもがはりせず八百萬世々みそぎつと思ふどちへむ

とて、人にも見せでさし入れつ。かくて、夜一夜あそび給ふ。夜明けぬれば、御

簾の内に入り給ひぬ。

大將、銀の箏四つ、脚つけさせて、鑄物師ども召して作らせ給ひて、跳びあが

自仲忠鮎をあて宮腹の若宮に奉る。若宮の御文を見て仲忠その筆蹟を褒む

〔語釋〕

〔三〕往來歟

〔四〕籤歟

〔五〕未考、二本「かんてう」

〔六〕正頼まだ此處にありの意歟

〔考異〕

〔一〕一籠一ナシ

〔二〕御もとに―御もとに

〔七〕おはします―おはしますま

る魚ども取らせつ。鮎一籠、鯢一籠、いしぶし、小鮒入れさせ、荒卷など添へさせて、藤壺の若宮の御もとに、手づから、わうらひ月日書きて、せむたてて、御名し給へり。かたはらに、

仲忠君がためしづけき空にすむ魚をけふより見せむ千世の日ごと

と書きて、蘇枋籤にして、赤き色紙に書きて、瞿麥の花につけたり。かてうなる

人を召して、仲忠「これ、三條の院の南宮に参りて、若宮の御方に持てまるれ」と

宣へり。御使持て参りたれば、若宮見給ひて、若宮「西の對になむ」とて奉れ給

へれば、大殿まだおはします。君たち、御方見給ひて、「此方わたり給へ」と聞え

給へば、おはしたり。「かく書き給へ」とて、このやうに書かせ給ひてかたはら

に、

君がかくとりそめければ山川のあさぢぞおきの上に見えける

教へつと書かせ給へれば、いとをかしけにかき給ふ。御使に祿賜びて、奉れ給

〔考異〕

〔一〕給ひつるかな―給へるかな

〔二〕など―出で給ふ―なぞかくてその日一日すまみ給ひかせ

〔三〕藏人の少將の君の御許より―藏人の少將の御許より―宰相中將の君の御許より

〔四〕近澄、女二宮の乳母に消息す。

ひつ。おとど御前に人召して、調せさせ給ひて、興じてまるる。藤壺は、鮎ならぬ魚擇りて参り給ふ。

かくて御使参りければ、青き色紙にかきて、桔梗につけたり。見給ひて、女忠「い

とかしこうも書き給ひつるかな。只さいつ頃こそ、手本召しよかば、奉れしか。

いとよう似させ給へり」と宣へば、右のおとど取りて見給ひて、兼雅「なほかしこき

君なり」宮、女二「さいつ頃見給へしかば、手をこそならひ居給ひしか」大將、仲忠「か

たちもいとをかしけにおはすや。坊にも、内裏の宮、若宮よりは、この君をこそ。

いとらうくしく故づきてぞ生ひ出で給ひぬべかめり」など宣ひて、おとどはか

しこに出で給ふ。

日暮るれば鶉飼はせなどし給ふ程に、藏人の少將の君の御許より、二の宮の御乳母

の許に、女よそひ一くだり、白張のひとへがさね包みて、御文あり。

近澄昨日のつとめて、消息聞えたりしかど、いそぎて出で給ひにければ。かの聞

〔語釋〕
〔四〕近澄が私の爲に衣類の世話をなし下さるゝは恐縮なり

〔考異〕
〔二〕川邊に―なほともに

〔二〕御返事―御返

〔三〕如おはしまさひて―どとくおはしまさひて

えし事、宮にてはいと難かるべき事を、宮たちも御遊せさせ給ふべし、川邊にすゞみ給ふめる宵の間にたばかり給へ。昨日のつとめて、追ひてまうで来て、このわたりになむ、然る心して侍る。さてこれは、いと暑き日なめるを、脱ぎかへ給へ。

とあり。乳母見て、乳母「あな恐ろし。人もこそ氣色見れ」とて、里より洗ひに遣りたりし物持て來しさまにて、いとよう持て隠して御返事、

乳母かしこまりて承りぬ。昨日は、左のおとど参り給ひて、いそがし聞え給ひしが、いととく出でものし給ひしなり。宣はせたる事はあな恐ろしや。宮に

おはします時よりも、宮たち、垣の如おはしまさひて、夜は御めぐりにおは

しまさふめれば、これかれだに、え近くも参らずなむ。いと忝く、旅にお

はしますなるを、はや歸らせ給ひぬ。人に氣色見えさせ給ふな。さて賜はせ

たる物は、あな忝や。かく、御櫛匣殿をせさせ給ふなむ。いかでこの御衣

は御目にもかけさせ奉りてしがなとぞ思ふ給へる。まめやかには、宮にわたらせ給ふなむと聞えさせむ。

と聞えつ。

かくて明けぬれば、一日すゞみ、鮎ひかせなどし給ひて、かくてその日の夕がた歸り給ひぬ。男宮たちは、あるじのおとどの御馬、鷹など奉り給ふ。女宮たちに

は、黄金のかうこの箱に、萬のあり難き物ども入れて、一の宮よりはじめ奉り

給ふ。犬宮には箱の小さきに、よべの物入れて奉り給ふ。乳母たちには、装束一

くだりづつ賜ふ。御たちの中に鬘の具など出ださる。

かへり給ひて、右のおとど梨壺の御はらへに出ださせ給ふ。大將御車ども五つばかり出でたて奉れ給ふ。宮たち君だちなど参り給ひ、逍遙などをかしくし給ひ

て、かへり給ひて、二日ばかりありて宮、東河に車三つばかりして出で給ふ。お

とどは出で給はず。睦ましき人々して出で給ふ。近江守に宣ふ、兼雅この東河

とどは出で給はず。睦ましき人々して出で給ふ。近江守に宣ふ、兼雅この東河

〔語釋〕

〔一〕女二宮の

〔二〕近澄の來り居らるゝ由を女二宮に申上げん

〔三〕かくて―衍文歟

〔五〕宮たちには―なるべし

〔六〕皮籠の箱歟

〔一〇〕兼雅

〔一一〕仲忠

〔一二〕女三宮

〔考異〕

〔四〕夕がた―夕がたに

〔七〕かうこの―やつこの

〔八〕には―は―ナシ

〔九〕鬘の―鬘物の

自梨壺あて宮等處々に被

す

〔一一〕五つ：逍遙など―

五つばかりして奉り給ふ

殿の若宮などして出で給

ひて逍遙など

〔語釋〕
 (二)女三宮は
 (三)正頼
 (五)「一つに」は「一に」にてあて宮の車の最先に遺れとの意なるべし、「一本」御車をまづひとつに

(七)あて宮の御殿
 (考異)
 (一)物せよと仰せよ―物せさせ給へ
 (四)程―程に
 (六)哀と思ふべし―哀に思ひて
 (八)給ふつらつらに―つらつらに

梨壺腹の皇子の東宮に立つべき嶋。正頼等の心痛。
 (一)あて宮が御返事を
 (三)東宮の御文に對して御返事のなきをいふ
 (四)東宮が
 (五)正頼
 (六)藤壺腹の皇子東宮になり給はゞ私を東宮付の役人又は帶刀にして下されなど
 (八)藤壺腹第一の皇子
 (九)正頼が
 (二)あて宮の殿
 (一四)分別づきて來りし我が了籠をも直接に申上げんと
 (考異)
 (一)誤あるべし
 藤彈正宮あて宮を訪ふ。
 (七)宮づかさ帶刀―宮づかさ藏人殿上人帶刀
 (一〇)なし―なく
 (一一)七月の中の十日に―七月中の十日ほどに
 (一三)しば―志をも

に、祓しに物すなるを、東河の水に近からむあたりに、車立てさせて、鮎などくふべき様に物せよと仰せよ。あやしう若き子のやうに、人のするに隨ひたる人なれば、心苦しくなむ」とて出だし立て給ひてかへり給ひぬ。

〔畫詞〕 ことばは三條殿。

かくて、藤壺も、辛崎に御祓し給はむとて、大殿ももろ共に、君だちさながら、御供の人々多かり。御車ひきつゞくる程、大宮、「あなたの御車を一つに」と宣へば、藤壺、あて宮「いかでか先」と宣ふほどに、御車ども二方にひき續けて立ちわづらふ。おとど、正頼「なほ彼を促せ」とて藤壺の御車を一に立てさせ給へば、みな人々と哀と思ふべし。辛崎におはしまして、御祓いかめしうし給ひて歸り給ひぬ。大殿もかへり給ひぬ。此方には例の番むすびて、君だち宿直し給ふ。かくて經給ふほどに、東宮より、おそく参り給ふとて、ある時は哀に心苦しげに、ある時は憎げに怨じ給ふ。ついでに隨ひて御使あり。その御使の藏人の申す様

藏人「梨壺のなむ、坊には居給ふべき、と申しなりにためり。まつりにも、屢まうのほり給ひ、晝はことにわたらせ給はず。日頃はことに御遊もし給はず」と聞ゆれば、ある時は一行二行と聞え給ひ、ある時は聞え給はず。かよれば、皆人の申す、「あな異様や。またなき例をもし出で給ふかな。かく侮られ給ふ事」とそしり申す。殿には、大殿の御方にも藤壺の御方にも、今より宮づかさ帶刀など申す人おほかり。若宮の御方には、人々参り込みつと、公のやうになりておはしますを、見奉り給ふまゝに、おほし嘆くこと限なし。山々寺々に、修法おこなはせ、神佛に申し給ふ程に、七月の中の十日になりぬ。ある夕暮に、彈正宮、西の對に参り給ひて、御物語きこえ給ふ。忠康「かくて物し給ふ程に、しばし聞えまほしけれども、物騒がしう物し給ふめれば、いとおとなしくなりまさり給ふなりし心地も、みづから聞えむとせしを、あえものの程過しつるになむ」御いらへ、あて宮「あえ物は、年隔ててこそは。こよにも徒然と侍

〔語釋〕
(一)「さ」は「さ」の誤歟

(二)方々へ遣はさるる文をたまには私にも下されたし

(三)賜ひつべくや歟、一本「給へつはや」

(四)我を望にせんとす人

(五)眞面目男

(六)心憎くて「て」ナシ

〔考異〕
(一)凶兆ありし故
(二)三條殿なるべし、實忠の妻子をおきてある處なり
(三)實忠の妻子
(四)わざとまだ迎へ取らぬ様に偽り言ふ也
(五)三條
(六)實忠の妻
(七)實忠が
(八)袖君なり
(九)考異
(一〇)柱の「の」ナシ
(一一)居たり居給へり

るを、誰々にも聞えまほしけれど、皆こそ思し忘れにたれ」宮、忠康「さらに忘れ聞えず。かくて侍るをば、何の心ありてとか思す」あて宮「いでなほ心憎くておはしますとこそは」宮、忠康「このあまたし給ふわざ、時々はこよにもして賜ひつべくはや。斯くてやは」君、あて宮「いと見まほしくて、數多物せらるるを、何かは」宮、忠康「まめやかに、年頃かくては侍るを、こよかしこにも物せよといふ人侍れど、御心のつらかりしにのみ、忘れ難くて、さやうの心も思ほえぬに、なほ昔の様に思ほさで、忍びて知る人にはし給ひなむや」と宣へば、あて宮「あやし。忍びずとも、然て知らぬ人によは。かく聞え承るも疎からねばこそ」など聞え給ふ程に、左大辨の君、師登「いと疎々し」とて參り給へば宮、忠康「生憎や。このうるはし者は何しに來るぞ」とて聞えさし給ひつ。かくて新中納言、實忠「藤壺ものし給ふこと有りしを、かくてあらば物しともぞ思す」とて小野より物し給ひてけり。民部卿、實正「いと嬉しく物し給へり。遅くお

はせば、御迎にまうでむとなむ。こよはいとかく便なきを、日頃侍る所に物のさとしなどせしかば、さいつ頃二條殿になむまかり渡りて侍るに、其處におはして、聞えしやうに、内に入りておはしませ」と聞え給へば中納言、實忠「何か。こよにもしばしは物せむ。尋ねむと宣ひし人は如何は」と聞え給へば、實正「いと暑く侍りつれば、程遠くては物せず。今少し涼しくなりなむ時」などつれなく聞え給ひて、

「なほいざ給へ」とて一つ車にておはす。下りてもろ共に入りおはするを、北の方など見給ひて、おどろきて、御几帳立て直しなどす。まづ民部卿入り給ひて、實正「あな見苦し。こは何ぞ」とて御廉あけ給ひつ。あるじだちつい居給ひて、實正「なほ、こよには恥ぢ奉る人もなし」と聞え給へど、つよみてえ入り給はず。民部卿、實正「なほ入らせ給へ。女だに恥ぢ聞えぬ所に、いとひがしく」と聞え給ひて御圓座さし出で給へば、いと澁々に入り給ひて、いとまめやかに見給へば、奥のかたに小き几帳立てて、人あり。柱のもとに若き女のいと清らなる居たり。

〔語釋〕
(一)袖君を實正の妻と思ひ違へたる也、實正の妻はあて宮の姉三の君

(二)袖君

(四)袖君の

(六)見つめて

(七)實忠妻は實忠が娘を見知れるならんかと恥かしく思ひたれど實忠は氣付かずして詞もかけず

(八)今は斯くて一歎

(九)「と」衍文なるべし

(一〇)實忠妻

(一一)舊妻に

〔考異〕

(三)見給ふを―見給ふを

(五)いと一ナシ

(一一)外に―上に

中納言いと怪しく、睦まじと言ひながら、つれなくとも居給へるかな。これは、藤壺の御姊なれば、かく良きぞ、と見居給へり。姫君は、とまれかうまれ、わが親に見え奉らむ、親の御顔見むと思ほして、伯父おとど見給ふを物にも思ほしたらで、さし向ひて居給へり。中納言は、容貌のいと美しけなる、まほらへて居給へり。女君は、見知り給ふと恥ぢたれど、物も宣はず。姫君、父君のえ見知り給はぬをいとかなしと思ほして、え念じ給はで、つぶくと泣き給ふを、民部卿いと哀と見給ひて、實正「思ほし出でずや」と聞え給へば中納言いとまめにて、物も宣はず。民部卿、實正「この君を、いとあさましく、斯くなり給ふまで見奉り給はねば、思ひわびて、かくおはしまさせつるなり。今、斯くておはしませ。世の人のあらぬやうにては、え長くは物し給はじと。御髪も、斯くぞなりたる」とてかき出でて見せ奉り給ひて、實正「今一所も、かく此處になむ。天下に外にもとめ給ふとも、勝る人しもえ侍らじ。實正らを人と思すものならば、なほかくて物し

〔語釋〕

(二)實忠が

(三)洗濯

(四)實忠の世話を思ふ様にすること能はじ

(五)舊妻には構はずともよし

(六)袖君

(八)「もとろへ」にたれど一歎

〔考異〕
(一)まさご君の―またまさご君の

(七)物参る仕うまつる人は―物参り仕うまつり人は

給へ」と聞え給ふ。實忠「年頃見ざりつるほどに、大人にこそは」と宣ふまよに泣き給ふ。昔の人々あつまりて泣く。まさご君の御乳母の前なるを見給ひても、中納言いみじく泣き給ふ。さても怪しう、心にもあらで來たるかなと思ひ給へり。民部卿、實正「故殿のおはしましと時こそ、女親のごと、折々の御すましの事なども、御口入れ給ひしかど、今は女同胞とおはするは、さやうに心しらひても物し給はず。實正らが如きは、自らの事にもかなふ人し侍らねば、志は有りながら、えおほしき様にも仕うまつらじ。かく世中をおほし離れにためれば、母君は、よしな知り給ひそ、この君を御後見にて、よろづの事さやうに思ほして物し給へ」など聞え給ひて、御供の人々、所々にするさせ給ひて、もの賜はせなどして、實正「遠くよりおはしましつるまよにて、率て奉るなり。物まるれ」と宣へば、黒き御臺一よろひ、精進の物、いと清らにして物まるる。仕うまつる人は、そで君、まさご君の御乳母、おとなひにたれど、かたち宿徳にてあり。童なりし人ぞ、大人

〔語釋〕
(一)實忠を

(二)實忠が心に舊妻を許す也

(四)父季明

(考異)
(三)御うちは一御うちき

になりて、若人にてはありける。童ばかりぞ知らぬはある。かくて物参り、御酒など参りて、山里よりわたり給ひし日、しつらひ置かれたる御方に、「彼方に入らせ給ひて、いと暑きに、休ませ給へ」と聞え給ひて、入れ奉り給ふ。昔持てつかひ給ひし調度、いさよかに手習し給ひし反故など、とり散し給ひなどして居給ひしまよに、他御調度の清らなる、あまた添はりたれば、無き物なくしつらひ置かれたり。中納言、なほ有りがたき心ばへありかし、親もなくて、我のみ頼みたりし人の、子ども持たりしを見棄てて年頃有りつるに、かく一つも失はで有りける、など見給ふ。こなたにも、むかし見給ひし人々の参りて、御衣とり懸け、御うちなど参れば、たゞ昔の様なり。民部卿は、女に掣取したらむやうに、居立ちて、殿へも物し給はで、たゞ此の君の事をいそぎ給ふ。新宰相も、いそぎ参り給ひて、實頼、實頼は、殿かくれ給ひてのち、夜晝かなしき事を思ひ給へ嘆きつるに、今日なむ、その心も忘れて、嬉しう思ひ給ふる。なほ斯くて經給はど、すべ

〔語釋〕
(一)兄弟なれども實忠を親の如く君の如くにして仕ふべし

實忠舊妻に逢ひて昔を語る

(二)實正實頼

(三)舊妻の方に

(四)思出したらば又も來べけれど度々は來らじとの意歟

て同じき同胞と聞ゆとも、親君と仕うまつらむ」とて一所ながらこよに物し給ひかしづき仕うまつり給ひつと、二三日經給へど、北の方にも姫君にも、まだ物聞え給はず。
かよる事を、内裏にも東宮にも聞召して、「らうたく、徒らになりぬと聞きつるを、今は宮仕せむと思ふにやあらむ」と宣ふ。左のおとど、いみじう悦び給ふ、年頃も聞えつるを、わが逢ひて、さて物せよと言ひしかばにやあらむ、と思ほす。
中納言、世の人、藤壺なども心ならずや思ほすらむと思して、四日ばかりありて夕さりつ方、此方にわたり給ひて、姫君に聞え給ふ、實忠「いと珍らしく對面したりしかど、見奉りしにも、己が心からは言ひながら、よろづの事哀に覺えしかば、まめやかにと思ひてなむ。年頃、いかでか今更にはと、哀にかく物しにければ、それも心憂くおほえて、此のわたりには、思ひ出でられむによりてなむ。多くはえ」など聞え給ふ。姫君、ともかくも物も宣はで、たどつくくくと泣き給

〔語釋〕
(一)誤あるべし

(二)あれがそぞ君母子の
かくれがなりしと

(三)實正の

(五)父季明が

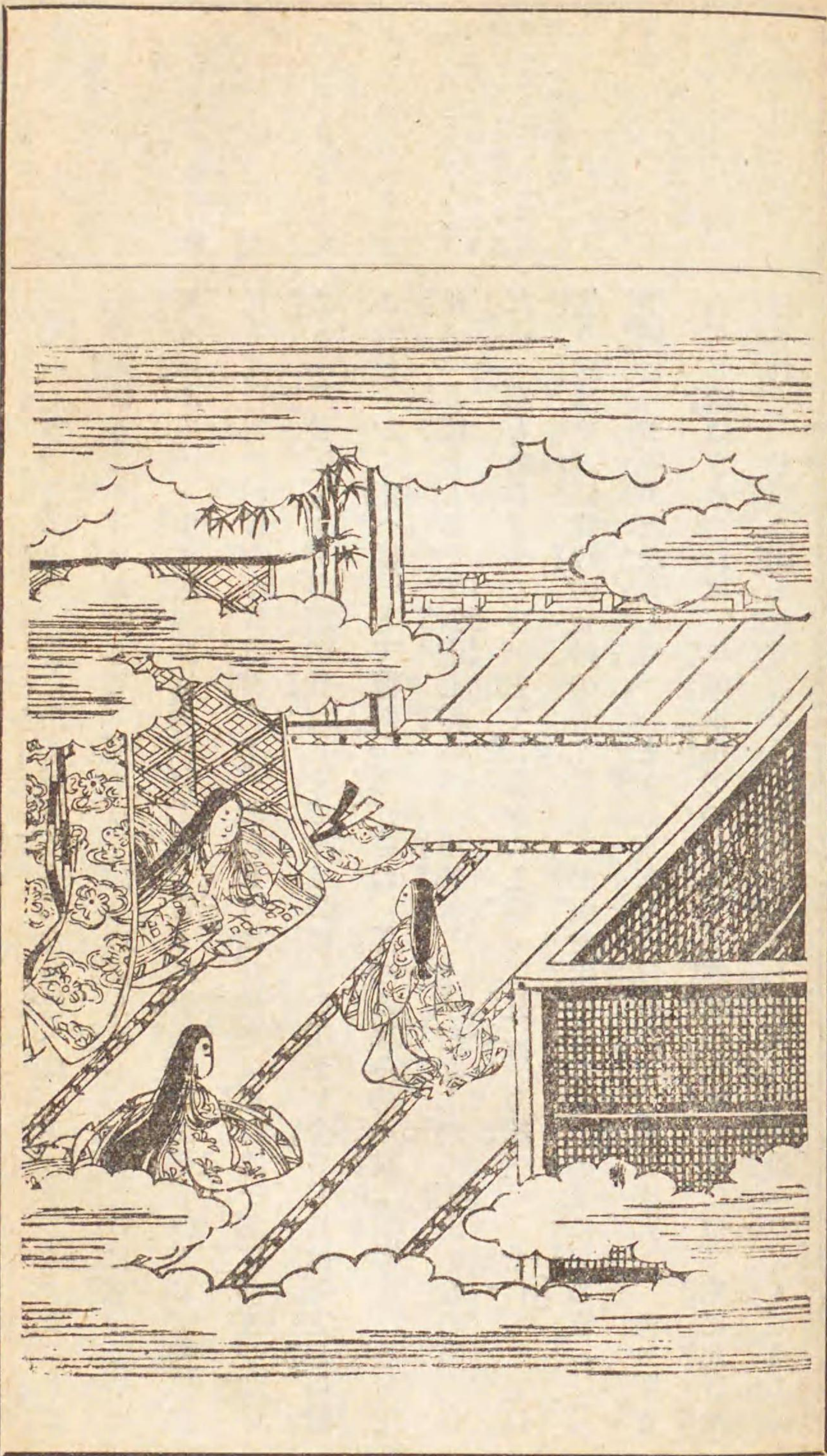
(七)實忠が

〔考異〕

(四)いて何かは—いかで
何か

(六)をも—ナシ

へば、實忠「なほ年頃有り經つらむ物語をこそせめ」など宣へば、そぞ君「年頃、戀し
くかなしくのみおほえ給ひつるを、辛うじて、對面賜はりたれば、夢の心地して」
など聞え給へば、實忠「世の中にえ久しかるまじき心地のせしかば、法師にもなり
なむと思ひて、山里に、年頃は」そぞ君「民部卿かなたに物し給ふ所にて、尋ね聞え
むばかりなかりしかば、折節に思ひ出でつよ、いかでとのみ思ひながら、年頃え」
など聞え給へば、實忠「紅葉見むとて、知らぬ人もせし時に、まうでたりし所な
む、其處と、殿かくれ給ひし程に、卿の君の宣ふになむ然なりとは知りなき。い
と里離れては有りけむ」など多くの御物語し給ひて、實忠「母君は何方にぞ。物聞
えむ、と聞え給へ」と聞え給へば姫君悦びて、北面におはする所にまうで給ひ
て、聞え給へば、北の方、實忠妻「いで、何かは」と聞え給へば民部卿、實正「かけの
ごと添ひてと宣ふをも、斯う宣ふをも聞き給ひて、吾が佛など斯うは宣ふぞ。消
息し給はずとも、まうでて對面し給へ、とこそは思ひつれ。御上を思ひ聞ゆるに



〔語釋〕
〔一〕實忠

〔二〕我があはゞ實忠は彌出家の志を堅くすべし

〔三〕「聞え給ふめりしだに」なるべし

〔六〕「見たてまつれど」歎、我は昔とかはりはてたる様にて其方に對面すれど「の意なるべし、一本見たまへれど」

〔考異〕
〔四〕几帳を「を」ナシ

〔五〕にも「も」ナシ

しもあらず。この君の、世に惜まれて徒らになり給へば、とさまかうさまにたばかり聞ゆるなり。早おはして、何心なく語らひ聞え給へ。おほろけに思ひてやは斯う聞ゆる」と申し給へば、實忠妻「いでや。こよに對面せむにぞ、いとど、鷲の山にも思ひ入り給はむ」民部卿、實正「おなじうは、戀てふ山には」と聞ゆるを北の方うち笑ひて、實忠妻「年頃の住居こそさやうには。いでや、今さらには、と思ひ給ふれど、かく宣へば」とて薄鈍の單がさね、黒つるばみの小袷奉りて、まうで給ふ。几帳おし出でて對面し給へば、中納言、實忠「むかし恥ぢ聞えしなめりしにだに、然もあらざるを」とて几帳をおし遣りて見奉り給へば、昔にもことにお劣り給はず、仁壽殿の女御のやうにて、面瘦せ給へるしも、あてに見めきたり。中納言、實忠「あな珍らしや。いと久しうなりにけるかな。あさましう、あり所も知らせ給はざりつれば、年頃山里のつれなく、春秋の夜寒などには、常に思ひ出でられ給へど尋ね聞えむ方なくて、ありし人にしもあらで見給へれども、そこに

〔語釋〕

〔一〕まさご君の亡くなりたるをいふなるべし

〔二〕給へれば」歎

〔四〕季明薨去の時をいふなるべし

〔五〕北方の無事なる由を聞きたり

〔七〕父の喪中になりし故

〔考異〕
〔三〕そめにし心地の「そめにしをなほ心地の

〔六〕聞きし「きこえし

〔八〕如何にぞ「いかんぞ

は變り給へることもなく、たゞ哀なる人のみなむ」とて扇に書きつけて奉り給ふ。

實忠妻「井よりかへりてみれば故郷のいま雛鶴ぞまち見ざりける」とて奉り給つれば、北の方泣くく、

實忠妻「むかし見しやどもの山に荒れましてかへらぬ鶴をまつも枯れぬる」と宣ふをいと哀と思ひて、實忠「まめやかに、昔怪しきそごろ心のつきて、あく

がれそめにし心地の、鎮まらざりしかば、世にもあらじと思ひて、あやしき山里に籠り侍りて、親の御許にもまうでざりき。唯此の折にぞ、まうでて見奉りし。

其處にてなむ、こよには平かにおはしますなど聞きし。すなはち思ひになりにかば、今まで。すなはち聞えむとせしかど、心ふかき所つき給へりしかば、如何にぞ思ひつよみてなむ」北の方、實忠妻「年頃は、いと哀と物おほして居給ふ、と承

(一) 舊妻を
 (二) 不詳、一本「さえ」を「さし」とかけり
 (三) 實忠が自分の住居の方へ
 (四) 「物し給はずば」にて自分たちがついて居ねば實忠が小野へ歸るかも知れぬとの意なるべし
 (五) 實忠の處につききりにして

仲忠、實忠を訪ふ。正頼、實忠を訪ふ。

りつる。わがことにやと思ひ知られて、いかで訪らひ聞えむと思ひつれど、それにつけても、思ほすことやあらむ、とてなむ」中納言、實忠「何かは、今までは。暫しこそ、人を憎しとは思ひしか」などおほく御物語、年頃ありつる事など。かたみに聞え給ふ。中納言、實忠「いとよかめり、かくて物し給へば。ことにはさえついつけても、そへて物し給へば、煩はしうて、来るをりあらば、親同胞のごと語らひきにたれば、恐ろしとこそ思さるらめ」など夜更くるまで聞え給ふほどに、夜さりの御臺参り物など聞食して、おほん方にわたり給ひぬ。
 (三)
 かくて御同胞の君たちは、物し給はず小野へや歸り給ふとて、北の方たちの御許に、「かよる事のあればなむ」とて、夜も晝も物し給ひて、人々の参る物なども、皆「持てまうで來」と宣ひて、内にも奉れ給ひ、此方にも取り散らし給ひつよ、人にも賜ひなどして、物し給ふほどに、昔見かたらひ給ふ人は、上達部も、殿上人も、めづらしがり悦び、あるは興ある物など奉れ給ふ。右大將殿も夕暮のすど

(一) 實忠の妻のかくれすみし志賀の山本

(三) 忠澄祐澄

(四) 實正實頼實忠

(二) もとの御妻一本妻

(五) 思ひ一思ふ

しけなるに物し給ひて、仲忠「ことに斯うて物し給ふと、只今なむ承る。年頃おはする所にまゐり來むと思ひ給ふれど、とかく参らでなむ。然るは、かの見付けし山里にも、いかでもろ共にとぞ思ひ給へるや。かの人は、おはしてとひ給ひきや。誰とは聞き給ひつるや」と宣へば中納言、實忠「年頃は、尋ねとはせ給ふとこそ、深き山人には」と申し給ふ。北の方、姫君などは見給ひて、かの山里に物し給ひし人にこそはあめれ。見しよりも、いと宿徳に清けにもなりにたるかな、誰ならむ、と見給ふ。かくて物語などし給ひてかへり給ひぬ。
 (二)
 かよる程に左のおとど、君たちに、正頼「新中納言もとの御妻にかへり給ひて、このたど東に物し給ふなるを、訪らひに物せむ。故殿「徒らになすな」と宣ひしものを、かく世づきて物し給ふなる悦申さむ」と宣ひて、左衛門督、宰相中將などしておはしたり。民部卿、おどろきて、三所ながら出でて御迎して入り給ひぬ。おとど、正頼「かくて物し給ふとなむ、一日承りし。すなはちと思ひ給へし

〔語釋〕
(二) 誤脱あるべし

〔考異〕
(一) 言ひ一ナシ

(三) 空にて一空にし一こ
くにて

(四) こころを一こころは

を、いと暑く侍りてなむ。いと嬉しく、思ふやうにておはするを、限なく悦び聞ゆるを」民部卿、實正「あからさまに、妹とぶらひに物し給へりしを、言ひとどめて侍るなり。なほ山里になむ、いと忘れ難けに」おとど、正頼「御心と、かくて物し給ふにあらすやはとて、かねてまうでけるよろこびにこそ、祈などする時さいはひといふ事あるは」とてみな笑ひ給ふほどに、内裏より、精進の御肴して、心こといいと清らにて、御酒まるり給ふ。中納言に土器さし給ふとて、

正頼忘るなと契りおきけむたらちねも笑みて見るらむ雲の上にて

中納言、賜はりて、

實忠契りけむ雲井をかつは忘るれば空にて君が見るをしぞ思ふ

民部卿、

實正おひのほる雲も知るらむ山里にたづねいでつゝ契ることよろを

宰相

〔語釋〕
(一) 實忠が妻と別居したるをこよ

(二) 「など」としてなるべし

(三) 正頼が實頼を以て實忠の妻に言傳する也

〔考異〕
(四) 聞え給ふ一ナシ

實頼昔のいまの雲ははれぬらむ契りし宿にありと見つけば

左衛門督、

忠澄雲よりもおのが山々年へつる君をばたれか嘆かざるべき

宰相中將、

祐澄山里に行きつゝ見ればうちながめひとり經しこそ哀なりしか

民部卿、實正「生憎や。同じ心にと宣へば、「いらへするはと仰せられつれば」な

どて御酒度々きこしめす。御物語など久しくし給ひて、新宰相の君して、内に御

消息聞え給ふ、實頼「いと嬉しくて物し給ひけるを、喜び聞えさせに。いまだに隔

て聞えず承らむなどやうにてかへらせ給ふ」と聞え給へれば、北の方、土器に

かく書きて、瓶子もたせて奉り給ふ。

實忠妻 巢立つ子とまだ知らざりし雛鳥の枝はいづれぞ知らず顔にも

とあり。おとど見給ひて、正頼「けにいと理や。されど、

〔語釋〕
〔二〕自邸へかへり

②實忠、あて宮と文を贈答す。

〔考異〕
〔一〕處一頃
二すなはち一のち

正頼鳥の居るおなじとぐらはとひしかど古巢を見てぞとめすなりにし」
とて奉り給へば中納言何事ならむ、かたはらいたし、と思す。かくて民部卿、
凶事の處なれば、かづけ物はせで、御供の人々に腰插などし給ふ。おとどかへり
給ふとて、正頼「かくてのみを、今は物し給へ。さておはせば、かう近き程なるを、
さし歩みつゝ参り來む」とておはしぬ。

かくて十日ばかり有りて、民部卿なむ、夜は殿へおはし、晝はこよにのみおはす。
中納言は藤壺いかに聞き給ふらむと、しづ心なく思ほして、下の殿へ還りなむと
おほせど、晝は萬の人々参りて、故殿の人々もなづき奉りなどし給ひ、仕うまつ
る受領なども、まめやかなる物、菓物など奉れば、時の所のやうなり。藤壺に御
文奉れ給ふ。

實忠御消息聞えたりしすなはち、遠くまかりて、山里制せさせ給ひしかば、時々



〔語釋〕
(三)其内定めし内裏へ歸り給ふべし

(四)「は」は「と」の誤なるべし

(五)「生ひ直り」の意歟

〔考異〕
(一)あからさまと一あからさきにと

(二)なむ一ナシ

(六)おはせば然る一おはする

はと聞えさせしかば、一日、あからさまと思ふ給へてまうで來しを、思の外なる事も侍りてなむ、自ら聞召すらむ。

故郷にありとは人に知らるれど涙にのみぞ浮寐せらるよ

いつしか内裏にも。さらば時々、と宣はせしかばなむ、今日までもかく近き程に侍るを、ありしやうなる折もいかでかとなむ。參らせ給ひなば何時を何時とか。

は聞え給へり。御かへり、
〔四〕あて宮日頃は、ちかく物し給ふと承りつれば、おひなをりをもとなむ。時々と聞えし事は、なほ然てのみおはせば然る折も有りなむ。とみに參るまじくなむ。

そこにかくありと聞ゆる今よりぞ言ひてしことも思ひ知らるよと聞え給ふ。

〔實忠夫婦の情舊に復す。實正、實忠の文を見て其の情を悟る。〕

〔語釋〕
(一)仲忠をいふ

(五)我が志賀にかくれ家を尋ねし時なぞ名乗りてはくれざりしぞ

〔考異〕

(一)給ひつる一給へる

(二)にてぞありしそれは一にぞありしこれは

(四)思ふ給へつゝ一覺え給ひつゝ

中納言いと花やかにもてなされて、かくてもつきなからずや、山里につれぐと、男どもをのみ使ひておはせしよりは、と思ほさるれど、なほ世の人の心をつよみて、北の方には物も聞え給はず。塗籠はなくて、中戸をたてて、東の方には北の方、西には中納言と、いと疎々しうて、女も召使ひ給はず、使ひつけ給ひつる男を召し使ひ給ひつよおはす。時々、姫君のみ呼びわたし給ひつよ、物語し給ふ。實忠「年頃は、何事かし給ひつる。一日こゝに物し給へりしは、かの山里におはせし人ぞかし。そのかみは中將にてぞありし。それは、萬の事する中に、琴の上手ぞ。それこそ、紅葉見るとてありし。そこにや有りけむ、琴彈きしを、よくなりぬべき琴かな」と宣ひしが、その後はよくなりたりや」そて君年頃は、夜晝、こひしく悲しくのみ思ふ給へつよ、世にえ侍るまじくのみ思えしかば、「かくてもえ對面すまじきにや」と嘆かれて、萬の事もかひなく、徒然となむながめ侍る」君、實忠「などか、まうでたりしには、こゝには「我ぞ」とは宣はざりし」そて君、「さ思ふ

〔語釋〕
〔一〕あて宮の

〔三〕つかせしかどゆめ
歟

〔四〕出家して後女に近づく様に見ゆる故矢張今迄通りにして居らん

〔考異〕
〔一〕ゆめ人には「ゆめも人には

〔五〕御返―御返事

給へしかど、母君制し給ひしかば、出でて、聞召しもやするとて、よろづの事を聞えしかど、知しめさずなりにしかば、いとこそ悲しく侍りしか」と聞え給へば、心あやまりこそしたりけれと思して物も宣はず。
かくなどぞもてなして、隔て給へど、北の方には、人の寢静まりたる夜々、中戸より窺に入りて、時々物など聞え給へど、ゆめ人には知られ給はず。みそか人のやうにてぞ聞え給ふ、實忠年頃、心變りてあるやうなりつれど、御もとより出でて、他人を目に近くだにぞ見ざりつる。この西の院に有りし時、物聞えし人の御許なりし、兵衛といひしになむ、物聞えつかせしこと、ゆめ戯れ事も言はずなりにき。此頃ばかりぞ、斯くてありつる。容貌ことなる頃しも、人に物聞ゆるやうなれば、なほ斯くてはあらむ」とて出で給ひぬ。
晝つ方、御文かきて、中戸のもとにて、姫君を招き寄せて、實忠「これ、母君に奉り給ひて、御返取りてを」と宣へば、持ておはして、然らぬやうにて奉り給へ

〔語釋〕
〔二〕「あなたのかたまはりて見む」歟

〔考異〕
〔一〕民部卿の物し給へり―民部卿ものし給ふ―民部卿ものし給ふ

〔三〕昔のみ「タ」ナシ

〔四〕給ふるも―給ふるに

ば、民部卿の物し給へり。北の方斯くこれかれ物し給ふに、物いはずと見給ふらむ、と思せば、取りて見給ふに、民部卿 實正「あなたのかたま見む」と宣へば、姫君、そて君かしこに立ち給へる、「人に見すな」との給へるを」實正「いかと思すらむと、いとゆかしく思ひ給ふるに」とて取りて見給へば、
實忠いと哀に、昔のみおほえしかば、萬聞えむとせしを、山籠の心なきやうにやとつよましくて、
逢ひも見でふる年月はなになれや暮がたくのみ見ゆるあきの日暮にだに、心静にもがな。忍びて、こなたにもやがて。
とあり。民部卿、實正「さればこそ。悪くやはたばかり聞えたる。はやく御返事聞え給へ」と宣へば、實忠妻「何か」とて書き給はねば、姫君、
思ほし出づるなるは、近かりし昔の効にや、と思ふ給ふるも、けに如何にと
なむ。いでや、

〔語釋〕
〔一〕實忠が妻の方にゆき居る時に

〔二〕正頼食物を實忠に贈る。實忠小野に歸る。

〔考異〕
〔一〕瓜―栗

〔二〕人の許にとて―ナシ

〔四〕來ぬらむ―ぬらむ

〔五〕給へ―給へや

餘所なれどなほ夕暮はたのまれきかはるを見つる今ぞかなしき
心細くなむ

とて奉り給ふ。

かくて夜さりつ方、此方にわたり給へるほどに、左大殿より、よき蜜、瓜、焼米、生海松、水茨など奉れ給へり。北の方の御許に御文あり、

正頼一日参りたりしかど、出で立ちたりしなどありしかば、煩はしさになむ、急ぎ。さてみるはた人の許にとて、

わだつうみの底に入りてぞ求めつるものと見るめをわづき來ぬらむ
とく見習し給へ。焼米は、嬭の齒は立たで、噛み残したる。若人の御許に。

とあり。取り寄せて見給へば、いとよき瓜、よき水茨、折櫃に積みて、大なる甕に、「おひ姫君なむ御覽ぜよ」とかきつけたり。あけて見給へば、銀の甕どもに、練りたるきぬ、唐綾など入れて、糸を輪にまけて、組みて、沈の枋につけたり。

中納言見給ひて、實忠「あな忝や。わづらはしく御志あるを、枋を給へる」と
と奉り給ひつ。御返事は、

實忠妻何事か、怪しうなむ。とて、この海松は、

伊勢の蟹もみるめをかくしかづきせばうきに心はしづまざらまし

焼米は、大かみにこそはなむ。さてもやまとのには見え侍らずなむ。あなか

し。いととくやうせ給へ。

と書かせ給ひて、御使に祿賜ひて、奉れ給ひつ。かくて、夜々なほまうで給ふ。

姫君に、實忠「今は御服ぬぎ給ひてよ。明日なむよき日」と申し給へば、そて君「人

人の脱がせ給はむ時にこそ」と母君は宣ふ」と申し給へば、實忠「益なき事。かた

の如くにて、親ありとならば」とて御車ども、御前などして、脱がせ奉り給

ふ。歸りおはしたるを見給へば、濃き御衣、小袷など著給へる御容貌、いと清ら

なり。藤壺のやうなる人の、氣少し劣りたるなり。父君、いとよき御女なりと見

〔語釋〕
〔一〕「とて」は「さて」なるべし

〔二〕誤なるべし

〔三〕「やうせ」は「やかせ」歟

〔五〕「などして」の下脱文なるべし

〔考異〕
〔四〕給ひつ―給ふ

〔語釋〕

(一)君が來ぬ間にの意歎

(二)讓位の事近くなりたるをいふ

東宮よりあて宮へ消息。東宮、あて宮の返事なきを怪む。

(三)「これはた」なるべし

(四)前の如く矢張あて宮の御返事なくば再び歸り來るな

給ふ。

かくて、小野へ物せむと思ほす。北の方、同じ装束いと清らにして奉れ給ふとて、

實忠妻君にとてぬひし衣もこぬほどに涙のいろに濃くぞなりぬる

御返し、

實忠涙にし濡れけるきぬの黒ければなほ墨染といかと思はぬ
とてあからさまに小野へおはしぬ。

かくて東宮は、藤壺の参り給はず、御返きこえ給はぬをおもほし嘆きて、院の御方、梨壺なども久しうなむまうのほらせ給はず、御局へもわたらせ給はず、つれづれと物も聞食さず、日に隨ひて、御氣色あしうなりおはしませば、内裏にも、朱雀「折しまれ、かよる頃しも悩み給ふなる事」と聞え給へば后宮、「何か。ことなる事にもあらじ。暑氣などにや。さては、漫なることを思すにこそあらめ」など聞え給ふ。これかたの藏人召して、御文賜ひて、東宮「これ、前々のやうにならば、

更にな参りそ。さふらはせじ」と仰せらるれば、痛うなけきて、持て参りて奉

る。かくて例の藏人参れり。「此頃御返事こと少に、御心ゆかぬやうにてあやしきを、参りて御氣色賜はれとてなむ。御文も侍る」とて奉る。見給へば、

東宮たびく聞ゆれど、物も宣はせざめれば、いと覺束なくてなむ。人のあやしがり騒ぐなむ聞きにくく、聞えじと思へども、然てのみは有るまじければ、とて、

もろ共にありてぞ夜々も惜まれしかくてはなぞやつめの命も

いでや小き人々數多あめれば、その御爲にこそ、命もさらぬ事も、いかでかは。心憂からめれば、世に在らまほしくもあらず。

など有り。見給ひて、例の物も宣はず。藏人、「御返持て参らずば、簡削らむ」と仰せられつるものを、御徳に、勞りなさせ給へ。とどめられ侍りなば、いと効なく」など申す。孫玉の君をはじめて、兵衛、「あこきを顧みさせ給ふと思ほして、

〔考異〕
(一)かくて：御文も侍るとて奉る一ナシ

(二)心憂からめれば：歎

(三)出動をとどめられん

〔語釋〕
(一)「しきじにも」か、職事は藏人の中の専務にて殊に權力あるもの

(二)これはたは乳母子なればとて宮が特に大事がり居る事故

(四)免官せば

(五)東宮の心

〔考異〕

(一)思はむさばかりと思はむと同じ様のことか、せ給へり藤壺さちば今日はさもやと御心うるばかり御返事きこえじさばかり

(六)人々―今は

(七)のほらす―のほらす

しるしばかり聞え給へ。これが徒らになりなば、いと悲しう」など集まりて申す。君、あて宮「御返聞えずとて、御使を罪し給はど、わが爲にぞあらむ。罪し給はずば悦と思はむ。さばかりだに仰せられたらば、これに勝りたらむしきにも申しなしてむ」と宣へば藏人、「いかどし侍らむ。やがて参らずや侍るべき。参りてかゝる由をや啓し侍るべき」上、あて宮「たど参りて、「御返事も聞えず」と乳母たちして申させよ」と宣へば、泣くく参りて、然啓せさす。宮、これは、乳母子とて、いとらうたくするものぞ。これを解き棄てたらば、これが事言ひに、文はおこせてむ、と思ほして、勘事にする給ひつ。かくて、日頃待ちおはしませど、殿の君たちの参り給ふに、是にやとおもほせど、御消息も聞え給はず。いみじう恐ろしき人の心かな。何により、斯く深く怨すらむ。人々まうのほらすとにやあらむ、と思し給ふ。残は次々にあるべしとぞ。

國讓(下)

梗

● 朱雀院の后宫、忠雅兼雅仲忠等を招きて梨壺腹の皇孫を東宮に立てんことを謀る。忠雅等之に與かる事を辭す。● 后宫、東宮に梨壺腹の皇孫を立てんことを勸む。東宮喜ばず。● 后宫更に兼雅を招きて事を謀る。● 后宫、立太子の事を帝に迫る。帝故らに決せず。● 后宫の怨。あて宮歌を以て東宮に立太子の噂につきての不快を漏す。● 朱雀院讓位。今上の即位。女四宮(承香殿、季明の女(昭陽殿)、忠雅の女(麗景殿)、あて宮藤壺等女御になさる。● 后宫、忠雅を招く。來らず。● あて宮の姉妹等あて宮の祝に集まる。立太子の噂。忠雅が后腹の女三宮の聲になるべき噂。處々よりの祝の文。● 后宫使を以て忠雅を招く。忠雅脚氣と稱して行かず。● 后宫、忠雅の假病を悟る。● 忠雅歸りて六の君を招く。六の君歸らず。● 即位式。忠雅不參。正賴以下昇位。司召。季英以下昇進。● 六の君なほ歸らず。● 仲忠妻を警戒す。● 朱雀院の氣樂なる生活。御子たちを招く。● 仲忠警戒して女一宮を参らせず。● 后宫、兼雅に文を贈りて立太子の事を迫る。● 世間の噂。正賴、あて宮の落膽。● 仲忠の女一宮に對する辯解。● 仲忠、水尾に仲賴を訪はんとす。● 仲忠、涼藤英、行政、忠こそ等仲賴を訪ふ。● 仲賴の款待。管絃。讀經。贈物。● 仲忠、仲賴の子どもを世話すべき事を約す。● 仲忠、朱雀院に参りて水尾の有様を奏す。● 仲賴、涼に贈られし米、綿などを妻の許に分つ。● 藤英時めく。● 妻の己に不満なるを諷す。● 立太子の期近づく。● 絶

〔語釋〕
(一)朱雀院の後
(二)忠雅、後の兄弟
(三)忠俊、清正、共に忠雅の子
(四)兼雅
(五)仲忠

〔考異〕
(六)いざさらば仰せごと待るにさふらはむと聞え給ふ―今さらば仰せごと承らむと聞え給ひて
●朱雀院の後宮、忠雅兼雅仲忠等を招きて梨壺服の皇孫を東宮に立てんとを謀る。忠雅等之に與かる事を辭す

概

望せる正頼。●立太子の當日。忠雅召さる。●忠雅密書を正頼に贈る。●あて宮腹の御子立太子の吉報。一家のさよめき。兼雅仲忠等の態度。●立太子の宣旨。東宮付職員任命。●后宮仁壽殿女御の榮華を慣る。出家の望。●六君夫の許に歸る。●嵯峨大后の落膽。●梨壺服の御子、あて宮腹の第二の御子共に親王になさる。●今上、あて宮の歸りを促す。●仲忠、あて宮の御方に伺候す。●東宮参内の用意。●あて宮、實忠にそぞ君を入内せしめん事を勸む。●實正の賛成。●東宮、あて宮参内。●行列。●仲頼の妻と其の母見物を寵愛せらる。●登花殿懷胎。●新年。●菅原忠保修理頭に任せらる。●滋野眞菅父子故されて召還さる。●女四宮、皇子を産む。●仲忠母を訪ふ。●女二宮の噂。●正頼女二宮女四宮を自邸に迎ふ。●祐澄近澄等女二宮を途中に奪はんとして成らず。●五宮、彈正宮に托して文を女二宮に贈る。●女一宮難産。●人々の周章。●仲忠の悲痛。●正頼の同情。●男子を産む。●女二宮の乳母が祐澄の胎を受けて、女一宮の御産の騒ぎに紛れて女二宮を盗まんとせし噂。●嵯峨院の花の宴。●今上、朱雀院以下参會。●詩歌。●仲忠講師をつとむ。●嵯峨大后今上の女四宮に厚からざるを怨む。

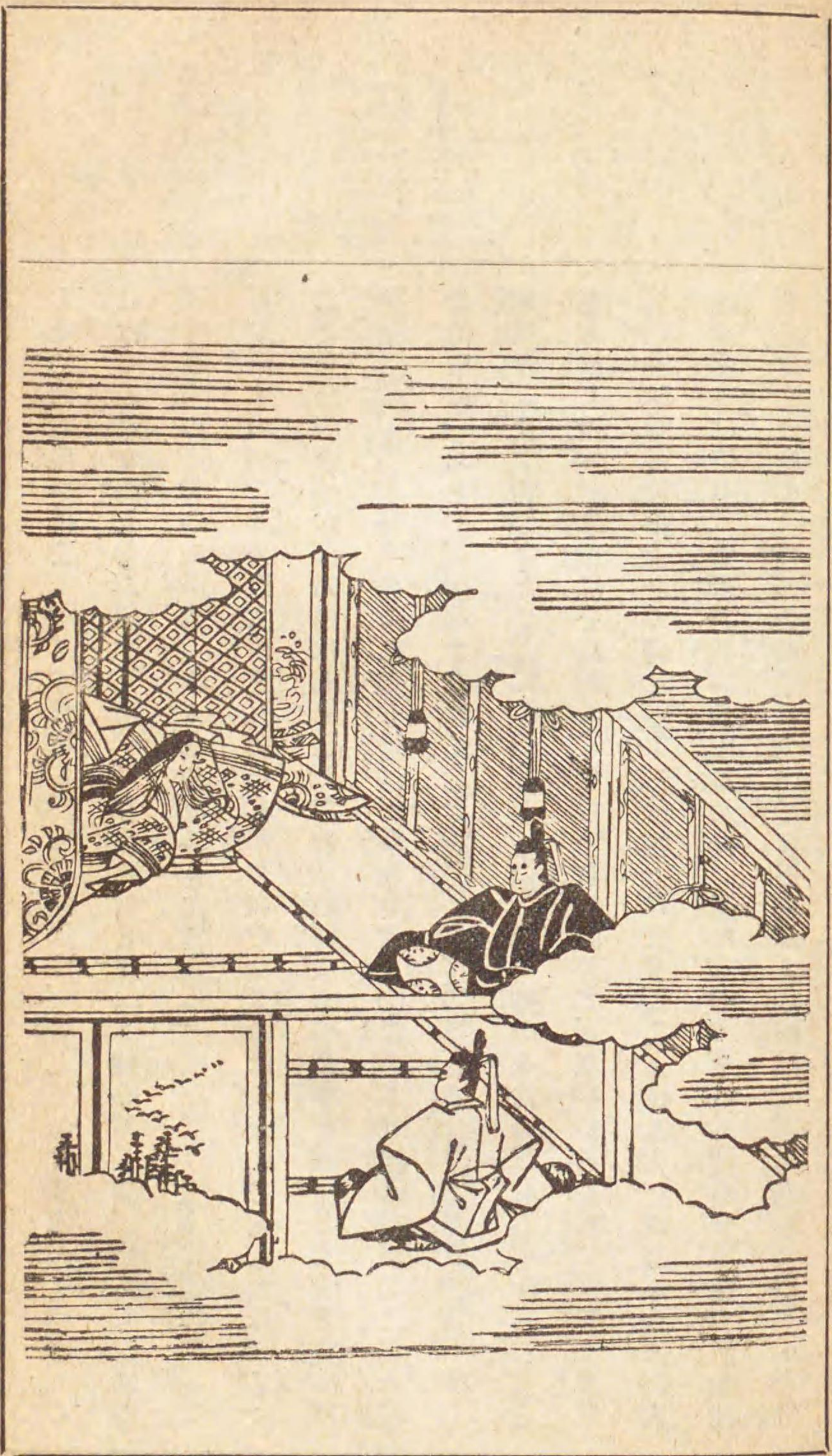
かくて中宮より、太政大臣に、その日の夜うさり、后、聞ゆべき事なむある。大納言、宰相もろ共に忍びてものし給へ。切なること聞えむ」とて奉り給ふ。右の大殿にも、后、大將もろ共にものし給へ」とあり。おとどたち、「畏まりて承りぬ。」

〔語釋〕
(一)帝の
(二)百細の首班は其方なり
(三)正頼方は
(四)大臣は正頼のみ
(五)季明は薨去したり
(六)東宮に忠雅兼雅ら
が女を奉りし時は其等の中には皇太子を生む人あるべしと思ひしに
(一)あて宮をいふ
(二)あめれと「歎
(考異)
(一)人みな一人をみな
(二)斯くし来る―かくしつる
(五)やんごと―やうごと
(九)臣の物し給はずなりぬ―あつとに物し給へ
(一)すゞなる―心のまゝなる
(一)二になく―二つなく

ささらば、仰せごと侍るにさふらはむ」と聞え給ふ。その夜になりて、皆参り給へり。后の宮、御前の人みな立てさせ給ひて、請じ入れ奉り給ひて、太政大臣に聞えさせ給ふ。后、消息に聞えしやうは、昔よりこの筋に斯くし来る事の今違ひて、行末まで絶えぬべき事聞えむとてなむ。御國讓の事、この月になりぬるを、宣ふやうは、「同じ日、東宮も定めさせむ」となむあめる。それを、己等もあるに、一の上にては、そこにこそ物し給へ。又次々斯くやんごとなく物し給ふを、かの筋は、おほいまうちぎみのみこそは。大臣の物し給はずなりぬ。さてはみな下臈にてのみこそは。この筋にしつる事を、一世の源氏の女、后になり、その御子坊にするたる事は無かなるを、などかこれしも然るべき。宮に女をこれかれ奉り給ひし時は、この中にさりとともこそ思ひしか。年の越ゆるまでさる事のなきを、思ひ歎きし程にすゞなる人出で来て、になく時めきて、子をたど生みに生めば、これにこそはあめれ。この筋の絶えぬべき事、くちをししく思ひつるを、此の梨壺

〔語釋〕
 (七) 後の御意見を帝に申上げられて帝が決定せられなばそれにて宜しかるべし
 (九) ちて宮が退出し居れりとして
 (一〇) 東宮
 (一一) 梨壺腹の御子を東宮に立つると聞かれなば
 (一二) 梨壺腹の王子
 (異考)
 (一) 坊には「は」ナシ
 (二) 捨てて「捨てつ」
 (三) 恥とあるをば何事をもし恥となる大いなる事を
 (四) とみれ「とばかり」
 (五) いかでか「いかでか申さむ」「いかでか何をか申さむ」
 (六) 時こそ「時にこそ」
 (八) その御心に「みこのとみに」

思ひの外に夢のごとし給へるに、斯かる折に、これを坊にはするむとなむ思ふ。女はよになき物にもあらず、此の御身のすぢを思ほし捨てて、來し方行くさき、又此筋の恥とあるをば、何事をもとどめ給へ」と聞え給へば、太政大臣、とみに物も宣はず、しばし思ほしためらひて、忠雅、忠雅らは、ともかくもいかでか申さむ。臣下といふものは君の若くおはします、御心の疎におはします時こそ侍れ、斯く明王のことおはします世には、何事をは定め申さむ。たゞ「その御心にかくなむと思す。如何」と聞え給はむに、御心にさだめさせ給ひて、これをお思さば何の疑か侍らむ」中宮、「それは、然ばかり、此の頃里なりとてだに、戀ひ悲しび、物もまるらず、影のごとなり給はむ人は、まいてかけても聞き給ひなば、徒ら人になり給ひなむものを。他の國にも、大臣公卿定めてこそは、よろづの事も申しけれ。これかれ心を一つにて、この事を、斯くなむ有るべき。この筋のむけに無くばこそ、他筋のまじらめ。かく然るべき人を措きては、いかでか」と己等



〔語釋〕
 (一)東宮は
 (四)兼雅
 (五)兼雅の意見によりて決すべき事なるべし
 (六)帝の
 (七)兼雅
 (九)正頼の味方なり、忠雅父子仲思いづれも正頼の縁者なるをいふ
 (一〇)我子仲思が仁壽殿腹の女一宮を妻にし居れば
 〔考異〕
 (二)悲しと一悲しく
 (三)御心あらば一御心のあらば
 (八)かく一ナシ
 (一)仁壽殿もあて宮も正頼の娘なり

もそこにも申さばこそ、さすがに道理失ひ給はず、賢しくおはする人なれば、心には、あかす悲しとおほすとも、世を保たむと思ほす御心あらば、ゆるし給ふやうもあらめ。おのれ一人「斯うなむ思ふ」とは申さじ」おとど、忠雅は、承らず侍りぬべし。公卿大臣さだめ申し侍りなむ。大臣は御女のことなれば、こよにこそは、まづかよる事はしも依りなむ。如何なるべき事ぞ。男ども」と宣へば宰相大納言、忠俊清正「さらに知り給はぬ事なり。上の定めさせ給はむまよにこそ従ひ侍らめ」おとど、忠雅「さらば、大臣は御女又御孫なり。大將は下臈なれど、ゆく末只今、物のかためと侍り給ふ人なり。その妹、甥の上なり。有るべからむこと定め申し給へ。忠雅はそれを承らむ」右のおとど、兼雅「いとも尊く、斯く思ほし召させ給ひける。かく仰を承るは嬉しけれど、こよに五人さふらふ人は四人はみな犬に侍り。兼雅も此の朝臣侍れば、思ひ棄つべきにも待らず。降り居おはしますべき帝の、數多の御子たちの母にてさふらひ給ふも、世を継ぎ給ふべき君

〔語釋〕
 (一)あて宮腹の三皇子を正頼の預かれるをいふ
 (二)忠雅父子仲思と正頼の女どもと
 (三)誤あらんか
 (四)忠俊等の生母、兼雅の先妻
 (五)仁壽殿の妹、正頼の六の君
 (七)八は七の誤なるべし
 (八)當に生れんとする子もあり
 (九)忠俊がつまらぬ女に關係したりとて
 (一)兼雅一本「さねまさし、いづれにても解しがたし、宰相清正の妻は正頼の八の君也
 (二)女一宮の夫になれざるをいふ
 (三)犬宮
 (四)正頼が聞かば
 〔考異〕
 (六)給はず侍るなる一給はざなり
 (一〇)なくもてわび一なくもてわび
 (一二)子に一こよに一はらに

の二つなく思ほして三所の君も近うさふらひ給ふ、同じ人の女なり。この御中ども疎なるにもあらず。如何、命をかけ給へるやうなり。この太政大臣君この子ども(四)の母まかり隠れて後、この女御のはらから持たまひて、又一日一夜別の所をなむ知り給はず侍るなる。その母に、子四人侍るなり。又この大納言の朝臣は、その妹の八にあたるをなむ持て侍るなり。それまた、子一人。又今日明日にて侍り。これ去年の今日、はかなき人に物言ひ觸れて侍りとて、まかり去りて親の許に侍りければ、この幼きを取り持てなむ、せむ方なくもて佗び給ひけるが、辛うじて此の頃なむ、あの父など言ひて、わたりて侍るなる。宰相の朝臣のも兼雅が姉の腹なり。それも子ども侍り。仲忠の朝臣、かの家に侍らねど、あるが中に君にしもてかしづき侍る人につきて侍り。子に、限なくかなしうする女子侍り。またも有るやう侍るなり。かくの如、手を組みたるやうにゆき交り、此の中にいさよか疎ならず、命をかぎりて侍るに、斯かることをなむ相定むると聞き侍りなば、

〔語釋〕

(一)正頼は

〔考異〕
(一)その一ナシ

(三)めのところも侍るはなど一女御のこともち侍るなど一めのところども侍はなど

(四)目かー一日かーべき

(五)しつるーしたるーしをり

(七)朱雀院第三皇女

この女どもをとり離ちて、帝にもかれこれにも、又相見せ奉るべきにも侍らず。いとよき人なれど、いと急に強き人になむ侍る。また然思はむ理になむ。家の尊きことは、かやうの折の用意なり」と聞え給へば中宮、おほきに御聲出だし給ひて、后宮「その仁壽殿のめのことども侍るはなど、すべてこのめのこともは、如何なる目かつきたらむ、つきとつきぬる者は、みな吸ひ付きて、大なる事の妨もしつる」と宣へば太政大臣、忠雅「かの大将の朝臣の聞きはべるに、いと不便なる仰なりや」と聞え給ふ。忠雅「忠雅らは、人にも侍らず。かの朝臣は、男だに恥かしく侍るものを」とてうち笑ひ給へば、みな笑ひぬ。后宮然ぞかし。女なる己らだにこそ、筋の絶えむことは思へ。主たちは、何のなり給へればか、その妻子の悲しとて、かよる大なる事の妨をば、なさるよ。世の中に、女はなきか。それに勝りたらむ人をも、おのれ奉らむ。近うは、己が一人もち奉りたる女御子え給へ。然りとも、その女の子どもには劣らじ。いと斯く拙くな計らひ

〔語釋〕

(四)東宮に

(五)「と」衍文なるべし

(六)東宮があて宮を寵せらるゝとて

(九)あて宮腹第一の王子

(一〇)誤あらんか

〔考異〕

(一)なめれど一なめり

(二)ある一ナシ
(三)かゝれば心おぞくなむ一かく心をとなへてなむ

(七)になく思したるとて一ふたつなくおぼしたのみて

(八)さても一ナシ

(一)あなほうしくとくなしつべかりき一あなほうしくとくなしつづつき

給ひそ」太政大臣、忠雅「なほこれは私事なり。なほ侍ることを斯うなむと申さるよなめれど、子を思はぬ人なければ、ことの道理のある事なり。かよれば心おぞくなむ、え申すまじく侍る。なほたゞ、啓するやうに、御子の君に、有るべき様を、善からむ折、こしらへ聞え給へと。仰ごとにて許し給はゞ、この中の幸にてこそ侍らめ」后の宮、「其處たちは、妻方をのみ思して、宮のになく思したるとて宣ふにこそあめれ。よしや。我なほ世の中の事どもまかせて見居らむ」と宣ふ。右のおとど、兼雅「さても、此坊がねの君をば、まだ御覽せぬにやあらむ。その君は、もとより天地に承けられて、明王がねと生れ給へる人なり。彼をきしろひ思さば、いと悪しからむ。なほかよる御おもてだてもみずと言はれ騒がれ侍りつるに、かよる事の侍るこそ、恥すこし免かれて思う給へられてぞあらむ。人にきしろひて、徒らにならむと思ひ給へず。知るくのやうにても、え侍らずのみこそ」宮、后宮「あなほうしくとくなしつべかりき。男の端となりて、斯う物を言

〔語釋〕
 (一)誤あらんか
 (二)東宮とても
 (三)女ぐるひ
 (四)あて宮をいふ歟
 (五)あて宮が里にありし時
 (六)呪ふ詞也
 (七)東宮
 (八)あはせずをはたあまがつー思はずはをあまが
 (九)待りし侍る
 (十)后宮、東宮に梨壺腹が皇孫を立てんことを勸む。東宮喜ばず。

はむよな。一人だに賢きものは。たゞ女の子どものやうにて」と腹立ち給ひて、その朝にも宮とても、妻まきぐるひをこそし給へ、いと憎けにはおはせず、をはたあまが女なれば、おもてはよけたるにこそあらがはざらむ。けに、氣色の恐ろしけに、人を殺すべからむは何ぞ」太政大臣、忠雅「さ侍る人なり。更に凡人に侍らず。氣色ありさま、いと恐ろしき人に侍り。かの大將の朝臣こそいまだ若き男には侍れど、いとよく人見侍る人なり」大將、仲忠「うたて、遊のやうに申さるよかな。なほ見侍るに、いとかしこく見え給ふ君也。かの侍る所に住み給ひし時は、近く侍りしことなり。いと恐ろしく侍りし」と聞え給へば後の宮、「さる者しもぞ、神佛はほしうし給ひしかな」と宣ふ。おとどたち、「よき事に侍れど、えなむ此の中には定め侍らぬを、なほ申しつるやうに奏せさせ給へ」とて皆まかて給ひぬ。
 かくて日頃ありて、宮に、后宮「聞えさすべき事なむある。わたらせ給へ」とあれ

〔語釋〕
 (一)御血族にて
 (二)あて宮に離れては
 (三)梨壺腹立太子の事あちばあて宮は再び宮中に歸るまじ
 (四)「よく共」は「いかでか」の誤か
 (五)忠雅ちが妻の方の事を思ひての意歟
 (六)あて宮腹を立てんとするを歟
 (七)考異
 (八)位なども一即位も
 (九)なほ一なせ

ば、渡らせ給へり。御物語など聞えさせ給ひて、后宮「斯うくなむ思ふ。如何に有るべきことぞ」と聞え給へば宮、いと御氣色あしくて、青くなり赤くなり、物も聞え給はず。いと久しくありて、東宮昔より、誰も、親の仰せごとは、ともあれかうもあれ、否び聞えじと思ほえ侍れば、否び聞ゆべきには侍らず。この國ならず大なる國にも、國母、大臣ひとつ心にてこそ、事を謀りけれ。臣下ども、御脚末にて、やんごとなくてもものせらるめるを、相定めて、ともかくもせさせ給ふばかりになむ。こよにはた、かの人離れては、いと便なく侍るに、かゝる事侍らば、參るべきにも侍らず。されば、かの人、幼き者もろ共に、生くとも死ぬとも、山林にも入りて侍るばかりにこそは。位なども、顧みむと思ふ人の爲にこそは。なほ俄にこれを徒らになしては、よく共侍るべき」とて涙をこぼして立ち給ひぬ。
 (五)后宮「聞えじと思ひつる事を、これらが女がたに思ひて、己等は知らず顔にて、然はせむといふを、かゝる中らひに離れたる人をば、入れ交せむが憎さに、宮に

(一)「語釋」
 (二)「(一)衍文歟」
 (三)兼雅
 (四)東宮に
 (五)后宮更に兼雅を招きて事を謀る。

(六)朱雀院に申上げて御讓位の日に太子を定められよ
 (七)其方は梨壺の父なれば無論此方の味方ならん
 (八)東宮が
 (九)かのぞう(族)に入りまじりて歟、一本人かかのを「人々の數」とかけり
 (一〇)「さばれい」さいはれれ
 (一一)「さばれい」さいはれれ
 (一二)「さばれい」さいはれれ
 (一三)「さばれい」さいはれれ
 (一四)「さばれい」さいはれれ
 (一五)「さばれい」さいはれれ
 (一六)「さばれい」さいはれれ
 (一七)「さばれい」さいはれれ
 (一八)「さばれい」さいはれれ
 (一九)「さばれい」さいはれれ
 (二〇)「さばれい」さいはれれ

(二一)「さばれい」さいはれれ
 (二二)「さばれい」さいはれれ
 (二三)「さばれい」さいはれれ
 (二四)「さばれい」さいはれれ
 (二五)「さばれい」さいはれれ
 (二六)「さばれい」さいはれれ
 (二七)「さばれい」さいはれれ
 (二八)「さばれい」さいはれれ
 (二九)「さばれい」さいはれれ
 (三〇)「さばれい」さいはれれ

しかく申せば、かく宜ふなめり。大方はさばれい」など腹立ちておはす。

畫詞 ことば後の宮。

かくて又後の宮、右の大殿に、后宮忍びて、直衣姿にて物し給へ。聞ゆべき事なむある」ときこえ給へば、その夜参り給へり。宮對面し給うて、后宮に、かのありしこと聞えしかば、「ともかうも、あるべからむ様に。此處にはいかでか」と有りしかど、氣色なむよくも見えざりし。それ思ふやうは、上に聞えて、同じ日定めさせ給ひて。たゞ太政大臣の御心なり。そこには彼方此方により給はんやは、位に居給ひぬすなはちこの事をこそは思さめ。王昭君を胡の國へやり、楊貴妃を殺させ給へる帝なくやはありける。太政大臣は、女を思ひ給へれば、それにつみ給へるにこそあれ。すべき様ならずと思ふを。さる心し給へれとなむ」おとど、兼雅「ともかうも、御心と定めさせ給はむになむ。ことには、みなく人々かのそに入りまじりて侍れば、心一つによろづ思ひ給ふとも、力なう侍るべけれ

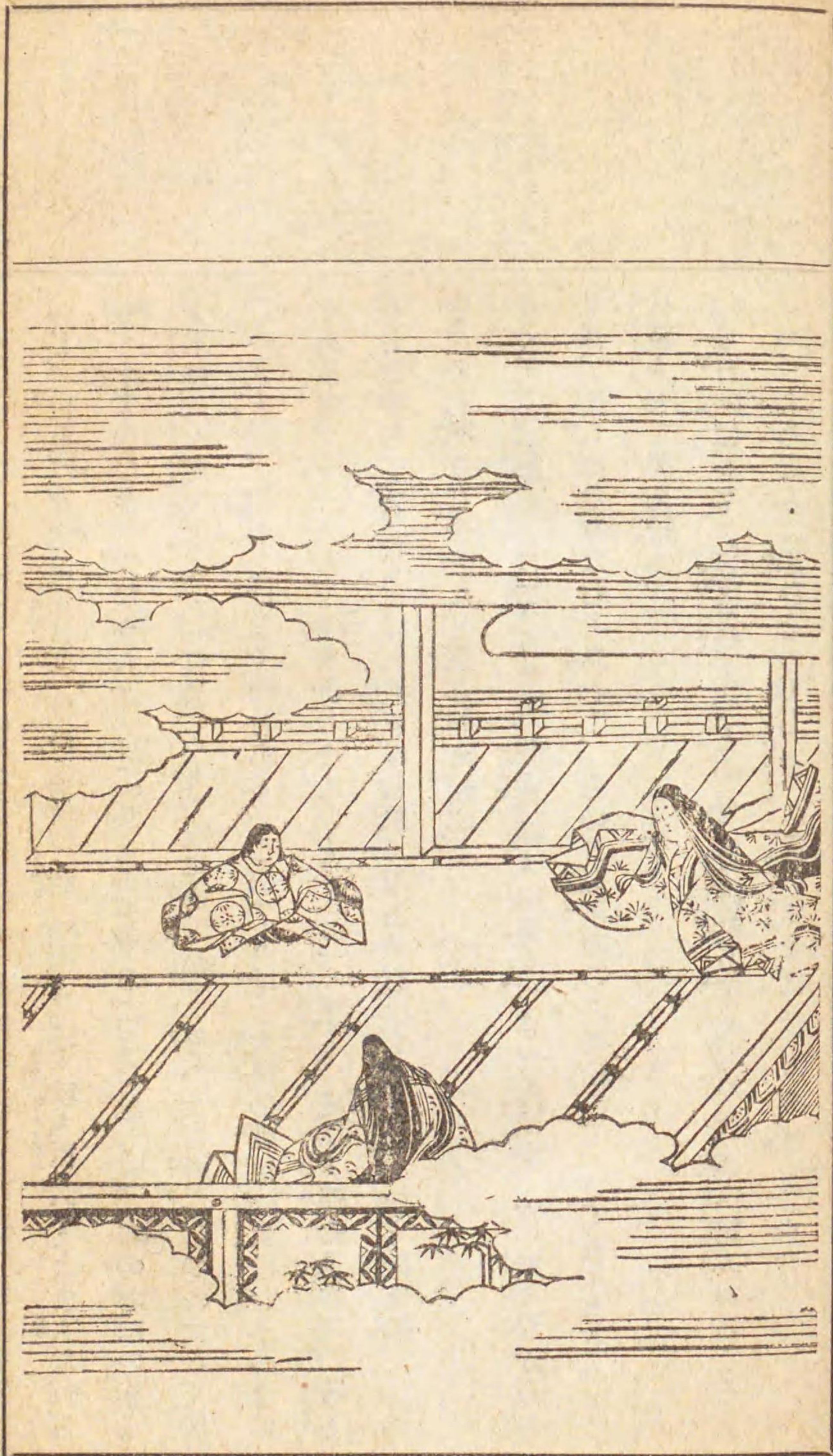
(一)「語釋」
 (二)女一の關係上正頼に黨すべき筈なる上又特にあて宮に心を寄せ居る譯もあれば梨壺方に變ぜしむること叶ふまじ
 (三)「ならむ」は「ならば」歟
 (四)同日に決定したしと思ふ譯は
 (五)梨壺腹に皇孫のある上は
 (六)女四宮
 (七)「ものならば」歟
 (八)后宮、立太子の事を帝に迫る。帝故らに決せず。后宮の怨。
 (九)「考異」
 (一〇)侍るめれば「ば」べめれば
 (一一)「よにも」は「も」ナシ
 (一二)宣はむ「せ」せ給はむ
 (一三)「や」は「は」ナシ
 (一四)「給へるがそれし」給へるなりそれしも

ば、思ひかけぬなり。たゞ仰せごとなむ。萬の事、仲忠の朝臣に語り侍るを、大方の心よせよりも、また思ひ侍るめる筋侍るめれば、よにも動じ侍らじ」宮、后宮「いと不孝の子こそ、然こそあなれ。然不孝ならむものをば、子ともな見給ひそかし。さもあらばあれ、それ等は一つ心ならずともありなむ。たゞ一の上だに一つ心ならむ」と宣へば、兼雅「承りぬ。たゞ宣はむになむ」とてまかで給ひぬ。

かゝる程に、上わたらせ給ひたるに、后宮「國讓は、實にいつ程にか侍らむ」上、朱雀「この十餘日ばかりになむ」后宮「坊も同じ日にやは定めさせ給はぬ」上、朱雀「何か、然あらずとも。騒がしきやうなり。長閑にもありなむ」宮、后宮「その由は、かうく思ふことなむある。その人無かりし時こそ、あるに隨ひてと思ひしか。かゝる人ありとならば、同じくばその腹のをとなむ」上、思ほすやう、宮孕み給へるが、それし男ならば、これをもや、とこそ思ひ聞え給はめ。然あらずものから、

- (語釋)
- (一)正頼
- (二)帝の外戚にならぬ事を怒りて
- (三)仁壽殿
- (六)不孝歎、仁壽殿が帝を嫌ひ奉りての意歎
- (七)帝が
- (八)仁壽殿をいふ
- (一〇)仁壽殿へ
- (一一)東宮
- (考異)
- (四)あらむ―あるらむ
- (五)さかしちをも―さかしちも―さかしちも
- (九)それ―それを
- (一一)あんめる―あめる

左のおほいまうち君の思はむ事あり。そこばくの御子の祖父にて、かくあること
 思ひて、女御をもまかでさせ給ひて参らせずば如何せむ、と思ほして、朱雀^(三)何か。
 只今ならでも有りなむ。自ら位にあり定まりて、親とあらむ人の心よろしからむ
 やうに定められむ。然しも思はざらむ人を子にしたらば、あぢきなくさかしらる
 も。恥かしき人にさも覺えじや」と宣へば、后宮この仁壽殿の盗人により、宣ふ
 ぞかし。ふけうし奉りて、籠り居りて、戀ひ悲しび、待ち居て、青蠅のあらむ様に
 立ち去りもせでおはすれば、如何に恐ろしく思さるゝらむ。さる人のゆかりをこ
 そ思すらめ」上、うち笑はせ給ひて、朱雀^(七)何か、然までも思すや。めづらしき人な
 らばこそ。神さびにたる子どもの母をば何か。十の君の、まだ見ざりつるが有り
 ければ、それ見にこそ時々わたれ。さて宣ふやうは、彼處に、しづかになりなむ
 時、あるべき様に語り給へ。便あるべからむことを宣はせむには、よも否びら
 れじ。やんごとなき人の、みな御脚末にてあんめるを、わいても思ふ人の類と宣
 (一一)



〔語譯〕
 (一)兼雅
 (二)仲忠
 (三)正賴
 (五)正賴が不平を起して娘どもを引取りたらば
 (七)帝位を我獨りのものと見よとていつ迄も歸らぬのか

〔考異〕
 (四)才もあり心もいとかしこく重し才あり心もいとかしこくをかし
 (六)給ひて給ふ
 (八)をば一をも

へど、世をば左大臣、仲忠の朝臣となむ政つべき。太政大臣、いとよき人なれども、才なむなき。才なき人は、世のかためとするになむ悪しき。右のおほいまうち君は、有様、心もかしこけれども、女に心入れて、好いたる所なむついたる。然るべき人は、頼もしけなくなむある。この二人は、大將の朝臣は更にいふべきにもあらず。今一人も、才もあり心もいとかしこく重し。その人臥し籠りて、女どもとり持ちて惑はさむに、人々なむ騒ぐ事あらむ。よし見給へ」と聞え給へば、后宮「よし聞えじや」など怨じ聞え給ふ。
 かくて御國讓、明日になるまで、藤壺、藏人の事も申させ給はず。宮、斯うながらあらば、徒らになりなむと思して、その日期事ゆるさせ給ひて、さて夜うさりつ方、他藏人して聞え給ふ。
 東宮日頃は、ことに参り給ふやとのみ。年頃契り聞えし事を、違へ給ふめるこそ。もろともに思ひそめてし紫の雲の原をばひとり見よとや

〔語譯〕
 (一)我が生みの御子の太子に立たぬを怨みたる也
 (三)新帝が
 (四)昭陽殿

〔考異〕
 (二)うとければことなればことなれど
 (六)宮の「の」ナシ
 (七)なりて「て」ナシ

〔考異〕
 (二)うとければことなればことなれど
 (六)宮の「の」ナシ
 (七)なりて「て」ナシ

〔考異〕
 (二)うとければことなればことなれど
 (六)宮の「の」ナシ
 (七)なりて「て」ナシ

と聞え給へれば、たど斯くなむ、
 十一日に、御國讓り給ひて、帝は朱雀院に出で給ふ。仁壽殿の女御、御供仕うまつり給ふ。後の宮は、内裏におはしませど、藤壺のもろ共に見給はぬを、夜書思ほし歎きて、更に人もまうのほらせ給はず。こと君たちは、みな参り集ひ給へり。しばしありて女御なし給ふ。唯今しも、なし給ふまじけれども、藤壺を参らせ給はむとおほして、急ぎなさせ給ふ。四の宮ひき越えて、故太政大臣殿の、一の女御、今の太政大臣のと、藤壺とを二の女御となし給はむとする時に、後の宮の聞え給ふ、后宮「いかでか、梨壺をばなし給はぬ。さかしき世ならば、これも王の親ともなりて、高き位にもなるべき人なり。かく亂るよ折なれば、かくいふにこそあ

〔語釋〕

(三)昭陽殿

(五)昭陽殿を女御にして

(九)季明の女は

(一〇)忠雅の女は

〔考異〕

(一)あらざらぬ―あらぬ

(二)あらぬ―ナシ

(四)このさがなものを―このときなしのさがなもの

(六)鞏―うしぐらま

(七)鞏―うしぐらま

(八)給へり―給ふとぞ

なれ。必ずなし給へ」と聞え給へば帝、今与二人は、太政大臣の女なり。これは下臈にこそあらざらぬ。相次いでこそはあらぬ。これをしてはいかでか」と聞え給へば後の宮、「このさがなものをななし給ひそかし」と聞え給へば、今与いかでか。これこそ、ある中の上臈なれ。公に、世をしづめ、久しう仕うまつりたる人の女なり。そのうちに、いと便なく心細き人にこそ。こゝにだに顧みずば如何せむ。なほなして、鞏を梨壺に許さむ」と申し給へば後の宮、「さも、とざまかうざまに、申す事を聞召さぬかな」と聞え給へど、皆し給ひて、梨壺には鞏をゆるし給へり。かくて、四の宮は、承香殿に、故大臣殿の昭陽殿、今のは麗景殿、左の大殿のはやがて藤壺、式部卿宮のは登華殿、右の大殿のは梨壺、平中納言殿の君宣耀殿にすませ給ふ。御名も皆しか申す。登華殿は女御になり給はず。父宮よりはじめ奉りて、かゝる恥を見る事と思し嘆きてまゐり給はず。昭陽殿は、服にて里に久しく居給ひてまうのほらせ給はず。

畫詞

こゝは御國讓の所

〔語釋〕

(一)后宮の心

(二)朱雀院

(四)忠雅をわが腹の皇女の鞏にして事を謀らんと巧める也

(六)后腹の皇女三宮

〔考異〕

(三)恐しうも―あしくも

―あしとも

(五)たるをば―たるは

かくて後の宮の思すやう、同じ日、坊をすゑずなりぬれば、今はしにくかりぬべき事、一の人の心だに一つになしてば、子ども親に従はざらむやは、と思して、彼岸の程によき日を取りて、さるべき事おほし設けて、太政大臣に忍びてものせむ、院きこしめしても、悪しうも宣はじ、右大將をだに、よき鞏にし給へば、これも、年もまだ若う、かたちも心も目やすく、世の一の人にもあれば、など思ほして、太政大臣に、后宮聞ゆべき事なむある。今宵、こゝに忍びてものし給へ」とあり。おとど怪しく、かゝる事によき日といふなる日しも、斯うく宣へれば、坊定のことによあらむ、煩はし、と思して、兼雅畏まりて承りさふらひぬ。さふらふべき由仰せられたるをば、日頃勞る所侍りて、院にも内裏にも参り侍らぬ。いま今日明日過して、ためらひて参り侍らむ」と聞え給へば宮うち惜しう、いかでかこれ呼び取らむ。天下に思ふ人持たりとも、わが御子を見奉らむ人は、

〔語釋〕
(一) 忠雅が

〔考異〕
①あて宮の姉妹等あて宮の祝に集まる。立太子の噂。忠雅が后腹の女三宮の望にたるべき噂。處々よりの祝の文。

(二) 五の君

(三) 忠雅の妻六の君

(四) 十一の君

(五) 三の君

(八) あて宮腹の皇子が太子に立ちかぬる恐あるをいふ

〔考異〕

(六) 年頃は「は」ナシ

(七) 内裏へも「湯水も

(九) 后宮から召すめりきや「后宮より召すめりき

(一〇) と問ひ申せど「と問ひ申せど

疎にはあらじ、と御心一つに、人には言はで思はず。たびく聞え給へど、参り給はず。

かくて、藤壺の御方に、よろこび聞え給ふとて、これかれわたり給へり。大宮も民部卿の宮の御方も、おほきおとど、兵部卿の宮、民部卿殿の北の方も渡り給へり。「必ず、何かはと思へる事なれど、あやしく妨げられつるやうに聞え侍るを、かくてだに」と宣へば、「年頃は、かしの國讓の事によりて、思ひ歎き、心損ひたるやうにて、内裏へも参らず、ものし給ふこそいと見苦しけれ。子持たるも苦しけなるものにこそ」大宮、「いでや、ことにも、この御事を、とさまかうさまに思はば、おほろけにやは。ほとく、斯くもえ有るまじきにこそは聞えつれ。又いかなる恥をも見むとすらむとぞ、彼處にも思ひ歎かるめれ」おほき大い殿、六君「その事、いと騒がしかりなむや。一日も、后宮から召すめりきや。度々になりぬれど、煩はしとて参り給はずなりにし氣色を、それはかやうの筋なるべし」と問ひ申せ

〔語釋〕
(一) 忠雅をのみ方にして居る

(二) 忠雅は

(四) 忠雅を

(八) 后宮上

〔考異〕

(三) 世にもかく「とにもかく

(五) とや「となり

(六) 見まはしうて「て」ナシ

(七) つる「つるは

(九) 思したなる「な」ナシ

ど、更に宣はせねど、著くなむ」大宮、「方々、とさまかうさまにたばかり給ふめり。たど此處には、おとどをのみ頼み聞えたる。さりとも、一つ心になり給はずばとこそ思へ」北の方、六君「かしこには、世にもかく思し騒ぐが苦しき事、とこそ思はれためれ」大宮、「いさや、いとあやしき事をぞ人言ひつるや。真にやあらむ、おとどを、あるやんごとなき所に取り籠めらるべしとや。それこそ、いと恐ろしき(四) たびかりなれ」北の方、六君「何處に、如何聞召しつるぞや」大宮「后の宮の姫宮にとかや」北の方、胸つぶれて、六君「あな心憂や。さも知らずかし。ことにはさる氣色もなきは、隠さるよにやあらむ。幼きものどもあまた侍るに、またも見まほ(六) して侍るに、さる名だたるめでたくおはする所に取り籠められなば、顧みもせじ。如何様にせむ」と氣色悪しうて聞えたまへば、大宮「いさや。さぞ言ふなり(七) つる。たしかなる事にやあらむ」北の方、六君「彼處よりたびく「忍びて」とぞあるや」宮、「朱雀院は、一の宮より勝るはなしとぞ思したなる。それは、小さくよ(九)

- 〔語釋〕
- (一) 后腹の女三宮
- (二) 忠雅が
- (三) 女三宮を后宮から申込あちば
- (四) 女三宮の乳母
- (五) 實忠
- (六) 實忠の舊妻
- (七) 三の君が居るとて
- (八) 舊妻に對して
- (九) 一もて宮を尋ねると
- (一〇) 一もて宮を尋ねると
- (一一) 一もて宮を尋ねると

り思しつきたればにこそ。かの宮、さらに劣り給はざる。まだかたなりにて、いとをかしけにおはすなり。今すこしねび給はど、いとようなり給ふべき人にこそ。北の方、六君、二の宮、思ふやうにおはすなり。いかで見奉る物にもがな。大將こそ羨ましく目ざましけれ」と時々宣ふを、此の宮さやうに聞え給へば、よもあしと思はじや」民部卿殿の、三君、こよにも、あの乳母のいふとて、言ひしろひなどせられたりけり。それは、たゞ此の事により、萬の事をすとしてたばかるなめり」など女御の君と御物語し給ふ。三君、新中納言の御事は昨夜きこしめしたりや。いとこそをかしかりけれ。かの三條に、昔の人を迎へおきて、然も知らせで、「己が侍るぞ」とて率てまかりたりければ、そで君の、あらぬものに生ひなりてあむなるを、己と見なしたりけるは、いとこそ怪しかりけれ。されど己が方をなむ、いと疎く、心にもあらぬやうにて物せられける。小野へとてかへり給ひけるを、一日なむ、此處にもものせむとておはしたなるが、かの北の方こそ、いとよき人な

- 〔語釋〕
- (一) 實正は
- (二) 實正にそで君母子が親しむとなり
- (三) 實忠が妻と別居したるを
- (四) 同居を我が勧めたり
- (五) 仁壽殿
- (六) 仁壽院の女御にたりたる事
- (七) 立太子の事
- 〔考異〕
- (四) たりナシ
- (六) いと奉らせまほしきをいと奉らせまほしきを

れ。彼處には、いとめでたきものにこそせらるなれ。中納言をば、いと疎きものにして、いらへも昔は聲も聞えざりける人に、今は親同胞の如して、親も子もさしむかひてあるとこそいふめる」女御の君、あて宮、年頃、いとあやしくて、所々にもものせられたりつれば、かの中納言對面して、なほ斯くてをとこそ物せしか。かのそで君の、よく生ひなり給へるを、いかで内裏に參らせてしがな。睦ましき人のいと奉らせまほしきを」北の方、三君、さなむ思ふとあらば、いとよく奉られなむ。今、ことの序あらば、彼處にもものし侍らむ」と聞え給ふ。朱雀院の女御の御もとより、仁壽必すく有るべきことと思ふ給へしかど、うたてきしろふ人がちなりけるを、かく物し給ふをなむ。今一つの事を、内裏の御用意にこそは。と聞え給へり。御返、

あて宮 承りぬ。宣はせたる事は、もし參ることあらば、徒走の苦しかりしをの

〔語釋〕
(一)忠俊の妻、七の君

(四)妻が病氣にて

(五)女御になりたるにつきて尚侍典侍などに下され物などの御用あらば承はらん

〔考異〕

(二)給はねば―給はねど

(三)参りても―参りまうでて

(六)やうにて―やうにては

みなむ。さて物たばかりは、そがいと様々なるを、あぢきなく、人の御爲にさへあべかななるをぞ思ひ嘆く。

と聞え給ふ。藤大納言殿の北の方は、たちぬる月の晦にこそ子産み給へる。まださはだち給はねば、御使して聞え給ふ。源中納言殿より、

涼参りても聞えさすべけれども、ことに日頃惱まるゝに、見給へ譲る人もなくてなむ。いと嬉しく、いつしかと待ち聞えし様におはしますなるを、内侍のかんの殿たちなどには、物や遣はすべき。さらば宣はせよ。ことにものし侍らむ。

と聞え給へり。御返事、

あて宮承りぬ。なやみ給ふは、如何様なるにか。さらに承らざりけり。まぢ給ひける事は、時過ぎたるやうにて。乳母たちは、いさや然する物にやあらむ。今されば聞えむ。

〔語釋〕
(二)立太子の事

(三)仲忠は后宮の隠謀には我は無關係なれど若其に與したる様に思はれはせぬかと心配し居る

(四)仲忠の御傳言は

(五)后宮に黨する心のなきは寧ろ不自然なり

〔考異〕

(一)ありて―ナシ

(六)御心なからむこそ―御心ならむこそ

(七)「太政大臣殿の北方」の誤なるべし忠雅が后宮の聲になる噂をききて六君が憤りたる也

と聞え給ふ。一の宮より、

女一日頃あさましく、頭ももたけられずありて、え聞えざりつる程に、思ふにもしるき御喜あなるをなむ。これはさるものにて、かの事をなむ念じ聞ゆる。ことにあめるものは、「怪しき事あなるを、更に知り侍らぬを、もし誰も誰も思ほしや疎むらむ」とぞ、いとほしがり聞ゆる。

とぞ聞え給へる。御返、

あて宮日頃はなやませ給ふなるに、自ら参るべけれど、え然も侍らぬをなむ。思ほしけることは、いでや、この頃の花櫻ばかりにこそ思う給へらるゝ。宣はせたる人の御消息は、さる御心のなからむこそ、僻みたる様には。かく宣はせたるをなむ頼もしうは。

と聞え給ふ。

左大辨殿の北の方、かくて後は思ほし倦じて、親同胞にも聞え給はず、夜晝おほ

〔語釋〕

(一) 忠雅歎

(二) 十一の君

(三) 忠雅に

〔考異〕

(一) 經給へば一ナシ

(四) どもは「は」ナシ

(五) 斯う遙げげには一斯うは遙げくては

(七) かしこに一かしこの

し嘆きて泣き給ひつよ、よき事もあしき事も知らぬやうにて經給へば、え聞え給はず。おとどは、この君をぞ私物にて、らうたくし給へど、心もゆかずのみおはす。兵部卿の宮のは外住し給うて後、まだ藤壺に對面し給はざりつれば、あて宮年頃の御物語聞え給へ」とて切にとどめ聞え給へば、またわたり給はず。かくて御方々も、大宮、男君たちもみなおはす。御装束どもは、あはせ一かさね、御小袿とも、さまふくにいと清らなり。

夜うさりになりて、太政大臣殿より、御迎たてまつり給へれど、六君「今宵はことになむ」と聞え給へばおとど、例ならずあやしと思して、おはしたり。北の方、六君「いと狭うて、これかれ物し給へば、さらに對面すべき所もなし。歸らせ給ひね。今一日二日ばかりありて、其方にを」と聞え給へば、おとど、忠雅「あやしう、例ならず宣へば、聞きならばぬ心地なむ、驚きながらなむ。など斯う遙げげには宣へる。たゞ此處もとに出で給へ」と聞え給ふ。大宮、「なほ對面し給へ。かしこ

〔語釋〕

(一) 忠澄祐澄師澄

(二) 大宮殿

(三) 「あはすかゝる程に」なるべし

(四) 女三宮

(六) 忠雅方へ

(七) 忠雅が病氣届をして

(九) 后宮の心

(一〇) 兼雅をさがせし時の事俊隆卷にあり

(一一) 忠雅

(一二) 權のかみをいふ「て」は衍文なるべし

〔考異〕

(一) 后宮使を以て忠雅を招く。忠雅脚氣と稱して行かず。后宮、忠雅の假病を悟る。

(五) 如くは「は」ナシ

(八) しつゝして

に御過やある」と聞え給へば、六君「かゝる事のありけるを、知らせざりけるが憎ければぞや。あぢきなや」と聞え給ふ。簀子に御座まるりて、左衛門督の君宰相中將、左大辨などはべり給ひて、おはしますべき所に、これかれものせらるべければ、とてすゑ奉れり。御前に、此方の御腹の君たち、皆おはするほどに、后の宮は、この事をいかでと思して、姫君を玉の如くにつくろひ磨き奉り給ふべし。天上の吉祥、天女を持たるもの夷なりとも、わが宮をば、と思しつよ、たびたび御消息を聞え給へど、かく病申をのみしつと參り給はぬを、我まことの天地に承けられたる、國の親ならば、しはづさじとおほして、昔若小君をもとめし中將の、母北方の兄、宰相になりて若くて亡せにける子の小かりけるを、取りて養はせ給ひける、今は宮の權のかみになして、いとやんごとなきものにし給ふ人、いとかしこう萬正しう、おほやけ人なり、おほき大殿もおなじ御親族にて、馴れ仕まつる人にて、御文をかきて取らすとて、宣ふやう、后宮「これ、人に持たせで、

〔語釋〕
(三) 權のかみ也

(四) 忠雅が

(五) 「くだし」は御下命の
意か、一本「たし」

〔考異〕
(一) 給ふとあるは「給ふ
とてあるは

(二) 承りて「給はりて

懐ふせしに入れて、太政大臣おほきおとぎの御許みもとにもて行き、人傳ひとづてならで、御手てにたしかに奉たてまつれ。悩み給たまふとあるは、まことか空言そらごえか、たしかに案内あないして言いへ」と宣のたまふ。かしこまり承うけたまはりて持もて参まゐるに、この南みなみの御門みかどに、大殿おほほのの御車くるま、御前まへなど、北きたに立たてり。ことにおはするなるべし、と思おもひて、下おりて入り見みれば、おとどこれかれおはす。宮みやの亮すけ、消息せうそく申まうさせて、たゞまうでにまうでて、御階みはしのもとに侍はたるを、疾さく見みつ(三)け給たまひて、何事なにごとならむ、これに見みえぬる事こと、煩わづらふ由よし申まうしたるものを、と思おもひて物ものも宣のたまはず。御簾みすのうちうちに集あつまりて、立たちさわぎ給たまふ。左衛門督さゑもんのかんの君きみ、忠道ちゆうだう宮みやの大たい夫ふの朝臣あそんはべ侍べり」と申まうし給たまへば、忠雅ちゆうだ何事なにごとによりてぞ」と問とはせ給たまふ。亮すけ宮みやの御使ごしにさふらひつるなり。「これ、まのあたりにて参まゐらせよ」と侍はたりつるくだしの侍はたりつれば」とて懐ふせしより、陸奥紙むつみのくにがみにてある文ふみを、藏人せうしやうの少將せうしやうの君きみして奉たてまつらす。御簾すの内うちには、「さればよ」とて集あつまりてまどひ給たまふ。北きたの方は、青草あやぐさの色いろになりて、大君おほきみ「今宵こんや呼びもて去いなむするにこそあめれ」と涙なみだをながして伏ふし轉まび給たまふ。他人たにひと

〔語釋〕
(一) 世になき父母が

(二) 君に

(三) 聖取の事

(四) 妻が

〔考異〕
(一) 人々の一人々一人々

(二) 誰にかは「は」ナシ

人ひとはいとほしと思おもす。おとどは、胸むねつぶれて、開あけて見み給たまへば、后宮ごきゆう切せなる事ことありて、度々たびたびものし給たまへと聞きゆれど、惱なやましげにて」とのみあるを、然さしもおはせぬ様さまに承うけたまはるは、おこたり給たまひけるにや。たゞあからさまに、立たちながら物ものし給たまへ。斯かう數かずにもあらず、人侮あなづられなる身みにはあれども、昔むかしの人々ひとびとの、世よにあらむ限かぎりは、思おもひ寄よらむこと聞きえ合あはせてあれ」とこそ宣のたまひし(二)か。萬よろづの憂うれはしからむことをも、誰たれにかは聞きえむとてこそ。必かならず。(三)と書き給たまへり。見み給たまひて、夢ゆめにもこの事ことと思おもはせ、この東宮定とうきゆうさだめの事ことにこそあらめ、斯かう御消息ごせうそくなどあるに、思おもほし疎うそみて、いとど相見あひみえ給たまはじ、と思おもはしていとほしく思おもほす。内うちには、かよる事ことを知しり給たまへれば、限かぎりぞと思おもはして、北きたの方かたはうつぶし臥ふして泣なき給たまふ。おとど、仲雅ちゆうだ畏かしこまりて承うけたまはりぬ。日頃ひごろは、みだり脚氣あしのけにや侍はたらむ、更さらに踏ふみ立たてられ侍はたらず、立たち動うごもし侍はたらぬを、年頃としごろあひかへりみ侍はたりつる者ものの、親おやの許もとにまうでき(六)

〔語釋〕
（一）いかで御方にをらん
とのみ思ひ居れり

（五）思雅は

（六）思雅

〔考異〕

（二）して一ナシ

（三）給ひつる一給へる

（四）委しうは「は」ナシ

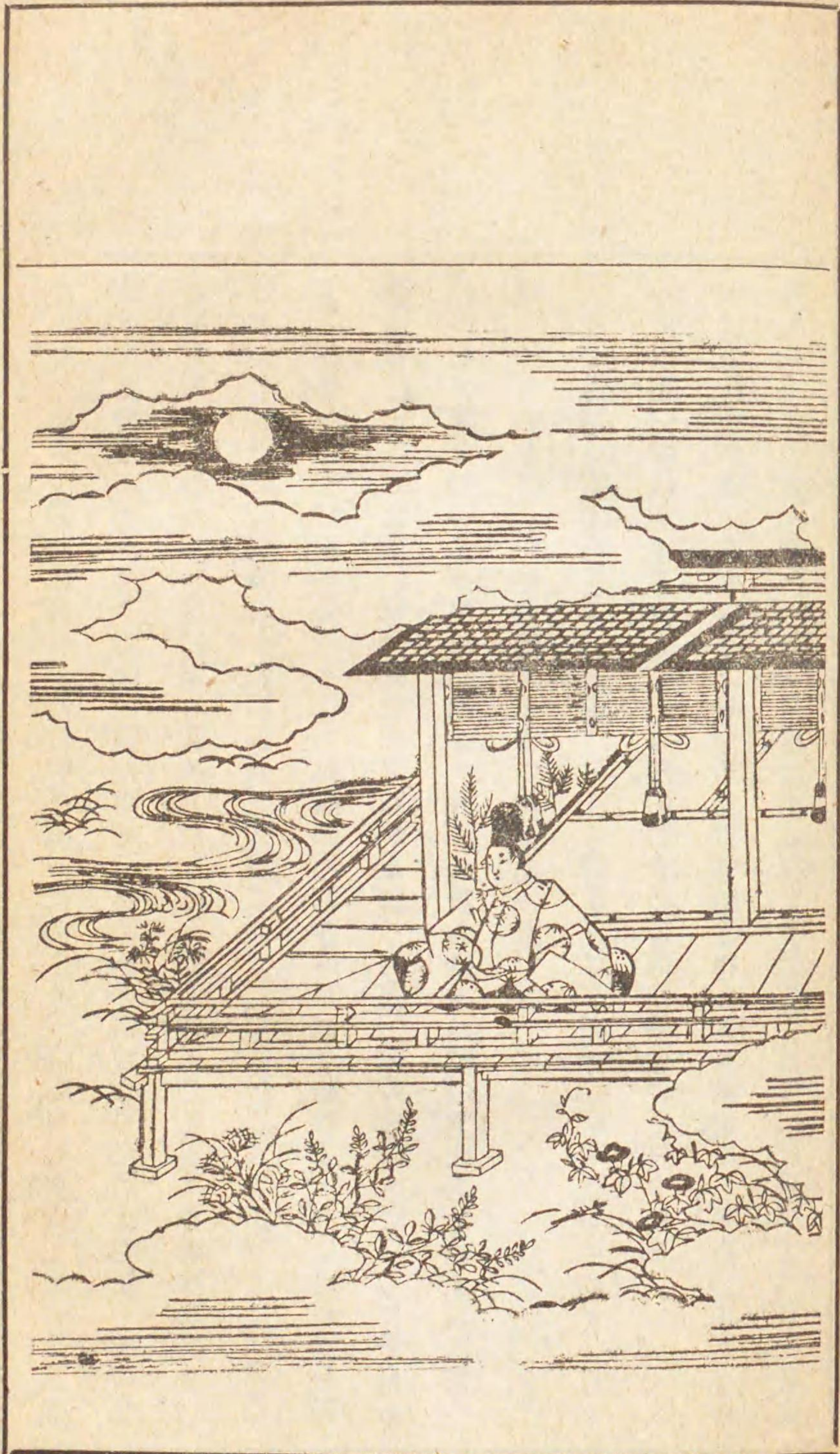
①思雅歸りて六君を招く
六君歸らず。

て、「俄にわづらひ侍りて、いと怪しくなむ」と告げまうで來つれば、「空しくもこそなり侍れ。見給へざらむやは」とて、みだり車ながらまかり下りてなむ。昔の事どもは、何か仰せらるよ。萬の事、いかでとのみこそ。少しも踏立てられ侍らばまゐり侍らむ。

とておし包みて奉り給ひつ。

宮の亮が御許へ参りて奉るを御覽じて、后宮「いづくに如何様にて逢ひつる」と問はせ給へば、亮「左大臣の家の藤壺の女御のものし給ふ方に、公卿たち數多、これかれしてなむものし給ひつる」宮、后宮「心地病むとあるは、然あるにや」亮「委しうは見え奉らず。車は門の外に立ちて侍りつ。簀子にことなる事もなげにて」など聞ゆれば、宮、后宮「なほ聴かじと思ふなめり。負けじ。脚病むといふは、輦の宣旨を申しくださむ」など宣ふ。

おとどなほ簀子におはす。夜の更け行くまゝに、八月十七日ばかりの月のやう



〔語釋〕
(二)正頼の子息等

〔考異〕
(一)あとの「の」ナシ

(二)しなまやしなりや
しなまや

(四)日一日一日

やう高くなり。御前の遣水、前裁さまづくに面白く、蟲の音も哀に、風も涼しきまよに北の方、六君かくて後、我が心とこそ、親の御許などにおはして、餘所なる折もあれ、恐ろしき所に取り籠められなば、如何様にせむ」などおほし嘆く。他人々も、母屋の隅のもとに集まり、おはする所のいと近ければ、おとどの宣ふ、忠雅「今参りたらむ童べのやうに、御簾の外にさふらはせ給ひて、内にこれかれ御覽するこそはしたなけれ。例ならず斯かるは、内裏の御方の御もてなしにやあらむ」など聞え給へど、出で給はず。夜、一夜おはすれば、君たちえ立ち給はず。曉に、おとど、かへり給ふとて、御消息あり。

忠雅よろづ怪しくならはぬ心地こそ、よきものよしなや。

世の中はかよる物ともしら露のおきるて消ゆる今朝ぞ知りぬる

老の學問を、などなむ。只今わたらせ給ひねとて、御迎に奉る。

とあり。北の方、御返もきこえ給はず、御消息もなければ、御迎の人は、日一日立

〔即位式。忠雅不参。正頼以下昇位。司召、季英以下昇進。〕

〔語釋〕
(一)今上の

(二)あて宮をさふ

ちくらしして、歸り参りて、「ともかくも仰せられず」と申せば、怪しと思す。この御腹の君たち四所、十一なるを兄にて、四つ五つなるおはす。七つにおはする女君ぞ、父母いみじうかなしうし給ふ。女はそれが限なり。

かよる程に、御即位二十三日あるべしとのよする。帝は、かよる事を何とも思さで、たゞ藤壺のるまり給はぬを、夜晝おほし嘆けど、御使も久しう奉り給はず、後の宮の聞え給ひし事をのみ御心憂しとおほしつゝ、御徒然とながめおはしませば、御乳母たち、命婦、藏人などは、「かよる物の初に、おもしろく興ある事をこそ。かく物をのみ思ほし嘆き、日々に御かたちの衰へおはしますこと」など言ふ。

かくて御即位になりぬ。上達部みな参り給ふに、太政大臣、暇文出だして参り給はず。御心もゆかず、萬の事、もろ共に、と思しと人に見せぬ事、と思せど、これかれそよのかし聞え給へば、出で給ひぬ。例のことなりぬれば、上達部、陣にて宣ふ、「太政大臣の、かよる大事に参り給はぬかな。暇文出だし給へれど、ことに

- 〔語釋〕
- (一)兼雅仲忠
- (二)后宮の隱謀
- (三)正頼兼雅
- (四)藤英
- (五)仲忠
- (六)兼澄
- (七)兼澄
- (八)兼澄
- (九)兼澄
- 〔考異〕
- (一〇)居給へれば―居給ふれば
- (一一)これはた―これこそ

悩み給ふことも無かなるものを」と宣へば又他人、「かの北の方、親の許にこもり居給へれば、小かりし子どもの騒ぐなるをこそ、もてあつかひてものし給ふなれ」と。右の大殿、右大將、この事の聞えの出で來たるにこそあめれ、然は思ひし事ぞや、など心の中に思ほす。大將、藤大納言などは、太政大臣をだに、斯くし奉り給へば、まして如何に、など思ほしつ。

かくてかうぶり賜ひ、みな人加階し給ふ。大殿、右大殿、二位になり給ふ。東宮亮、四位階こえて、學士の右大辨三位になる。家あこの衛門尉、かうぶり得給ふ。女かうぶりに女御、更衣、皆かうぶり賜はりぬ。乳母たち加階す。藏人たち、かうぶり得なす。

かくて晦に、司召のころ、右衛門督かけたる宰相なくなりければ、宰相には右大辨季英、右大將按察使かけ給ふ。右衛門督に兵部大輔、「いと難くなり給へり」と世に言ふ。兵部大輔に顯澄、右大辨に東宮亮、これはたの藏人右衛門尉になりぬ。

- 〔語釋〕
- (一)忠雅自身來れども
- (二)忠雅も歸れと口では言ひ居る中に自分の方から離れて仕舞ふがましなり
- (三)母をさがして
- (四)忠雅
- (五)忠雅
- 〔考異〕
- (一)去り侍りなむ―去り侍る

かくて太政大臣の北の方、大宮の御許にわたり給ひて、おとどの御消息はあれど、御返も聞え給はず、まことに物し給へど、對面し給はず。宮もおとども、正頼大宮あぢきなし。童べにもあらず。心のかはり給はむにだに、身一つにもあらず、子どもあまたあり、かく物し給ふめれば、忘れ果てじとこそ思はめ。かく宣ふめるを、對面し給へ」と聞え給へば北の方、六君何か、普う人に知られぬ前に、彼處にもかう宣ふ程に、己が心と去り侍りなむとなむ。これかれ見習ひてもあるものを、己しも、かしこき心に忘れじとなむ。たどつきたりし乳母なくて懐にのみ習ひたる子の、求め泣くなれば、らうたさに、とさまかうさまにたばかりて迎ふれど、許されぬをのみなむ、いと悲しくは」とて物も聞え給はねば、大殿は、かくやんごとなき折にもまるり給はず、君だちをのみもて煩ひ給ひつと、姫君をば、北の方のいと悲しうし給ひしかば、これ見には、然りともわたり給ひなむ、と思しつ

〔語釋〕
 (一)兼雅
 (二)仲忠
 (六)后宮
 (一〇)女一宮の容色が衰へたりとかこつて取かへざるを恐れて外へ出さぬ也
 (一一)給ひつゝ給ふ
 自朱雀院の氣樂なる生活。御子たちを招く。仲忠警戒して女一宮を参らせず。

〔考異〕
 (一)目を一日をば
 (四)添ひ居て「居」ナシ
 (五)する「などすれば」
 (七)のみ「のみは」
 (八)御子たちは「は」ナシ
 (九)呼び参らせ給へば「御消息ありつれば」

つ、目をはなち給はず、守らへておはする、右の大殿の聞き給ひて、然思ひしことぞや、^(二) 後の宮にも、然聞えてきかし、と思す。^(三) 右大將我もかよる目をや、と思し怖ぢて、ありきもし給はず、夜晝添ひ居て、御消息あれば参りて、人の参りまかでする車の音すれば、たづね問はせ給ひて、^(四) 心ゆるびなく思す。^(五)
 かくて朱雀院には、こと人々また参らせ給はず、仁壽殿の女御のみ、出で給ひし御供に仕うまつり給ひてさふらひ給へば上、朱雀「今はかく、中宮も内裏のみこそは。こと人々は参りもせじ。そこにのみ添ひて、御子たちはあまたあれば、睦ましきものには。凡人のやうに、子ども前にするて、つい並びてあらむと思ふなむ」とて御局ひろく造りしつらはせ給ひて、殿上人、上達部も、さりぬべき、御前におはし、車どもなどして、朱雀、女御たち、一の宮も参り給へ」とて呼び参らせ給へば大將、仲忠「この頃、^(二〇) いたく損はれ給ひにためり。然あらざらむ時、^(九) ことさらにも参らせ奉らむ」とてとどめ奉らせ給ひつ。二の宮は参り給ひぬ。上、見奉

〔語釋〕
 (二)「たち」衍文の歟
 (三)用する歟
 (四)忠康を駕にせんと望む人あれど
 (八)「朝臣の」歟、實忠をいふ
 (九)あて宮をいふ歟
 〔考異〕
 (一)この「なし」
 (五)まうで「まで」
 (六)て侍り「ナシ」
 (七)ちれたりけるにこそは「ちれにたりけるにこそ」

り給ひて、朱雀「一の宮をこそ、こともなしと思ひしか。これも、怪しうはあらざりけり。琵琶、箏の琴の上手もがな。この御子たちの料にせむ」と宣ふ。男御子たちも、みな同じ所にて、夜晝御遊せさせ給ひておはします。御妻持たまへるは、夜はまかで給ふ。彈正宮は、夜晝さふらひ給へば上、朱雀「などか、この宮たちの、見る限まかでぬは。里もなき、ようする人のなきか」と申し給へば女御、仁壽「これかれ、然ものする人侍れど、如何なるにか、かく獨りのみぞ」と聞え給へば、朱雀「もし藤壺をや、月見るやうに思ひけむ。實忠の朝臣こそ、さやうに聞きしか。それだに今は然も無かなるものを」仁壽「それ、山里に侍るまよにさふらひし、とて喜びにまうで來たりけるを、言ひこしらへ侍り。それは、時々京に通ひまうで來けるを民部卿の言ひたばかりて侍りけるにこそ」上、朱雀「怪しみ思ひしは、こしらへられたりけるにこそは。心さへこそあらまほしう。かの朝臣は、山籠こそあいなかりしか」女御、仁壽「いでや、いと幸なく侍りける人にこそ。若君のまだ産

〔語釋〕
(一)豫期の如くにゆかば
此子は實忠に妻あはせん

(二)今上

〔考異〕
(三)ことこそ

(四)絶えて絶ちて絶え
(五)侍るなれば侍れば

〔後〕后宮兼雅に文を贈りて
立太子の事を迫る。

(六)あるぞかしとある
所かると
(七)事とこそ事と事
こそ

れ給はず、さる氣色侍りける夜、「思ふやうにてあらば、必ず然せむ」と宣はせければ、親もこれかれも、然思ひて侍りけるを、かよる折節にも、かくやんごとなく妨げ給ふ人の出で給ふれば、父母、「今まで世に侍りて、かよる恥を見ること」と伏し沈みて湯水も絶えて思ひなけき侍るなれば、親をなけかするにまさる幸なき事は、何處にか」と聞え給へば、上、朱雀よに然契られたらば違へられじ。われらが心には似さる所し給ふ人の御心なればあるぞかしと聞えしかど、あるまじき事とこそものせしや」と宣ひて夜畫物し給ふ。

〔畫詞〕 ことばは仁壽殿の女御の御方。

后の宮聞召して、思ふやうに子どもひき率て、我が儘にはた目ざましや、と思して、右の大殿に御消息奉り給ふ。

后宮對面聞えまほしけれど、これも煩はしくし給へばなむ、ものし給へと聞えぬ。太政大臣に聞ゆべき事ありて、度々ものし給へと聞ゆれど、惱むことありて、

〔語釋〕
(一)あて宮の手前を兼ねて
(四)忠雅
(五)同意せぬ事はあらじ
(六)父の意に背くならば
子と思はぬがよし
(八)商山の四皓の力によりて漢の文帝が皇位に即きしをいふ
(一〇)我を
(一一)手紙の中にある文句
(一二)大將をいふ

〔考異〕
(二)とは「は」ナシ
(三)人に逢ひて一人にもあひつゝ
(七)子は「は」ナシ
(九)成しに「は」ナシ
(一二)すゑとも「すゑ」すゑ

りて、など聞ゆれど、然しもあらぬやうに。かの事は如何思しなりぬる。そこにもや、昔の懸想人の心つよましくなむとて、長き世の悦とあるべき事をも、せじとは思すらむ。ことには、萬に思へど、人に逢ひて、言語らふべきにもあらず。かの人にもあひ給ひつよ、よく言語らひ給はば、然りともなむ。大將、そこに、やんごとなく思さむ事を、何か妨げむ。然らば、子ともな見給ひそかし。天下にかしこき身なりとも、親の見給はざらむ子はいと悪しからむは。四人翁を語らひてこそ、事は成しにけれ。五人の心を一つにて、「昔より斯うなむある、この事許されずば、山林に交りて、公にも仕うまつらじ。何を勇にてか」と申されば、然りともえ否び給はじ。此事に叶はざらむ人をば、かく數ならず思はれたりとならば、この世にも、あの世にも深くつらしと思はむ。とあり。おとど、「大將をな見そ」と宣ひつるに驚きて、坊をばすゑすとも、大將の疎にはいかと思はむ、かく宣ふが恐しく畏きこと、と思して御返事、

〔語釋〕

(三)東宮に

兼雅畏まりて承りぬ。仰せられたる事、世にいかでと思ひ給ふれど、あひ叶ふ人の侍らぬになむ。今、かたぐ宣ひ語らひて聞えさせむ。と聞え給ひて、大將の御許に、「宮より斯くなむ」とて奉り給へれば見給ひて、人にも見せて隠しつ。

〔畫詞〕

こゝは右大將殿。宮の御方。右近の君といふ人、御前にて聞ゆるやう、

右近「宮のすけ、大臣にて、思ふやうにておはしまさば、まかるらむ」と申す人侍る「宮、「あな聞きにくや。いと心違なり」と宣ふ。人々多く参り集へり。

人の奉りたる物、いと多かり。こゝは宮、乳母たちなどして遊び給へり。殿内、

ひきかへたる様に、人多く参り集ひて、市の如のよする。

かくて、内裏よりはじめ、世界にのよしりていふやうには、「梨壺の御腹のなむ居

給ふべき。後の宮、夜晝泣くく聞え給へば、帝然思しなりにたなり。おとど

たちは、知らぬやうにて、皆心を一つにてなむ物し給ふなる」と言ひのよする。

〔語釋〕

(一)いかでとーいかでかと

(二)いとーナン

自世間の噂。正頼あて宮の落膽。

〔語釋〕

(一)忠雅等

(二)あて宮

(三)あて宮腹第一の皇子

(四)正頼

(六)あて宮の心

〔考異〕

(五)なでふにか世に交らふべき―なでふ事にか世に經まじるべき

(七)宮たちを―を「ナン

左のおとどは、御掣たちをつらしと思す。御掣たち、かく言ふことを、如何に思すらむ、夢にても知らねど、など互に思せど、誰もく物もきこえ給はず。女御の君につき奉りつゝ物望せし人々、一人目に見えず、若宮の御方に参りつどひし人々も参らねば、ひきかへたる様に、いとしめやかにながめおはします。内裏よりも、久しく御消息も見えねば、おとど、この事實に定まりなば、またの日法師になりなむ、なでふにか世に交らふべき、とおほし嘆きて、君たちもみな集ひて、萬にこしらへ給へど、思ほし慰むべくもあらず。藤壺は、萬におもほせど物も宣はず、帝の御心あやまりにたればこそ、人も斯くは言ふらめ、かく言ふも著く、御返聞えねど立ちかへり賜ひし御使も見えぬは、如何なるにかあらむ、この事は、けにくく然なりて、おとども宣ふやうになり給はど、我も尼になりなむ、何か世に交らむ、と思ほす。宮たちを見奉りておはす。若宮は、何心もなく、遊びありき給ふ。

仲忠の女一宮に對する辯解。仲忠水尾に仲賴を訪はんとす。

〔語釋〕

(一) 自分も梨壺方に賛成したる様に

(二) 「おはしますにだに」

(三) 女一宮が見知りたれば

(五) 六の君が里に留りて歸らぬを

(六) 假令本人は后宮に御目にかゝらずとも事を圖る事は出来ぬにあらず

(七) 仲賴を尋ねに

〔考異〕
(四) 罪には一罪にも

かくいふ程に、十月になりぬ。大將宮に聞え給ふ、仲忠「世に人のいふなる事は、
ことにも知りて侍らむやうに聞き給へらむがいとほしき事。自ら御覽すらむ。御
即位に参りて侍りしまよに、院のかく旅におはしますだに参らず、三條にもまか
らで侍るは、知り侍らぬよしを、一所に御覽じてば、罪にはあて給はじとてな
む。太政大臣の、ひとり月頃おほし歎くなるを、人の御上とも承らず。ことに
は、見給へ煩ふべき人あまたも侍らねど、一所の御心を思ひ給ふるも、恐ろしく
なむ」宮、女「それは、人のし給ふにもあらずなり。對面し給はぬをこそ、誰も
誰も宣はすなれど、聞くやうありとて、正身こそ對面給はざめれ。ことには、さ
やうにたばかりとも、し果てられむ様をこそ見侍らめ。大將、仲忠「何事を、いか
やうなる筋に」宮、女「みな集はれてこそ、定められけれ。知らず顔にも」大
將、仲忠「すべて、この事な宣ひそ。さらに知り侍らず。さるは、去歲より「水尾
の山籠とぶらひにまからむ」と言ひ契りて侍るを、花盛にも、とかく障りて物せ

〔語釋〕
(一) 正賴方より言ひ來るとも

(四) 何處へ行くものぞ

(六) 仲賴の妹

(七) 懐胎の頃

(一〇) 仲賴の妹を招きたれば

〔考異〕

(一) ほどは「は」ナシ

(三) まうて「まで」

(五) さう「くしき」を「を」ナシ

(八) 頃しも「折しも」

(九) 恥かしく「恥かしき」様

ずなりにしを、此の頃紅葉の散らぬさきにとてまかり出で立つなるを、二一日侍
らざらむ程のうしろめたければなむ。然あらむほどは、「あからさまに渡り給へ」
とありとも、ゆめわたらせ給ふな。まかり歩いて来るに、此方におはしま
さぬ時は、いと便なく佗しくなむ。なほ然きこゆる心あり。歸りまうで來なむ、
待たせ給へ」ときこえ給へば宮、女「いづちか。苦しくのみあれば、臥し起きも
心安くてこそ。日頃はこれかれ物し給はねば、人少にてさうくしきをのみなむ」
大將、仲忠「それ、然ぞ實におはしますめる。この東の對に侍る人を、召しあけて
さふらはせ給へ。琴などいとう弾きて、様々にせぬわざ無う、よき人なり。心
なども善けに侍るめり」宮、女「恥かしけに、かくいと異様なる頃しも、いかで
か」大將、仲忠「何かは、いと恥かしく侍らぬ人なめり」とてまうのほらせ給へば、
いと目やすく装束きてのほり給へり。容貌もいとおとなくしう清けなり。宮、御
琴賜ひつゝ弾かせ給ふ。いとおもしろく弾き、さまざまにいとらうくしく、を

〔語釋〕
(六)按察使の君を

(一)といふ—となむいふ

(二)按察使に—の

(三)侍る—はべなる

(四)大將殿—殿—ナシ

(五)聞えつ—聞えなどナ

(七)これかれ—それかれ

〔仲忠、涼、藤英、行政、忠こそ等仲頼を訪ふ。〕

かしき人得つと思ほす。按察使の君といふ。大將殿按察使に宣ふ、仲忠「水尾へま
 かるなり。御消息やある」按察使、「かくあらはれて侍りとて、恥ぢ侍るものを」
 と聞ゆれば大將殿、仲忠「世に然もあらじ。いとよく褒め聞えつ」と宣ふ。犬宮を
 かしけにて、ひとり立ちし歩みはじめ給ふ程なり。父君見奉り給ひて、仲忠「こ
 こに、かく睦まじくなし奉るは此の子によりてなり。火水に入れども、宮は見も
 入れ給はず、乳母どもの限は、うしろめたければなむ。侍らざらむ程に、出だし
 給ふな。いとあわたどしくて、出でつゝ人に見ゆれば、見苦しくなむ。上局など
 して、斯くてものし給へ」と宣ひ置く。宮に、仲忠「今、いと疾くまうで來なむ。
 聞えさする様にを」と出で給ひ、其處にてこれかれ待ちつけ給ふ。
 山籠にとらせ給ふべき物とて、御衣櫃一かけ、長櫃一かけ持たせ給ふ。ほそを風
 といふ琴持たせ給へり。御供には御前六人、御馬添六人、御前二人は四位、二人
 は五位、二人はやんごとなき官ある六位、御隨身四人、雑色六人、装束白きろう



(語釋)

(一)涼

(三)「あかうま」は「はかま」

(五)藤英

(六)「せい」は「制敷」

(七)行政

(八)松方

(九)思こそ

(考異)

(二)鈍色の「色」ナシ

(四)やどり風―山もり

のさしぬき、青露草してらうすりに摺りて、白き綾のうちき、白馬、御供の人よりはじめて、さまざまの白、青、しなぐに著たり。中納言は、あか色の織物の襖、鈍色のさしぬき、綾かいねりのうちき、あかうま、御前二人は劣れり。やどり風といふ琴持たせ給へり。右大辨は青鈍あを、その外も皆同じ色あを、御馬添四人、せいありて、學生とも御前四人、秀才二人、進士二人。御供の人、みな大學の衆の下藤なり。良中將は青色あを、白のさしぬき、薄色のあやの袷、御供の人前の如し。琵琶持たせたり。雅樂權頭、琴持たせたり。右馬助近正は和琴、左衛門の非違尉時正、笛持たせたり。これかれ装束は心にまかせたり。律師、わらは四人、法師四人、童子六人、これもみな、よう装束とよのへたり。この人々の御供に、かよる物の上手の限おはしつどひて逍遙し給ふべしとて、人の数少く擇らるとて、我もく見聞かむと思ひて、雑色は、やんごとなき侍の人ぞ出で立つ。御衣櫃、割籠もちには、侍出で立つ。かくて、二條の院に集まりて、

(考異)

(一)なほかゝる―多かる

(二)山籠は―うち群れてあはしたれば―ナシ

御仲頼の款待。管絃。讀經。贈物。仲忠、仲頼の子どもを世話すべき事を約す。

(三)まづ紅葉の―まつこの紅葉の

(四)ども―ナシ

(五)まづ―ナシ

(六)おももの―もの

そこにて變などして出で立ち給ふ。大宮の大路より、北様にのほり給ふほど、車どもいみじく立てつどけ見る。徒人もいとおほかり、忍びて、やんごとなき人ども。なほかゝる中にも、大將はいとこよなう清けなり。山路まで、御送の人いとおほかり。到り著き給ひて、麓より「迎にもものせよ」とてかへされぬ。

畫詞

こゝは水尾の路。

かくていたりつき給ひて、山籠は、年頃、堂などもいと廣く、いかめしう、瀧いとおもしろく落したる所に住みて、里なりし女子迎へて物ならはす。山犬、里犬といふ男子どもに、笙吹き横笛吹かせて、箏の琴女にならして居たる夕暮に、うち群れておはしたれば、山籠喜びかしくまり聞え給ふこと限なし。まづ紅葉の林に御座ども敷きて、みな居給ひぬ。まづ「勞れ給ひぬらむ」とて、山の法師ばら、童へ出だして、をかしき枯木拾はせて、お前に銀のまがりなどとり出でて、おもひの炊がせ、お前の朽木に生ひたる茸ども、糞にさせ、苦茸など調じて、銀の金

〔語釋〕
〔三〕山伏に「なるべし、
山伏は仲頼をいふ

〔八〕「など」とて「なるべし

〔考異〕
〔一〕添へて参り―添へ参
る

〔二〕御前には―は「は」ナシ

〔四〕昔は―昔―昔の

〔五〕嵯峨野の様に―釋
迦の供養にも

〔六〕かなしき―かなしき

〔七〕山籠も―も「ナシ

碗わんに入れつゝまるれば、君きみたち興けうじつゝ召めし添そへて参まり、御物語ものがたりなどし給たまふほどに、御割籠わりごども持ちて参まれり。取りわたして、山籠やまごもりの御弟子みでし、童子ごうじ、その邊へんのものものの此この君きみに仕つかうまつるなど召めし集あつめて賜たまふ。御菓物くたものばかり、御前まへには参まれり。
御酒度みきたび々くきこしめして、物ものの音ねどもかき立て、山風やまかせは紅葉もみぢの散ちりたるをば吹ふきたて、枝えだなるをば散ちらしなどする夕暮ゆふぐれの興けうあるに、松方まつかたの雅樂頭うたのかみ、おほきなる木の節ふしの、いとをかしきを取りて、山伏やまぶしと御土器かほらひまるるとて申まうす、松方まつかた權頭ごんのかみは、昔むかしは、いさよかの御みありきにも、後おのれ奉たらすこそ仕つかうまつりしか。かよる路みちにおもむき給たまひにし折をり、告つげさせ給たまはましかば、御供ごもに仕つかうまつりて、御弟子みでしにてもさふらひなましものを、世よの中に交まじらひ侍はべれど、何なにの勇いさみも侍はべらぬに」と泣なくく御土器かほらひまるりて、松方まつかた嵯峨野さかがのの様にやうにも侍はべるなり」とて、
松方まつかた吹上ふきあひにさそひしともの山深やまふかくたづねて君きみを見るがかなしき
山籠やまごもりも「今日けふは」などて、
〔三〕
〔四〕
〔五〕
〔六〕
〔七〕
〔八〕

仲頼たにかげ谷風ふきあひの吹上ふきあひぞわれもおもほゆる山やまの錦にしきにまとるせるけふ
大將たいしやう殿どの、
〔三〕

仲忠ちゆうちゆうもよしきの昔むかしの友ともを見みにすればあらしの風かぜもにしきをぞ敷しく
中納言ちゆうなの君きみ、

涼すず君きみをのみたづねていまは秋山あきやまもみちも深ふかくなりけるかな
右大辨うだいべん、むかしの藤英とうえいなりし火ひ影かげ姿すがた思おもひて、
〔二〕

藤英とうえい七夕たなはたのあふ夜よぞわれも君きみをみしたれも心こころのめづらしきかな
律師りし、

忠ちゆうこそ限かぎりなく憂うれかりし身みだにありはてぬ山やまにて君きみがおもひをぞ知しる
中將ちゆうじやう、

行政ぎやうせい君きみをだになしと嘆なげきしもよしきにありし世よさへも變かはりぬる哉かな
右馬助うまのすけ、

〔考異〕
〔二〕大將殿―大將も

〔二〕秋山も―秋山の

近正君によりしぐるよ袖のふかき色ををれる紅葉と里人や見む
時陰

〔語釋〕
(一)山ぶしふさにあり
歟、一本山ふたたにあり

いにしへは君がころもにみえし色の今は山べに散りまがふかな
とて、中將は琵琶、山籠箏の琴、權頭琴、近正和琴、時陰横笛、またそれらが中に、
箏箏吹くものと吹きあはせて、他人々は唱歌し、歌うたひ、夜一夜あそび給ふ。
所々見やれば、遠う火を焼きて、その山のめぐりの山じにたにあり。ちかう見れ
ば、火を山のごとくおこして、大なる鼎たてて、栗を手ごとく焼きて粥に煮させ、
よろづの菓物食ひつよ、人々の御供なる人に賜び居たり。夜更けゆけば、露霜お
く。夜一夜あそびあかし給ひて、つとめてになれば、御粥まるる。露に濡れたる
御衣ども脱ぎかへ給ひて、山籠の御供に、よき人の子どもの四人あるに、四所なが
ら取らせ給ふ。

(三)粥に「に」ナシ

〔考異〕
(一)まがふ→まよふ

その日は題出だして、用意しつよ文つくり給ふ。右大辨の御供なる秀才一人は文

〔考異〕
(一)多う→多く

つくる、一人は講師す。かよる程に、源中納言殿より、檜割籠、たごの割籠、屯
食などいと多うあり。御前どもにもまゐり、人々にも賜ぶ。よき物いと多くもて
こみ給ひて、日暮れて文つくりはてて、讀ませ給ひて、おもしろきはみな誦し給
ふ。右大辨の御聲は、いと高ういかめしう、大將の御聲はいとおもしろう哀なり。
夜更くるまで、文誦じ、曉がたになりて、風いと哀に、木の葉の雨の如くに降る
ほどに、律師陀羅尼よみ給ふ。大將いみじくめで給ひて、箏の琴ひき合せ給ふ。
おもしろきこと限なし。山人も里のものも、みな涙落さぬはなし。しばし遊ばせ給ひ
て、山籠たごごとにて陀羅尼をよみ給ふ。中納言やどもり風召して調べ合せ給
ふ。かくて暫しありて、君たち、諸聲に文あそび給ふ。律師、山籠の御聲のいと
尊きを聞きめでて、土器取りてかく申し給ふ。
忠こそ出づとせし身だに離れぬ火の宅を君水の尾にいかですむらむ
山ごもり、

(二)にもまゐり→にまゐ
る

(三)がた→ナシ

(四)たごごと→常ごと→
つねのこと

(五)やどもり風→やまも
り

〔語釋〕
(一)此處にある者誰かあ
て宮に戀せざりし者あら
んや

仲頼烟たついへは思ひの苦しさに身も消ちがてら入れるみづのを
大將、

仲忠ことにかくあるどち誰か燃えざりし袖のみをにもぬるみやはせし
中納言、

(二)「くらみ」なるべし

涼人よりは我ぞけぶりの中なりし今もきえねどえやは出でける
辨殿、

藤英夜をくらめ螢もとめしわが身だに消えしおもひの目にけぶりつよ
中將、

〔考異〕
(二)袖のみをにもーその
みのをにも

行政もえ渡る火のほとりにはありながら乾かぬものは袖にぞありける
など宣ひつよあそびあかし給ふ。

(四)もてーナシ

かくて日やうく晴れもてゆく程に、種松山籠の御料に、粥の料、あはせ、いと
清らに調べて、馬どもに負せて、乾飯、馬二十ばかりにおほせて、布のあを、綿

〔語釋〕
(一)「こ櫃」は「長櫃」なる
べし

あつく入れて、いと多う持たせ、長櫃どもに飯入れさせ、酒樽に入れて、持たせ
てまうでて、山伏どもめし集めて、飯酒くはせ、乾飯、襖、一つづつ取らす。大

(四)袋

將もたせ給へりし長櫃、御衣櫃、山ごもりに奉り給ふ。こ櫃には、淺香に沈の脚
つけて、蘇枋を枋にして、銀の鉢、金碗、かいさし、銚子、水瓶など、よろづの

(五)「三袋ばかり」歟

調度つくし入れたり。御衣櫃には、御法服一つ、限なく清らにて、夜の装束、綾
のさしぬきに、織物の襖、あやの裏どもなどして、その襖に書きて結びつけたり。

〔考異〕
(二)鉢―はしーナシ

仲忠露けて山邊にひとりふす人のよるの衣にぬぎかへよとぞ
子どももの装束、女子のもの、いと清らにし入れてまゐり給ふ。山ごもり見て、

(三)たり―たる

仲頼世をすてしこけの衣にぬぎかへばまた夜々にもものをこそ思へ
とて賜はり給ひぬ。中納言は、きぬあやをいとくどつに入れて、供養のやうに
て、三所ばかり奉り給ふ。右大辨も、いとをかしき物奉り給ふ。律師は、よろづ

の行の具、菩提樹の數珠よりはじめて用ある物を奉り給ふ。中將は墨染の装束、

〔語釋〕
(一)非道を行はざる旨を佛に誓ふ法

(三)仲頼の妹

(五)妹の人柄をいふ

〔考異〕
(二)懺法せさせ—こんぐ打たせ

(四)籠りて—て」ナシ

(六)ネ—ナシ

うちき、さしぬき、黒椽のうへのきぬ、五條の、袈裟具したる法服三くだりは主に、装束四くだりは上童の料に、下衆の装束三十具ばかり、童子の中に皆し給ふ。これより外は、心にまかせてをかしき土産ども。

かくて物など参りて、又の日は文つくり、その寺にも、めぐりの寺にも、御讀經せさせ懺法せさせなどし給ひて、その夜はとまりて、とさまかうさまに遊び給ふ。山ごもり、大將に聞え給ふ、仲頼昔一條殿に侍りし人の、便なけにて侍るめ

りしを、見給へ棄ててまかり籠りて、年頃いかで侍らむと思ひ給へしを、殿になむ顧みさせ給ふと承るをなむ、深うよろこび畏まり聞えさする。別いても昔だ(四)によも侍らざりしを、如何様にと思ひ給ふるになむ、かたはらいたくは「大將(五)仲思」年頃さて物し給ひしを、え承らざりき。去年、事のついでありて、彼處に宣ひしになむ、驚きながら聞えむとせし。これかれ集はれて騒がしかりし程は、さし別きたる様なりしかば、え。その宮むかへ奉りてしかば、これかれ外へわたり(六)

〔語釋〕

(一)仲頼の妹の謙遜なるをいふ歟

(二)犬宮

(三)女一宮が

(五)仲頼の妹に

(六)仲頼の妹に

(九)仲頼自身をいふ

(一〇)「いかう」は「一向」なるべし

(一一)「侍らせじ」歟

〔考異〕

(四)惡ク—ナシ

(七)御徳と—御徳に

(八)思ひ—思う

(一一)「いかうに—いやうに

(一二)「いちへ—げに

給ひなりにしかば、この三條の本家なりし方になむ侍る、東の對になむすませ奉る。さて、殊に頼もしけなる事も無けれども、自らをだに人にもし給はぬかな。幼きものの侍るめるを惡みきたながるめれば、身にはらうたくおほえ侍るになむ、(三)あづけ奉りてなむ侍る。いと目やすく、警策なる人にこそ物し給ふめれ。君をのみ見奉りて、彼處に對面せざらましかば、人のいふことは空言になむ」山ごもり、仲頼「然だに御覽じなさば、いと嬉しく、佛の御徳となむ。この侍る童へも、母亡せ侍る。身ひとつだに、侍りがたけに承れば、こよら召しあつめて、松の葉をも苔の衣をも、もろ共にこそはと思ひ給へてなむ。女子をさへものして侍るを、童へは、いかで宮仕も仕うまつらせむ、と思ひ給ふれど、親は便なく侍れば、いかでかは、とてなむ」大將、仲思「何處に、如何にせむとか思ほす。せむ様を宣へ。かの伯母君にあづけ奉りて、いかうにこの事をうしろみ奉らむ」いらへ、仲頼「いと嬉しき事になむ。昔だに、いと御前にさふらひ難かりし上に侍らじ。今居給は(二二)

〔語釋〕
(二)いよゝ東宮に立た
れなば

(四)我には隠してある
(五)當然と思はるゝ事な
れば

(七)「思さゞむと」歎
(九)「など」となるべし
(一〇)子どもは今日にも
引取るべし

〔考異〕
(一)それぞーそれは
(三)されどーさりとも
(六)たどーナシ

(八)給ひたれば給ふ
めれば給ひたれば
(一)多く御物語ー御物
語多く

む東宮に奉らむとなむ」大將、仲忠「藤壺の一の宮こそは。それぞ、さらにとど
の人とは見え給はぬ。今ながら、内裏の御氣色に劣り給はず、いと氣かしこくな
む」山ごもり、仲頼「また承るやうぞ侍る。さらば、まして、如何にこれらが爲
に嬉しう、さふらはまほしう侍らむ」大將、仲忠「あなうたて。何でふさる事か」
中納言、遠「されど、みな定まりたる様にこそ。日さへ取られにたりとか申すなる」
大將、仲忠「すべて知り侍らず。ことには忍びてなむ」中納言、遠「御心にこそ、忍
びてとは思せど、他人は然思ひたらざめり。然もはた覺えたる事なれば」大將、
仲忠「おのづから終には見えなむ。たど藤壺は、え然や思すらむ、と思ふのみこそ、
いみじうかたはらいたけれ。それも、おとなしき心つき給ひたれば、然思すや
うもあらむ」などと、仲忠「さらば、このあこたちは、今日もいざかし」山ごもり、
仲頼「今年ばかりは、物の音すこし聞き知らせ侍りて、年かへりて奉らせむ」など
これかれ多く御物語してかへり給ふ。御装束どもは、白き襖、綿入れて、銀の泥

〔語釋〕
(一)香染敷

(二)辨ひてーてナシ

(四)「御供人に響まうけ
て」なるべし

〔考異〕
(三)御迎にー御迎の

(五)まうけてーてナシ

して繪かきたり。あや、かいねりの鞋、薄色の香のさしぬき、御供の人は、薄色
の襖、露草して遠山を摺れり。わた皆入れたり。下人は朽葉、色の襖など、心に
まかせて著たり。山ごもり、子ども、法師、童へ御供にて、ふもとまで御送り給ふ。
君たちは、御馬牽かせて徒歩より、大將は笙の笛、中納言は横笛、中將、篳篥、松
方、近正は御さきに立ちて、陵王、落躰舞ひて他人々御後に立ちて、錦の如く散り
たる紅葉の上を歩み出で給ふ。山のあらしに、いろくの紅葉雨の如く降りかよ
れば、御襖にいろくに付きたり。麓にて別を惜みて、歌よみて、山ごもりはか
へり給ひぬ。
君たち御迎に、さまざま人多く参れり。大將、中納言の御迎に、人々小鷹手にす
ゑつと参れり。歸り給ふまよに、野邊ごとにあさらせ給ひて、御餅袋に入れさせ
給へり。右大辨は路にて別れ給ひぬ。人々は、大將の御送して殿へかへり給ひぬ。
御供人、響まうけて、御前にはかづけ物し、御馬添、雑色には腰挿せさせ、入りて

〔語釋〕
(一)仲忠が
(二)女一宮

見給へば、宮ありき給はでおはすれば、いと嬉しとおほす。小鳥ども、生きたるは
犬宮に奉り給へば、もてあそび給ふ。御餌袋なるは、調じて宮にまゐり給ふとて、
聞え給ふ、

仲忠君がため小鷹手にすゑ野べにいでてまつむしをくふ鳥をとりつゝ

宮、

女一鷹するて野べにといふは我がためにかりの心を知らせやはする

と宣へば、仲忠「思ひぐまな」とて按察使の君に山のありつる様など御物語し給ふ。

〔畫詞〕 ことば畫。

かくありきはじめ給ひてぞ、院に参り給ひける。上きこしめして、御前に召して、
物も宣はで、つれづれとまもり給ふ。久しうありて、朱雀「年頃かよる住居の、斯く
せまほしかりつること、見まほしき事もせむ、とこそ思ひしか。などか参られ
ざりつらむ。一の宮も久しう見ねば、迎へに物せしかど、止められにきとか」と

〔考異〕
(三)野べにいでて―秋の
野に
(四)知らせやはする―知
らするとやは―知らする
かさは
(五)し給ふこゝは畫かく
ありきし給ひこゝかし
こありき
(六)つれづれとまもり給
ふ―つれづれとまもり居
給ひ

仲忠、朱雀院に参りて
水尾の有様を奏す

(七)住居の斯く―住居の
み

(八)久しう見ねば―久し
うこそ見ねば

(九)とか―ナシ

〔語釋〕
(五)夫を持ちて暮したく
ば望の如くにせよとの意
歎

〔考異〕
(一)申し―奏し

(二)ありし大將―文ども
など―ありしと間はせ給
ふ文どもなど

仲頼涼に贈られし米綿
などを妻の許に分つ

(三)奏し―申し

(四)給ひつれば―給へれ
ば

(六)わいてもこゝろに―わ
らてだに

宣へば大將、いとほしう苦しと思ひてものも申し給はず。久しうありて、仲忠「年
頃勞るところありて、まかりありきもえし侍らざりつる。仲頼が侍る所にまか
りて、相勞り侍りてなむ、辛うじて参りて侍る」と申し給へば上、朱雀「それは皆
獨居してこそ物せらると聞きしか。何でふ事かありし」大將「彼處のあはれなる
様奏し給ひ、人々のつくれる文どもなど御覽せさせ給ふ。」

〔畫詞〕 ことば院の御前。

かくて山籠は、人々の奉り給ひし物ども見給ひて、人々に賜ふべきは賜びて、わ
が御用になるべき留めなどして、中納言の粥の料にとてありし物をば、子どもの
母君の許にやり給ふとて、御文には、

仲頼日頃は、これかれ人々物し給ひつれば、騒がしくてなむ。いかに徒然にとの

みぞ。なほ人の有る様にてあらまほしく思されば、さやうにても。わいて
も、こよに見奉りし様にてもありにきとな思しそ。今の人の心は然しも

〔語釋〕
〔二〕我も出家してせめて
御近處に居りたし

〔考異〕
〔一〕琴もならはせむ一琴
どもならはさむ

〔三〕宣へる一宣ひつる

あらし。山の末よりも、時々とぶらひ聞えむにつきて物し給ひぬべうは、さ
ても、

松風のさびきまにくく年を経てひとり臥すらむ君をこそ思へ

さては、これは粥の料とて、人の賜へりし。そこにて煮させ給へ。子どもの

宿直物、綿おほく入れて賜へ。戀ひ聞ゆれど、暫し琴もならはせむとてなむ。

とて奉れ給ふ。女君見給ひて、いみじく泣きて御返、

仲頼妻 承りぬ。客人たち、いとめでたう、花やかにてまうで給ふなりしをなむ、

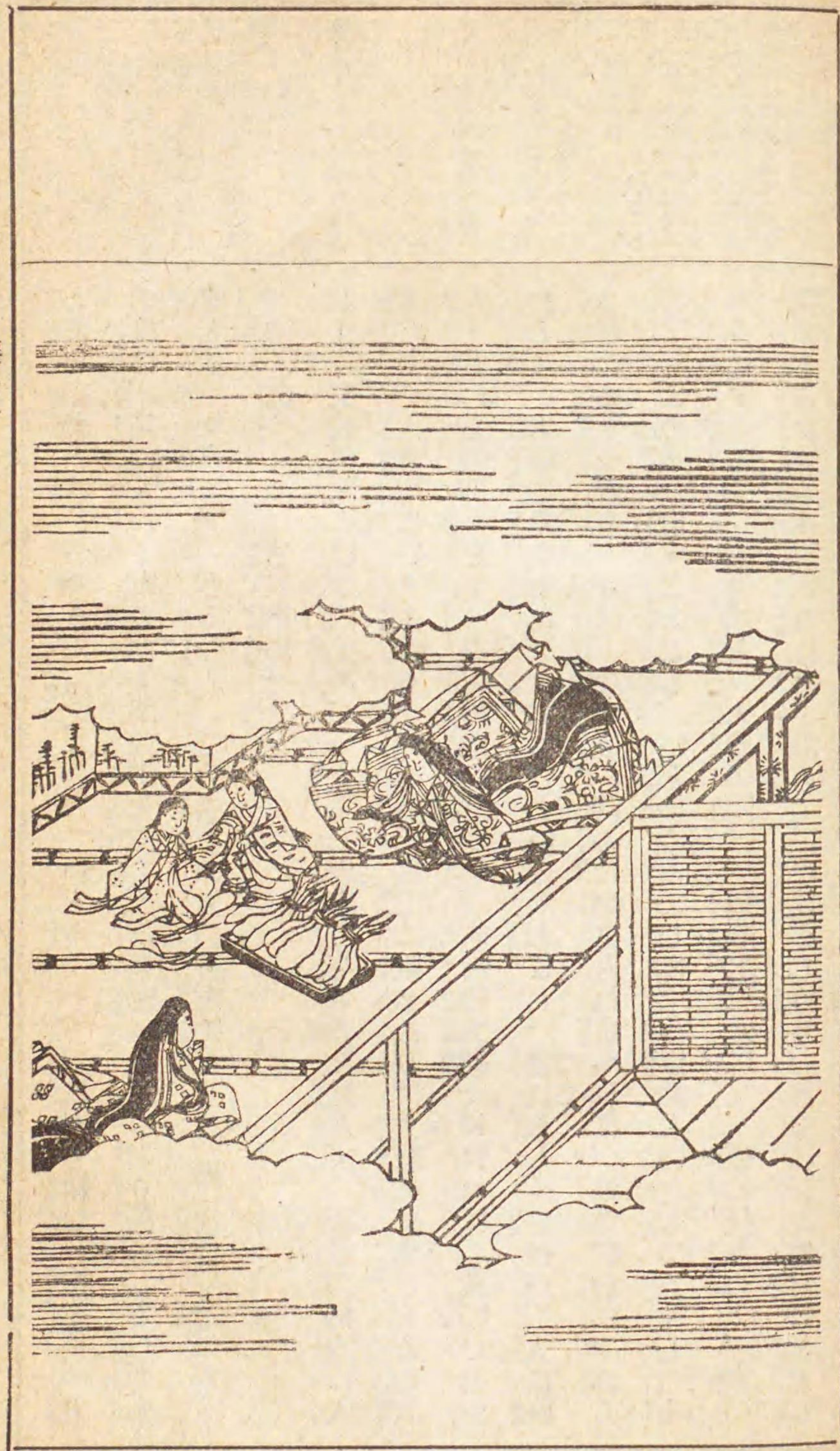
いと悲しう承りし。世人のやうにてとか。いでや、人に見えぬべき所なり

とも、今更にさる心をば、いかでか。さやうなる様にて、近うだにいかで、

とこそ。松風はそれをのみなむ。

ひとり寐るよさむもいざや苔を薄み霜おく山のあらしをぞ思ふ

この粥の料は、宣へるやうに。



〔語釋〕
 (一)正頼郎
 (二)仲忠方
 (三)實頼
 (四)兼雅郎なるべし
 (五)藤英
 (六)不詳一本に「檢非違使か」と註せり
 (七)藤英は

藤英時めく。妻の己に不満なるを諒す

〔考異〕
 (一)四)正頼の十四の君
 (二)馬車も「も」ナシ
 (六)集ひまゐる「つゞきまゐる」
 (九)衆「すけ」
 (一〇)こといとかしこし「とくいとかしこし」と
 (一一)今の「今も」
 (一二)この「ナシ」
 (一五)大學の院に鶴脛「此の院に鶴脛」此の院に侍りし程は鶴脛

と書きて奉り給ひつ。きぬ、綿を見れば、いと多かり。親に奉り給ひ、按察使の君の許に、箱に入れて奉りたまふ。御たちも、みな賜はりて、引き散らしてむしりなです。女君、仲頼妻、昔も今も、この吹上の君の御贈物をこそ、豊に見れと宣ふ。

畫詞

こよは宮内卿殿。

かくて三條の院には、四面めぐり立ちし馬車もをさく見えず、藤壺の御方に人もなし。大將殿にいと多かり。頭中將の御方に數多あり。大殿には集ひまゐる人、君たちの御車ども。右大辨殿の御かた、式部の大輔かけたれば、此頃ひしせむとて、大學の衆の車あまた立つこといとかしこし。世におもく思はれ、人に許されたる學士なりしかば、今の帝、御心に御書入れ給へれば、常に御前にさふらひて、この議り申すことども、いと疾くきこしめす。容貌もいとものくし。北の方に聞ゆるやう、藤英昔、大學の院に、鶴脛はだかにて、飯に飢ゑつゝ、書の見ゆる限は守らへて、夜は螢を集めて、學問をし侍りしときに、心地常におもし

〔語釋〕
 (一)十四の君が藤英を不足に思ひて常にすねて居る也
 (二)我如きつまらぬ者に嫁したりとて
 (四)正頼
 (五)我を
 (六)名鳴り「歎」
 (八)寵を專にして
 (九)其の生みたる御子が
 (一一)梨壺
 (一二)却つて皇太子にもならんとす

〔考異〕
 (三)奉るなむひがみたる様なる「奉り給ひなむひがみたる様なり」
 (七)ななり「なり」ならせ
 (一〇)坊「は」
 (一二)あめれ「あれ」
 (一四)人の「の」ナシ

ろく頼もしく、思ふ事なく侍りし。今かう、公に仕うまつり、かゝる御中にさふらへど、物思はしう、侘しうなむ。それは、かう見奉るかぎり、親にも對面し給はず、世には心もゆかぬ様にて經給へば、生きて侍る效なむなき。拙き人につき給へりとして、親を勸じ奉るなむひがみたる様なる、おとどは、御前去らず召しつかひ給ひ、公事につけても、思ほし數まへ給へり。御前をも、斯くてこそ思召しかへりみ給はめ。いとあぢきなき御物恥なり。世の中ははかなきものぞや。藤壺の、昔よりななり給ひて、多くの人をいたづらにしなし、宮仕をし給ふとは、傍ほとりに人寄せ給はず、すなはちより子を生み給ひしかば、坊、后がねとののしられ給ひしかど、音もし給はず。思ひがけざりし人の昨日今日うち生みてし給へるこそはあめれ。かよれば、かく花やかに見給ふらむ人々はかなうなりて、季英人々しくならむとも知らず。大學院の藤英と言はれ侍りしかども、上達部の端にまかりならずや。博士とて侍る人の、侍らぬをぞ思ひ侍る」と聞ゆれど、いら

〔語釋〕
(一)正頼

立太子の期近づく。絶望せる正頼。

(五)あて宮

〔考異〕
(一)の外ナシ

(三)男君一男子

(四)集ひてさふらひ給ひて一集ひさぶらひて

(六)恨をも「を」ナシ

へもし給はず。

〔畫詞〕 ことは右大辨殿。

かくて東宮月のうちに居給ふべしといふ。右大殿の御門の外には、人も避けあへず、馬車立ち、市の如くのよする。后の宮よりは、日ごとに御消息あり。三條院には、内裏の御使も見えず。かよる事の筋も聞え給はねば、おとど、ともあれかうもあれ、この事定まりなば、又の日頭おろして、山に籠りなむ、と思ほして、然るべき所おほし設け、法服などまうけ給へば、男君も女君たちも、集ひてさふらひ給ひて、泣くく聞え給へば、おとど、正頼「我女子おほかる中に、此の子生れしよりらうたけなりしかば、懐よりといふばかりにおほし立てて、いかでこれをだに人竝々に、と思ひしに、ある時は對面におもだたしき時もあり、ある時はいかでかしき時もあり來しに、なほいかでと思ひて持たりしに、これによりて人の恨をも負ひ、徒らになるといふ人も聞えしかど、強ひて宮仕に出だし立てたれば、安

〔語釋〕

(一)立太子の事が

(五)正頼に取次げども

(六)忠雅の心

(八)立太子の取計らひを

(一〇)近澄

(一一)宮あこ君

(一二)知らせよ

(二三)我に

立太子の當日。忠雅召さる。

〔考異〕

(一)へきにあらざべき

(三)何せむに「な」てふに

(四)並み居給ひて「な」みだをさへて

(七)今は「は」ナシ

(九)一人の一人も

からず羨まれ言はれし人の、かく人笑へに恥を見むを見ては、世にもまじらふべきに「あらず」と宣ふほどに、「明日になりぬ」といふ。君たちは萬に聞え給ふをも、正頼「すべて我このこと聞かじ。人も言ふな」と宣ひて、その日のつとめて、塗籠にさし籠り給ふ。大宮、「我も、何せむにかよる目を見るべき」とてもろ共に入り給ひぬれば、君たちは、左右の戸口に並み居給ひて、泣きまどひ給ふこと限なし。

その日晝つ方、「まゐり給へ」とて御使あり。「斯くなむ」と聞ゆれど、音もし給はねば、参り給はぬよしを申させ給へば、太政大臣を召す。それも参り給はねば、立ちかへり召せば、今は斯く俄になりにたれば、我がすると人の思ふべきにあらず、と思してまゐり給ふ。正頼「藏人の少將の君、左衛門佐の君、なほ参りて、物の氣色も案内せよ。こゝに参り給へとありつる、疑あり」とて参らせ給へば、我か人かにもあらで参り給ふ。

〔語釋〕

(一) 忠雅

(二) 實賴をして忠雅に渡さしむ

(三) 梨壺腹東宮に定まれらならんと想像せる也

(四) 忠雅が

(五) 近澄が

〔忠雅〕 密書を正賴に贈る。あて宮腹の皇子立太子の吉報。一家のさやめき。兼雅仲忠等の態度。

〔考異〕

(六) 馴せて一ナシ

(七) ぬきて一とりて

かくて、酉の時ばかりにおとど参り給へれば、上、ともかくも宣はで御硯とり寄せ、物を書かせ給ひて、封じて、頭中將して奉らせ給ふ。おとど見給ひて、御氣色よろしきを、藏人少將、これは我が御甥の御子なれば、思ふやうなりと思したるなり、と思して、我が親は徒らになり給ひぬと思ふに、色もかたちもなくなりてさふらふを、上御覽じて、をかしう哀なりと思してうちほよ笑ませ給ひて、今上すこし生き出でて、太政大臣の御後につきて立ち給へ」と宣へば、御供に宣ふことやあると、氣色を見ありき給ふ。

その夜は、職の御曹司にとまり給ふ。其處にまうでて、御前にさふらひ給ふ。曉方におとど、人間をはからひて、御文をいと小さく書きて賜ふ。賜はりて、急ぎ出でて見れば、「おとどの御許に」とある御文、いとよく封じてあり。従者の行末も知らず、御門に立てる馬にのりて、馳せて三條院に参り給ふを、君たち、太刀をぬきて殺しに来る者かとおほして、如何に言はむとするものならむと、身も冷え

〔語釋〕

(一) 東宮に

(五) 忠澄

(六) 假名にて

(七) あて宮腹第一の皇子

(八) 今上の

(九) あて宮

〔考異〕

(一) うち一ナシ

(三) のいちへ知らずいさまだ聞かずいさえ聞かず

(四) 聞き給ふにあとど一聞くにあとどは

はてて、物も言はねば、宰相の中將、辛うじて、うち戦きて、祐澄如何に。誰か定まり給ひぬる」と宣ふ。少將のいらへ、近澄知らず。おとどの御文ぞある」とうち戦きて宣ふ。君たち、あけて見むと騒ぎ給ふ。少將、近澄御文をいかで」とて塗籠の戸をたよきて、近澄近澄さふらひ侍り。取り申すべきこと侍り」といふ聲を聞き給ふにおとど、いとど物おほえ給はず。宮、大宮言ふべき事こそはあらめ」とて明け給へば、君たち押し込み入りて、御文を奉り給へば、おとど、御衾をひきかづきて、うつぶし臥して、御文を左衛門督の殿に、讀めと宣へば、女手して、

忠雅東宮には、若宮居給ひにけり。昨日の酉の時ばかりになむ、宣旨下り侍りにし。例の作法にもあらず、御心一つにせさせ給ひて、「宣旨の前に人に漏らすな」となむ仰せられたる。巳の時にぞ、列引くべう侍る。参り給へ。と聞き給へり。おとど、いとすくよかに起き居給ひて、正賴彼處には告げつや」

〔語釋〕
(三)あて宮が

(四)第四の皇子

〔考異〕
(一)参る—参れ

(二)告げよや思ひ—告げよと思ひ

(五)東の御方—北の方

(六)せられたらむ—せられし

と宣へば、近邊まづ此處に参るとて」と申し給へば、正頼「はや告げよや。思ひ困じぬらむ」とて御氣色いとよし。
少將は、南の宮に参りて見給へば、若宮をば膝にする奉りて、今宮をばいだき奉り給ひて、帝の年頃の御契を思し出でつよおはするに、藏人の少將、近邊「斯うく、なむ」と聞え給へば、女御の君うち笑ひ給ひて、あて宮「然ればこそ。年頃の御契はよもあやまち給はじと思ひつれど、怪しう言ひのよしりつれば、心地もあわたどしうぞありつるや」とて宮をひきする奉り給ひて、御裳ひき懸けておはする程に、おとど君だち、装束し給ひて、打連れておはして、寢殿の東の御方にわたし奉り給ひつ。二の宮をば西の對にうつし奉り給ひて、君だち殿人ひき率て、しつらひ仕うまつり給へば、片時に、玉の如しつらはれぬ。所々みな有るべき様にしつらはれぬ。御前には、いと雪の降れる庭のごと、砂子敷かれたれば、かねてせられたらむ様なり。斯く、しする奉り給ひて、みな内裏にまゐり給ひぬ。上には乳母

〔語釋〕
(二)梨壺腹の皇子が東宮たるべき旨を

(三)今更梨壺腹が立つ位ならば、以下兼雅の心

(四)あて宮の腹に

(六)梨壺腹立太子の事は

(七)實忠

〔考異〕
(一)よりて—て—ナシ

(五)ならひならねば—ならひならねど—なからひならねば

(八)給はて—給ひて

(九)給へど—給はて

たち、大人、わらは、里なりしも皆まうのほりて、髪揚げ、装束したり。西の御方には、例の御方々みなわたり給ひぬ。大宮、太政大臣の、民部卿の宮の北の方たちは、寢殿にわたり給ひぬ。
大將聞き給ひて、仲忠「この事によりて、頭をえさし出でて、朱雀院には、ひがひがしき様に思されき。三條には、たえまうでよ、辛き目を見つるかな」とて内裏へいそぎ参り給ひぬ。右の大殿、中宮より斯く宣へれど、夢にも思ひかけず、然るべくばかゝる人の腹に、こゝら生れ集まり給はましやは、天下に言ふとも、まさに、と思して、斯くなむと人にも宣はず。兼雅「こゝらのならひならねば、人にも心もおかれじ。善からぬもの一二人心をあはせてだに、悪しと思はれぬれば、人を徒らになすものなり」とて思しかげざりつれば、斯かるをもなにも思はず。されども、内裏へも参り給はず。新中納言は、小野へものし給はで、此の頃は京にものし給へど、例のかたく疎々しうて物し給ふに、誰も聞えたまはで、昔を

〔語釋〕
(一)梨壺腹立太子の事を

(三)仁壽殿

(四)宮にも一歎

〔考異〕

(二)けるを―けれど―ければ

(五)如何にぞと―如何にとぞ

(六)御消息―御様こそ

(七)屈すらむ―くんざらむ―うんざらむ

思し出づることども多かり。されど人々のいとほしう言ひのよしりつれば、いとほしう思ほしけるを、斯かれは、耳安く聞き給ふ。

かよる程に、院の女御の御許に御文あり。

實月頃いと思はずに承りつれば、心憂く思ひ給へつるを、只今なむ承り直

しつる。真にやあらむ。大方のいとほしさよりも、殿におほし歎きつるなむ

いみじう。宮たちも、みづから参り來むとすれば、ゆよしけなる身なれば、

物のはじめにはとてなむ。いま今日明日過してぞ聞えさせむ。

となむある。御かへり、

仁壽承りぬ。宣はせたる事は、けさ太政大臣の消息になむ、さやうにありける。

今の程も如何にぞと、いと煩はしく、恐ろしき世の中なれば、今見給へ定め

て、ことごとくには聞えむ。宮たちの御消息思ふには、何事にかは思ほし屈す

らむ。

〔語釋〕

(一)涼なるべし

●立太子の宣旨、東宮附職員の任命。

(三)東宮附の武官

(四)東宮の

(五)「なぞぞ」の「ぞ」衍文なるべし

(八)推薦状をよこしたる也

(九)辯解すべき

(一〇)御役に立つべき

(一一)仲忠北山より出てし時の馬添の一人

〔考異〕

(一)給ひつ―給ふ

(六)みな―みなく

(七)召さるゝ―なさるゝ

(一〇)事も―事ども

と聞え給ひつ。

かくて夕方になりて、宣旨持て参りて、上達部などみな参り給へり。中納言殿に、

今日はまうけし給ひつれば、皆あるべき様にせられぬ。帶刀どもは、君たち、御

聲たちの中に然りぬべき、一人づつ出だして、なし給ふ。殿上人、藏人などぞ、

これかれ御勞りにて、みなまるりぬ。宮司召さるゝ程に、大將殿より、人のなる

べき御文してあり。見給へば、

仲忠日頃、宮に度々まるれど、物騒がしきやうにて、え聞えさせず。さるは自ら

も聞えあきらめぬべき事も侍るを、いかで。さて年頃相顧みるべきものの侍

るを、數ならぬ心地して、え勞り侍らぬを、この折にだにこそはとてなむ。か

れこれの御賜、しか侍るめれど、御勞になさせ給へ、とてなむ。然も仕う

まつりぬべきものなり。宮の大進にまかりならむ、となむ申し侍る。

と聞え給へり。それは、伊豫介になされしが今一人なりけり。御かへり、

〔語釋〕
故 (一) 私に人選せよとの仰

(三) 東宮大夫

(四) 希望者の中にて

(五) 仲忠

(七) 藤英の妻十四の君

〔考異〕

(二) 思ひ一思う

(六) 大將の殿人—大將殿の人

(八) 上には—ナシ

(九) こと比—ナシ

〔後宮、仁壽殿女御の榮華を憚る。出家の望。〕

正頼承りぬ。宣はせたる人の事は、いとやすき事なり。一人は此處にもせよとあれば、然るべき人も侍らぬを思ひ給へ煩ふを、然りぬべしと御覽する人侍らむを、よろこび聞ゆる。と聞え給ふ。

かくて、大夫には伯父たちならまほしう思したれども、帝心寄あるやうに聞ゆる中にて、然てぞよからむと思して、大將をなし給ふ。権亮には、大殿の御勞にて、學士には、もとより宮に仕うまつる文章博士、大進は大將の殿人、少進には、大宮の御いたはりにて一人、女御の君のいたはり給ふ一人、もと宮なる一人なりぬ。それより次々の、みなこれかれ御勞になりぬ。御櫛匣殿、右大辨の北の方。

畫詞

こよは東宮のはじめの所。

かくて後の宮は、御心にこそ萬思したばかりつれ、帝にはじめ聞え給ひしに、御氣色悪しかりしかば、ことに聞え給はざりしかば、斯かることも、上にはことに怨

〔語釋〕
宮の心

(二) 給ひぬる女御なるべし

(三) 后宮の心

(五) 仁壽殿が

(七) 祐澄歎

(九) 仁壽殿女御の方

(一〇) 仲忠

〔考異〕

(四) えも—だも—も

(六) 迎へて—て—ナシ

(八) ありたる如して—ありたるにまして

み聞え給はざりけり。下には、いと妬しと思すこと限なし。この腹の御子たちみな死なむ、遂に思ふ如せむ、などおほして、朱雀院に出で給ひぬ女御憎しと思すこと、昔よりこよなし。いかで憎み立てて、院の内にえもさふらはせじ、と思せど、近きに大殿を二つ三つばかり賜はり給へば、御子たちの御局をしつと、やんごとなき人の御女を迎へて、八の宮も宰相の御女をえ給ひて、迎へてさふらひ給ふ。我もくと清らをしつと、めでたき御勢なり。彈正の宮御妻のなければ、物すこし覺え、かたちよく親ある人、我もくと参り集へば、それしもぞ人はさまざま多くさふらひ給ふ。女御の御許に、宮たち集ひて、御かたちは花をおりたる如して、大人も童も、夜晝あそびのよしり給へば、院の帝は、これを御覽じ聞召すとして、此方にのみおはしまして、朱雀一の宮むかへて、大將の朝臣あはせて、遊をせさせて聞きしがな」と宣ふ。父おとど、御同胞の君たち、常にまゐり仕うまつり給ふ。大將も聲たちも、院に参り給ふととぶらひ聞え給ふ。五の宮も、

- (一) 女二宮
- (二) 后宮の心
- (六) 六の君
- (九) 忠雅
- (一〇) 六君が夫の許へ歸りたり
- (一一) 后腹の女三宮は

六君夫の許に歸る。

- (一) 正頼が引留めし様に
- (二) 正頼の言ひし如き振舞をしたらば
- (三) 心憂き一心憂い
- (四) べからむ一べき
- (五) 思す一おもほす
- (七) ゆく一と一ゆらゆらと
- (八) 夜寒に心細きを一夜
- (一一) より一よりて

二の宮を切に聞え給へば、いかでかと思したり。

かくて后の宮、わが御族よりはじめ、上達部、御子たちを憎しと思したれば、睦

ましかるべきおとどたちも、畏まりて参り給はず。斯かれば、なほ心憂き世なり、

これ等が世になりはてぬるにこそはあめれ、斯かる事を見で、御髪おろして、然

りぬべからむ所に、籠り居にしがな、と思せど、只今は心をさめぬ様なりと思す。

畫詞 ころは朱雀院。

かくて太政大臣の北の方は、この事によりてこそ、宮の御掣取もあべかりしか、

今は音もなし、若君たちは戀ひなき給ふ、御腹はゆくくと高くなる、何心もな

く出で給ひて、秋の頃ほひ夜寒に心細きを、月頃離れ給ひて心ほそく思す。おと

ども夜毎におはしつと、泣きわび給へば、六君「如何せむ」とてわたり給ひぬ。

忠雅「何事により、如何に思ほしてありつるぞ」と聞え給へば、斯かる事をなむ聞

きしかとも聞え給はず、世の中のよしりいで給ふ宮なれば、男の御心といふも

の妬くもと思して、おとどのとどめ給へるやうに聞え給ふ。おとど、忠雅「然思し

けるこそは心憂けれ。天下に然宣ふとも、此方に疎なる心はありなむや。よし、

親然宣ふとも、哀とおほさば、月頃かく佗びさせ給はましやは。そこをおろかに

思ふ人にて、人のおほし宣ふ様にしてましかば、我が様なる人にしもなくて、こ

とになどを如何にし給はむ。よき人はありとも、己が志のやうなる人はえしも

あらじや」北の方、聞き給ひてけりと思して、ありし様をはじめより聞え給ふ、

六君「宮の御文奉り給ひし時は、限となむ思ひし。その御文を見せ給はずなりに

しかば、つらきになむ」と聞え給ふ。おとど、忠雅「それは、實に然聞き給ひければ

思しけむ。いかでか、然おほぞうには思ひなむ。ことにありや」とて取り出でて

奉り給ふ。斯くて、ありしよりおほん中いとめでたし。

畫詞 ころは大殿の北の方、御物語し給ふところ。君たち遊びありき給ふ。

女君御髪喝食ばかり、いとをかしけにて、雑遊し給ふ。御たち三十人ばかり、

- (一) 正頼が引留めし様に
- (二) 正頼の言ひし如き振舞をしたらば
- (三) 心憂き一心憂い
- (四) べからむ一べき
- (五) 思す一おもほす
- (七) ゆく一と一ゆらゆらと
- (八) 夜寒に心細きを一夜
- (一一) より一よりて

嵯峨大后の落膽

- 〔語釋〕
- (一)女四宮懐胎中也
- (二)「四の宮」なるべし
- (三)生れたる皇子男なり
- (四)四宮腹を太子に立て給へ
- (五)朱雀も其積りて今上に申し給へ
- (六)正頼の妻、大宮
- (七)太子のあて宮腹に定まりたりと聞きて
- 〔考異〕
- (八)「なり」に「に」ナシ
- (九)「思ひ」思ひて
- (十)「侍る」侍れ「は」給ふべけれ

童あまた。御前に人の奉りたる物いと多かり。簀子に大納言、宰相いますがり。宰相中將、藏人の少將など物語し給ふ。

かくて、嵯峨院、もし宮男もぞ生み給ふと思して、朱雀院降り給ひてはじめて参り給へりけるに、大后の宮聞え給ふ、嵯峨后、いかで聞えさせむ、と思ひ給ひつるに、一の宮、時過ぎてめづらしき事のありけるを、もし思ふやうにてあらば、「斯く今日明日になりたるは、斯くし給へ」と内裏にも聞えむとなむ思ふ。院にも御心えて申させ給へ。三條の御子も、聞きてつらしと思はめど、かの人まだ小かりし時、そこをば、大人になし給ひしなり。然思ひ奉りしかば、目に近く見るはかなしきうちに侍るべけれ」など聞え給ひければ、朱雀「それまで定まらずば、然こそ物すべう侍るなれ」后の宮、嵯峨后、それを、定まるまじきやうに聞え給へかし。これを思ふになむ、限になりたる命は惜う、冥路は安かるまじけれ」と聞え給ひけるに、斯く聞召して、くちをしう、急ぎてもしてけるかな、と思す。朱雀院は、

- 〔語釋〕
- (一)必ず此御子を東宮に立てんと

- 梨壺腹の御子、あて宮腹の第二の御子共に親王になさる
- (四)今上があて宮と約束して
- (五)梨壺腹を立てんと
- (六)朱雀院、嵯峨院、嵯峨大后
- (七)女四宮腹の御子を立てんと
- (八)今上が
- (九)あて宮腹の御子を東宮に
- 〔考異〕
- (一)御心も「も」ナシ
- (二)「など」ト
- (三)「九」帝「ナシ」
- (四)「見」世人の「一世」人の「み」な人の
- 今上、あて宮の歸りを促す。

然ぞあらむと思しければ、悪しとも聞召さず、たゞ嵯峨院の後ぞ如何に思すらむ、とぞ思しける。

かくて内裏の帝、母后の、御心もゆかだまかで給ひにしをいとほしと思して、只今生れ給へる梨壺の御子を、今上坊にするよとこそ宣ひしか」とて親王になし給ふ。藤壺の二の宮は、二なれど、三の親王になし給ふ。東宮孕まれはじめ給ひしより、「世中たひらかに思ふやうならば、必ず」など宣ひ契りて、年月ゆくを待たせ給ひし程に、あるは生れあるは孕まれ給へるを、母后は、昔よりの筋ありとて、大后公卿、一つ心にて宣ひたばかるなり、おほやけ、帝、大后、孕まれ給へる御子をと思して、返すく、一つ御心にして妨げ給ふべし、と聞召して、人にも宣はで、帝御心一つに思して、その日まで音もせで、俄にはする給ふなりけり。后の宮の御氣色を見、世人の言ひのよしなるなりけり。

藤壺の参り給はぬことを、夜晝上はおほし嘆く。人もことにまう上らず、わたり

〔語釋〕
(一)今上があて宮へ

〔考異〕
(二)月頃は御使もたてまつり給はず一月頃御使もたてまつり給はて

給ふ所もなし。起き臥しおほすに、月頃は御使もたてまつり給はず。坊するてば、その喜してむ、それにつけてを、と思して待たせ給へど、然もあらねば、今上あさましう、心強き人にもあるかな。例の、我こそは負けぬべかめれ」とて木工助なる藏人して、御文奉れ給ひければ、御たちめづらしがり悦びて、御簾のもとにたゞ出でに出で、土器さしなどす。御文には、

今上たちかへり聞えても、覺束なく、度々のを、見つとだにあらざりしかば、見る人もあやしがりしを、常に世の例にはあらでもありぬべしや。月頃は、ある様にもあらずや。

とて、

今上山彦のこたへざりしを聲々にまだしらくもと騒がれしかな
なほ参らるまじきにや。

とあり。いと珍らしと思して御返、

〔語釋〕
(二)東宮

(四)なるべく同行せん

(七)東宮

〔考異〕
(一)思ひ―思う

(三)べかめり―べかぬ

(五)参りぬ―参り給ひぬ

(六)なむ―ナシ

(八)下にはまが―しげなりや―しだいはさかしまなりや

あて宮いと珍らしう賜はせ給へるは、畏まりて承りぬ。いと多く嬉しき御喜は、まづ奏せむと思ひ給へりしかど、月頃仰せごとも侍らざりしかば、如何なる御氣色にかと思ひ給へつゝみてなむ。山彦とかや宣はせたるも、いさや。白雲もいろかはりぬと聞きしかばやまびこもいかゞ答へ憂からぬおほろけにや。参り侍らむことは、この宮今日明日参り給ふべかめり。同じくばとてなむ。

と聞え給ひて、織物のほそなが、あはせのはかま一具賜ふ。御かへり御覽じて、参りぬべかめりとおほして、

今上昨日は珍らしきなむ。雲の色とか。

たつ雲をいろくみだる風といへどいづる月日をかざしやはする
悦とかあるは、おほろけの志にやは。この宮一人によりてなむ、數多の親にも恨みられ奉りぬる。下にはまが―しげなりや。今傍も羨ましとこそ思

〔語釋〕
(一)それらも皆御身を愛するからの事

(二)立太子の事につきて

(三)脱文あるべし

(六)あて宮の方

(八)あて宮に

〔考異〕
仲忠、あて宮の御方に伺候す。東宮参内の用意

(四)月日とか侍るは一月と日とは

(五)給ひて給ふ

(七)参り給ふ参り給ひ

(九)言ひつがせ取りつがせ

へ。それらも皆。

とて、これはたの藏人して奉り給ふ。喜びて持て参れり。大宮もおはす。見給ひ

て、大宮「嵯峨院も、聞え給ふ事あとり聞きしぞかし」と宣へば、女御の君、あて宮の

とこそきけ。怪しくも」とて笑ひ給ふ。御返、

あて宮 承りぬ。月日とか侍るは、

いづれともくもへだつれば月も日もさやけく人に見ゆるものかは

それも御心にこそは、と承りしかば。

と聞え給ふ。

かくて東宮の御讀經に、物のはじめなりとて、僧綱たち、名ある智者どもなど召

して、論義などせさせ給ふ。大將参り給ひて、夕つ方、西のおとどに参り給ふ。

簀子に衾まるり給ひてこれかれ物聞え、大將、女御の君に物聞え給ふ。孫王の君し

て御いらへなど言ひつがせ給へば、大將、仲忠、今はかく、ありしよりも親しく仕

〔語釋〕
(一)御取次なしに御話いたしたし

(二)立太子の事に關して

(六)兼雅の許に

(七)朱雀の后宮

(八)孫王の君

(一〇)「思すとて」となるべし

〔考異〕
(三)さても―はなぞて

(四)なく―なくなむ

(五)所々より―により

(九)者ぞともぞおぼし出づる―ものぞと思しつる

うまつるべく侍るを、路し無くとも承りなむ。さても先つ頃、世中にあやしき事

を申しけるを、いかに思ふ給へるならむと聞召しけむことをなむ、此處にも彼處

にも、限なく思ふ給へなけきて、誰々もまかりありきもせで侍りつる。所々より、

かの三條に、とかく宣はする事なむありける。さる心も思ひ知れとて、かの宮消

息にて侍りし、事定まりて御覽せさせむとてなむ、まだ失はで侍る」とてこの

君して、宮の御文を奉り給ひて聞え給ふ、仲忠、かくも聞ゆまじけれど、昔の

志、うしなはず、今行くさき頼み聞ゆることもなほ侍れば、うたてある心も持た

る者ぞともぞ思し出づる」と聞え給へば見給ひて、大宮なども、いと恐ろしくも

ありけるかなと思す。大將、仲忠、御覽じてば賜はりなむ」と聞え給へば女御の君、

かく書きて出だし給ふ、

あて宮くる春を雲に知らせずなりにせばふちも絶えぬる松にやあらまし

大將、見給ひて、

〔語釋〕
 (一)正頼
 (二)東宮
 (三)あて宮へ
 (四)居處の近きをさふ
 (五)未考

〔考異〕
 (一)宮の御事は―見給ひつ宮の君の御事は
 (六)けり―ナシ

仲忠 巖のうへの種よりまつと聞きしかば縁もはるぞふかく知るべき
 など聞え給ふほどに、大殿おはし合ひて、内裏に宮参り給ふべきことを定め給ふ。
 十月十五日、女御もろともに参り給ふべしとて、あるべき事どもみな定め給ふ。か
 くてみな参り給はむとて、童下仕とよのへ、大人三十人、わらは八人、唐綾のあを
 色の五重がさね、繚のうへのはかま、下仕八人、檜皮の唐衣、うちぎども著たり。
 かくて出で給ふに、三條の新中納言殿より御文あり。
 實忠いともく、思ふやうなる御慶は、まづ自ら参りて聞えさせむとせしを、
 忌々しけなる様に思ふ給へつとみてなむ。「近うさふらはど」とか宣はせし
 を、陰踏むばかりにて久しうなりぬれど、いとおほつかなくて参り給ふべか
 なれば、あさづまの心地してなむ。
 身をすてし山邊にもなほあるべきをいまもまどはす君にもあるかな
 宣はせむまよと思ふ給ふるこそ心ならぬ様にも。

と聞え給へり。見給ひて御返。

〔語釋〕
 (一)東宮の事
 (二)季明
 (四)實忠が
 (五)實正
 (七)そて君
 (八)今上へ
 (九)そて君を我が手許へ
 (一〇)我が娘の如きは

あて宮の御事は、あしきやうに言ひ騒ぐなりしかば、いと昔の人のものし
 給はぬをなむ、哀に心細く思ふ給へし。今も心ゆるびなく、恐ろしき世な
 れば、御宮仕などし給ひて、後見きこえ給はど、頼もしうなむ。民部卿殿に
 聞ゆる事ありしや。聞き給ひけむ。なほおほし立たば、よもうしろめたうは。
 と聞え給ふ。見給ひて民部卿殿の物し給ふに、實忠「かよる、何事にか侍る」と聞
 え給へば、實正「そよ。然る事ありけり。姫君の御事ぞや。睦まじき人奉らまほ
 しきを、事々しくはあらで、忍びて局に物し給ふやうにてまるらせ奉り給へ、
 と聞えよ」となむ、女御になり給ひし慶に、かしこに物する人のまうでたりけ
 るに宣ひける」中納言、實忠「苦しや。前々のやんごとなき人をだにも、あるもの
 ともし給はざるものを、これらは何の事にかあらむ。親の人並々にて勞るにこ
 そ、女は人とも見ゆめれ。かよる徒ら人の子をば何にせむ」民部卿、實正「それは

〔語釋〕
 (一)今上が
 (二)他の女御たちと申あしければ
 (三)あて宮が身を入れて世話したれば
 (四)季明の喪
 (五)入内の世話すべし
 (六)今の御妾たちの中に
 (七)祓澄
 (八)三の宮なるべし、彈正宮忠康
 (九)返事するなと娘に言ひつけ置けり
 (一〇)朱雀院
 (一一)誤あらんか、一本「その折は」又「その折は」

然しもあらず。かの女御の御心に入れ給ふと見給はゞ、いと哀にぞ思さむ。前々の人はあれど、みな中どもの悪しければ、女御も心解けず物し給ふなれば、それに隨ひて、上もものし給ふを、彼處に勞り給はゞ、いとよくぞあらむや。この御服はてて、四月ばかりに裳など著せ奉り給ひて、出だし奉り給へ。己らも、もろ共にこそ參らせ奉らめ、たゞの人の然りぬべきもなし。宰相中將こそは、昔より志有るなどあめれど、見給ふるに、物思ふ人にこそ。然あらぬわかき人々は、數多あれど、然せむやは「中納言、實忠」この日頃は、五の宮の御文とて度々見ゆれど、世の中の煩はしさに、「物な聞えそ」とてぞ侍る。民部卿、實正「それは然るあだ人にて、女ありと聞く所にては、然ぞ宣ふるなる。朱雀院の二の宮をも思ひかけ給ひて、入りなどし給ふなれと、男御子つどひて、夜晝遊をしつゝ、起き居給ふなれば、上も、それ聞召すとておはしますなれど、さりととも、帝の御前に參りなどし給ふなれば、その折には人こむ、とて兵をまうけてぞ待ち給ふな

〔語釋〕
 (一)正頼
 (二)用心せねば
 (三)忠康が女二を捨てたに於て
 (四)女二宮の警固の人数に於て
 (五)女二
 (六)正頼が番人とたのむ積の人の中にも
 (七)別々の處におきて比較すればよく思はるゝ女も
 (八)そて君はあて宮に別段劣るまじ
 (九)あて宮は
 (一〇)あて宮をさふ
 (一一)地爐歟、一本「ふる」

る。一日、左の大殿の宣ひしは、「後の宮の、よくもし給はずば、この御子して、名を立てさせて、恥を見せて、棄て給ひなばいかどせむ。子どもよりはじめて、いくらもあらむ人を申し加へて、この御子まかさせ奉り給へ」と宣ひしかど、たのみ給ふ人の中にも、然思ひたるも多かめれば、如何にあらむ。かく生憎心おはする宮なれば、よろしと聞き給はゞ、たゞ入りに入りおはしなむ。なほ然思はせ「實忠」いさや。所々にて思ほし合せむに、恥かしけなるものも、同じ所にて見くらべ給はゞ、土と玉との如こそあらめ。實正「いで、何か、この君ことに劣り給はじ」中納言、實忠「いみじきことをも宣ふかな。如何ならむ人とか思す。女一の宮こそ、おとり給はずと聞きしか。それも向ひ居たまへりしかば、氣劣りてこそ。世に類あるべき人にもあらずや」民部卿、實正「かたへは見なしなり。思ふ人は然ぞ見ゆるや」實忠「吾君は、あやしき御族にこそは」など宣ふ。

〔畫詞〕
 ことは三條の西のかた。民部卿、中納言、物まるる。御前に、ちろし

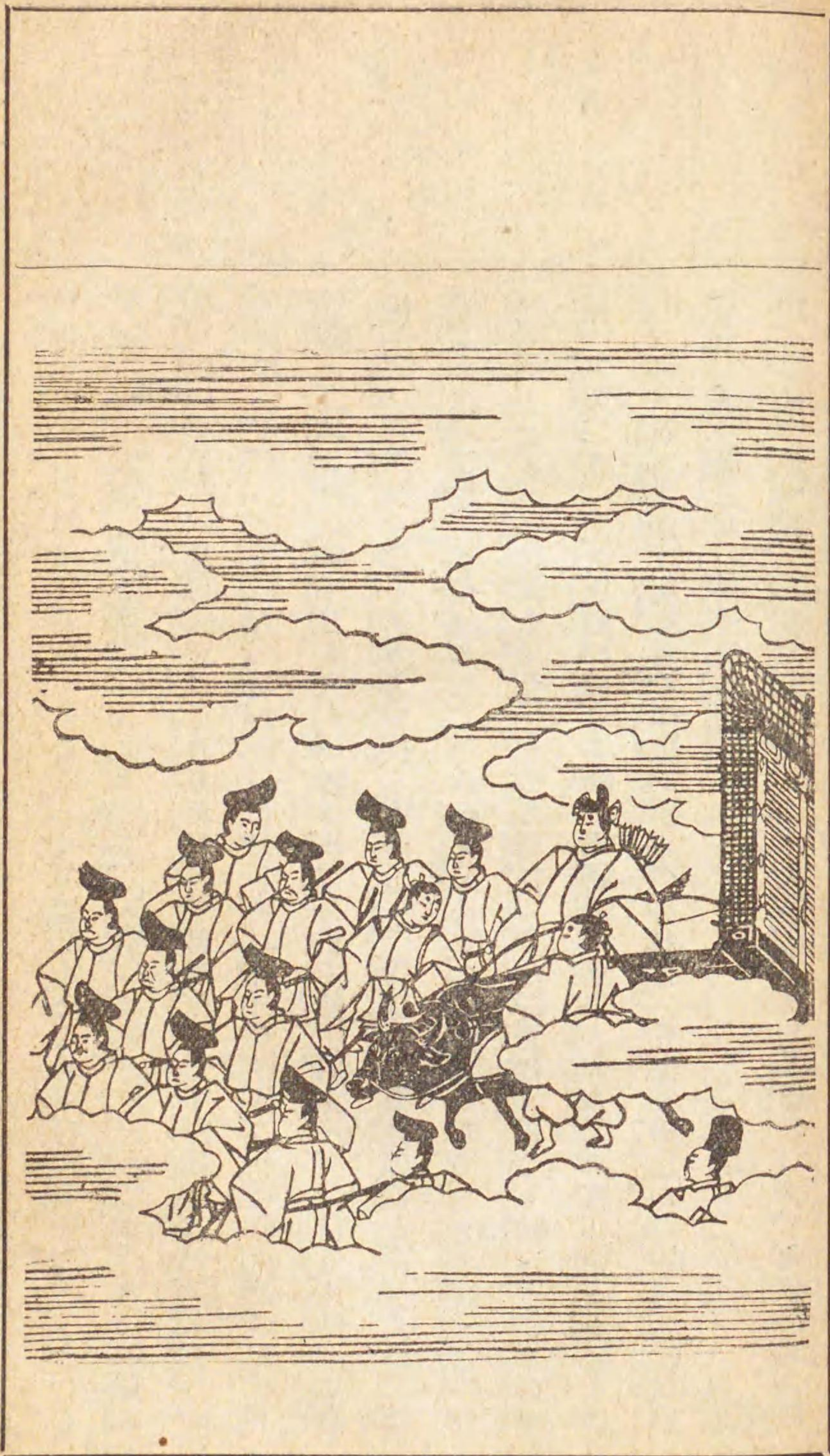
〔語釋〕
 (一)「すみ物」歟
 (二)「見給は」となるべし
 (四)内々は夫婦の中は元の如くにされるを知らずやの意
 (五)東宮
 (七)「宮の」衍文歟
 (八)誤あらんか

●東宮あて宮参内。行列仲頼の妻と其の母、見物の中にまじりて行列を観る。

〔考異〕
 (三)べけれどーべけれど
 (六)銀の箔ちりしたる白袴―白かさね白はかま

て、まがりなどして物調ず。割籠、する物あり。これは東のかた。御簾のうちに、北の方臥し給へり。姫君物まるる。おとな、童多かり。姫君の御乳母のいふ、「上の、うちはへ悩み給ふを、おとどの氣近う見給へば、如何なるぞとも聞えつべけれど、もて離れ給へればこそ」まさご君の乳母、「芦の根這ふらむとも知らずや」姫君、「あな聞きにく。何事ぞや」など宣ふ。

かくて東宮参り給ふ日になりぬ。御車、宮の御方に十、女御の御方に二十、絲毛六つ、擗榔毛二十、うなる下仕、車二つづつ、人給どもは、これかれ出だし給ふ。車の口付ども、装束どもとよのへ、容貌もえらびて、十人づつ付たり。宮の人給は、裾濃のはかま、冠したり。あるは銀の箔ちりしたる白袴、あるは薄色の下襲、裾濃のはかま、心々にせられたり。女御の御方の人給は、狩装束、車ごと心々なり。かくて、東宮の御車は、東の大路の前、大宮の大路に引き立てたり。宮の御車はあかすけにて、輦の大なるやうなり。黄なる御車牛かけたり。御車添は



〔語釋〕
(一) おほきちととの御族はなるべし、忠雅の
一門の人々

(四) 東宮

〔考異〕
(一) 線鞋靴—ふかやつ

(二) 黒牛—黒うて

嵯峨院の庖の人の子なるを、長ひとしく、容貌あるをえらびて、十二人、かいねりがさねの下襲(一)線鞋靴はきて、後には宮の藏人、所衆ぞ仕うまつる。女御の御車は、南の御門、三條の大路にひき立てたり。御車牛、黒牛かけたり。御車添、御方のさぶらひの人十二人、葡萄染のしたかさね著たり。後に廿人仕うまつる。上達部、左の大殿の御子ども三人、源中納言、良中將、右大辨、おほき大殿。御族は、後の宮聞召すことありとて仕うまつらさず。民部卿の御族は服なり。さあらぬ殿上人は、四位、五位無きなし。六位も目あきたるは無きなし。宮おはしませば、藏人ども、宮の御車にたてまつる所に、さながら仕うまつり給ふ。御車の後に、乳母二人、左大臣殿の君たちは、女御の御車に奉る。大宮、いと參らまほしう思せど、まかで給はむが煩はしかるべければ、とまり給ひぬ。一の人給は宮たちの御乳母三人、孫王の君。かくて出で給へば、みな人馬に乗りぬ。次第司二人、事行ひつと、女御の君の御

〔語釋〕
(四) 仲頼

〔考異〕
(一) 乗りたれど—乗りた

(二) うちませ立てたり—うちませ立てたり—うちませ立てたり

(三) ごとくなる御前に松明—ごとく御前まつた

車の次には、御櫛匣殿の人だまひさながら立つ。その次に、よろづの宿徳乗りたれど、女御の御方の人だまひの後にぞ立てける。宮たちの御乳母のいふやう、「同じ御腹に生れ給ひつる同じ宮に仕うまつれど、如何なる人の、一の車に乗らむ。我ら如何なれば、宮のをさめ、御廁人の後に立つらむ」と腹立つ。孫王の君、「かの宮をかしづき聞え給へばぞや」と言ふ。大宮の大路よりのほり給へば、おほくの左右の物見車、うちませ立てたり。夜靜に月の光晝のごとくなる御前に松明ともしたり。絲氣の車には御前六人、擯榔毛には四人、火ともせり。車の簾高くあけて、後口よりこほれ出でつと乗りたまへば、装束、容貌、あらはにめでたし。物見車、大將と中納言とを見て言ふやう、「これは、名だたりし涼、仲忠ぞな。めでたくもなり勝りたるかな」といふ。右大辨を見て、「これは藤英ぞかし。生きながら、人の身變るものなりけり。この世にも淨土はありけり」又ある女良中將を見て、「これは行政ぞな。いとみじく清らなりや。あはれ源少將法師あらまし

〔語釋〕
 (三)仲頼
 (四)あて宮
 (五)仲忠
 (六)仲頼
 (八)仲頼なればこそ

〔考異〕
 (一)はやーをや
 (二)はやーぞや
 (七)かの君は「は」ナシ
 (九)むれつるーむれくる

かば、如何ならまし。容貌心めでたかりしはや。手をかき、歌をよく讀みしはや」
 と車ごとに言ふ。少將の妻母、ひとつ車にて物見る。母、「わが聲の君をほろほし
 給ひてし人の、めでたくて物し給ふかな。斯かりける幸人を、思ひかけ給ひけ
 るぞ、おほけなきや」女、仲頼妻「さればこそ、死に入りて久しかんめりしか。山へ入
 るとてこそ生き出でたりしか。そのかみ侍従なりし人だに斯くなり給ふめれば、
 (五)かの君は、今は大臣にもなりなまし」母、「かの大將のやうに、いかで。宰相など
 (六)(七)には然もありなまし。されど、君なればこそ、かよる君たちの、うち羣れて、深
 き山邊を尋ねて、いみじう志をしてとぶらはれ給へ。その御徳にぞ、かよる面
 白き目をも見れ」とてみな泣く。女、
 仲頼妻「かたらひてむれつる鳥を見る時ぞのこれる袖も朽ちはてぬべき
 (九)母、袖のみやくちははつらむ君なくてみも見る効のみえずもあるかな

〔語釋〕
 (三)あて宮が帝の所へ
 〔考異〕
 (一)二人は「は」ナシ
 (二)御供人などと二十
 人と
 (四)御物語ー御物語に
 (五)給ひつゝー給ふかつ
 がつー給ひつゝかつ
 (六)間のー間を

〔今上、あて宮并に其腹
 の皇子たちを寵愛せら
 る。登華殿懐胎。〕

などいふほどに、御前は中の御門にいたりぬれば、後は宮まだ近し。
 かくて参り給うて、まづ東宮入り給ふ。御車に、乳母二人はさふらふ。今二人は、
 藏人御供人などと歩み入り給ひぬ。梅壺におり給ふべしと、輦の宣旨申して、
 女御入り給ふ。御輦にては、宮たち、いま宮の御乳母、孫王の君さふらふ。後に
 おとな六十人ばかり、わらは、下仕あゆみ、四位五位具したり。こと君たち、皆
 おはす。かくて藤壺におり給ひぬ。御おくりの人、男女まかで給ひぬ。
 畫詞 ことよは東宮まゐり給ふ所。
 かくてまう上らせ給ひて、月頃の御物語、おそく参らせ給へる事など、かたみに
 聞え給ひつゝ、まだ御殿籠らぬに、「丑二つ」と申すに、女御下り給ひなむとすれ
 (五)ば、今上しばし待ち給へ」とて、今上この頃の夜は、かう言ひてもまだ暗し。
 今上獨りねし夜はまちかねし時の間の疾くもこよひは思ほゆるかな
 明けがたかりしものかな」と宣へば、女御、

〔語釋〕
(三)未考

(四)あて宮腹第二皇子

(五)あて宮腹第四の皇子

(七)今上

(八)今上が

〔考異〕

(一)とくはうくも

(二)うたてくうたてう

(六)女御ナシ

あて宮夜々は知りけるものをこよひしもなほさへとくはなどか聞くらむ

上、今上うたてくも言ひなさるよかな。さりとも「うちなす鐘の」など宣ふほど

にあかくなれば急ぎ下り給ひぬ。すなはち御文あり。

今上只今は、

歎きつよふる夜もあれど朝ほらけおきつる霜のわびしかりつる

女御、

あて宮明けぬれば雲のうへにもとまらずておきゆく霜の寒きをぞ知る

と聞え給ふ。

二の宮、赤らかなる綾かいねりのひとへがさね、織物の直衣、襷がけの御はかま、

今宮、こもんの白きあやの御衣一かさね奉りて、襷かけて、いとをかしく肥

えて、這ひありき給ふ。女御、上わたらせ給へば、みな出だしす奉りて、乳母

たちは、御几帳の後に並み居て、いづれの宮をかまづ抱き給ふと、挑みかはして

見るに、二の宮あそび給ふをかき抱き給ひて、御膝にするて、かき撫でつよ見給ふ。

御髪はやうしかけたる様にめでたし。肩うち過ぎたり。御容貌いとめでたし。う

へ、今上坊をこそ、まづ見むと思へ。呼びにやり給へ」と聞え給へば、あて宮「い

ま、今日明日過して」と宣ふ。今宮の御乳母、いとねたしと思ふ。二の宮のは、

乳母「されば我こそ」とて誇る。今宮、なに心もなくたゞ笑ひに笑ひて、二の宮に

這ひかより給へば上、今上「これも類の人ぞ。これも憎くはあらねど、いたく我に

物を思はせつるや」とて宣ふ。

今上二葉にもまだ見えざりし玉かづら這ふまでまつぞ久しかりける

女御、

あて宮まつだにも苦しからずば玉かづら立つをぞ君に見せむと思ひし

うへ、今上「おそく参り給ひしかば、これをいと憎く、見じと思ひつれど、親の罪

をも負ふまじきものかな」とてかき抱き給ふ。おはしまし暮らして、今上「夜うさ

〔語釋〕
(一)「えう(壁)しかけたる」なるべし

(六)あて宮の参内が此の子故に遅なほりし故

〔考異〕
(二)やり給へーやりて給へ

(三)我ナシ

(四)これも類の人ぞーこれも類の人ながらーこれはたゞの人ぞなど

(五)とて「て」ナシ

(七)罪をも負ふまじきー罪も思ふまじき

(八)かきナシ

(九)夜うさりーうナシ

〔語釋〕
 (一)左衛門督の君に「歎、忠澄なり」
 (二)東宮を
 (三)東宮を
 (四)東宮を
 (五)あて宮をいふ
 (六)あて宮が今上へ
 (七)あて宮が今上へ
 (八)あて宮が他の女御たちと同列にてどの女御たちにも平等に満足と與へて然るべき時に我儘にあて宮をのみ寵せし故昔は不平も言はれしが

〔考異〕
 (一)坊一坊を
 (二)これは一見れば
 (三)いかゞいかゞは
 (四)もどくまじうもどかるまじく
 (五)かくかくて
 (六)候ふ一ナシ

りまう上り給へ」とておはしましぬ。
 まう上りて下り給へば、今上坊呼びてすゑ給へれ。こゝに物せむ」と宣ふ。下り給ひて、左衛門の君に、「わたし奉り給へ」と宣へば、大殿、上人などしてわたり給ひぬ。知らぬ顔にてわたり給へば、いとくおとなしう、紐ついでささふらひ給ふ。御髪は居長にて、いと氣高う清らなり。今上けにこれは、聞きつるやうに、たどの人には見えざりけり。親にこそいとよう似たりけれ。あいなう心さへ似るかな」と宣へば、女御、あて宮「いかゞ然は侍らむ」上、今上人のえもどくまじう、心強くこそは」と宣はす。
 (一) かく、來つよつねに宮たちを見給ふ。夜ごとに參らせ給ひ、晝も日々わたりせ給へば、女御、あて宮身一つ候ふだに、ゆよく聞きにくき事さふらふものを、かく若き宮たちひきつれて候ふこと、いかにうたてある事侍らむ」うへ、今上は然もあらじ。人々の心をやりても、いとよくありぬべかりけるものを、思の儘に

〔語釋〕
 (一)女御たちを
 (二)昭陽殿
 (三)登華殿が

〔考異〕
 (一)巡にて一女御巡にて一女御
 (二)まう……ことなし
 (三)まう上り給へと申し給ふことなし
 (四)はらみーにんじ
 (五)帝もーもーナシ

ありてこそ、院にも騒がれ奉りしか」など宣ひて巡にてまうのほらせ給へば、いと花やかになまめかしくもてなし給ひて、世中まつりごとも、いとかしこうせさせ給ふ。御學問に心を入れて、御遊も常にせさせ給ひて、いとおもしろうし給ふ。梨壺は、なほもの宣ひなす。他人は、まうのほり給へど、殊なることなし。人の御宿直の夜も、藤壺の御ためには、然るやうにもあらずもてなし給ふ。四の宮は、藤壺參り給ふべしとてまかで給ふに、さかなものはまだ參り給はず。式部卿の宮のは、女御にならずとて、父宮おほし嘆くと聞召して、度々召しければ、登華殿「如何はせむ」とて參り給へば、輦ゆるされ給ひぬ。時々まうのほり給ひ、晝も時々わたらせ給ふほどに、十月ばかりよりはらみ給ひぬ。父宮、すこし嬉しと思す。
 (一) かくて世の中定まりけり。太政大臣は、さるやんごとなき一の人におはす。左大臣のおとど、世の中をまつりごち、帝も政事をあづけ給へる様にて、いさよかの

〔語釋〕
 (一)正頼に御相談なくて
 (二)實忠
 (三)實忠
 (四)實忠
 (五)實忠
 (六)實忠
 (七)實忠
 (八)實忠

〔考異〕
 (一)あるべき―なるべき
 (二)定め…ならぬは―
 御爲にやんごとなき事に
 (三)やく―やごと

〔語釋〕
 (一)あて宮の侍女兵衛が
 わが親の身寄なればとて

〔考異〕
 (一)侍るなるにやは―侍
 るにや
 (二)眞菅さけしき人に侍
 りしかど―眞菅はさかし
 き人に侍りしかば
 (三)かの男どもの―あの
 男どもが
 (四)四の：大后宮―嵯峨
 院の四の宮男宮うみ給へ
 (五)いと―ナシ

事も、宣はせではし給はず、奏し給ふことも否び給はず。おとども、公の謗とあ
 るべきことは定め給はず、やんごとなき事ならぬは奏し給はず。右の大臣をば、
 心憎き恥かしきものの心ある人にし給ふ。右大將は、公私にも、かしこきもの
 に思はれ給へり。然あらぬ人も、調ひたり。新中納言、よろづ人に惜まれ、上も、
 これ宮仕せさせてしがなと思す。

かくて年還りぬ。朔の日、朝拜きこしめす。二日、朱雀院、嵯峨院に参り給ふ。
 三日朱雀院に行幸あり。大將、思ひあるべければ、かうぶり賜はせず、やくなき
 ものどもに賜ふ。これはた、かうぶり賜はりぬ。次々の節會どもも、みな聞召す
 内宴には、平中納言殿の御息所なり。容貌も清けなり、ある中に下臈にてまかな
 ひ給ふ。

司召にもなりぬ。女御奏し給ふ、あて宮「宮内卿 忠保 朝臣は、よき官はえ賜はるま
 じき人にや侍らむ」うへ、今上然も聞えず。よろしき人なめるを、嵯峨院の御た

めに、過したること有りて沈むとこそ聞きしか「女御、あて宮」さ侍らば、いと哀に
 て侍るなるを、修理頭のあきて侍るなるにやはなさせ給はぬ」うへ、今上「など、
 勞るべき様やはある」女御、あて宮「さも侍らねど、兵衛が親がたにて、常に申さす
 れば」など聞え給へば、なされぬ。世の中に「いみじき官得つるものかな」と驚
 きさわぐ。左のおとど、よき折に奏し給ふ、正頼「このはなち遣はしてし、滋野眞菅
 さけしき人に侍りしかど、その罪を、後まではかうぶり侍るまじ。かく御世のは
 じめなどには、天下の罪あるものを免させ給ふなる。かの男どもの、哀にて侍る
 なる、召につかはさむは如何侍らむ」うへ、今上「ともかうも知らざりし事なり。
 これかれよろしう定められて、あるべからむ様に物せられよ」と宣へば、喜びて、
 みな召に遣はす。

かよる程に四の宮男御子生み給ひぬ。大后宮、斯かりけるものを、今しばし、坊
 定まらざらましかば、と思す。御産屋いとなく、所々より御産養例の作法な

り。三條院よりもいかめしう仕うまつり給ふ。

畫詞

こよは嵯峨院の四の宮の御方。

かくて修理頭は、覺えぬ喜して、驚きよろこぶこと限なければ、出でてありかむとするに、年老い、牛車、装束もなし。直衣装束は、女著せられたれど、上のきぬは無し。女、紀念にせむとて少將の装束一くだり持たりける。取う出たれど、うへのきぬは元より無し。とかうたばかり程に、三日も過ぎぬ。辛うじて、所々に慶申すとて言ふ、忠保「こよらの年頃、公に捨てられ奉りて、諸資財を賣りて、世にかなしく侘しき目を見て、わづかに侍る女の童の夫に侍りし山伏の、昔の衣をぬぎ松の葉を包みて、深き山よりとぶらひ侍る物をわかつて養ひ侍るにかよりて、一人の従者も侍らず衣裳も侍らで籠り侍るを、明王の出でおはしまして、斯くまかり浮びたる慶を、すなはち申さむと思ひ侍りつれど、とかくの事ども出で侍りつる程に、今までになり侍りにけり」と申すを、他人はなほ聞き給ふ。左のお

(語釋)
(六)右のちとゞの誤

(考異)

- (一)なければ「なければ」
- (二)物をわかつて「をもちて」
- (三)侍るを「侍るに」
- (四)申さむ「奏せむ」
- (五)とかくの事ども出で侍りつる程に「かくの如くはてし侍りつる程に」

(語釋)
(一)修理頭を望む者他に數多あり

- (二)師澄
- (五)仲頼の妻
- (二一)あて宮へ
- (二二)近澄などに取次を頼みて

- (考異)
- (三)主「まし」
- (四)仲頼の「の」ナシ
- (六)ものに「ものにて」
- (七)亡ぼして「て」ナシ
- (八)天上の天女をも持てならさすめれば「天下の仙人も御目ならさめれば」
- (九)女御は「は」ナシ
- (一〇)思して「て」ナシ

とど、兼雅「けに、いと怪しう沈み給ひつるを、如何に思はれつらむ。此御慶は、兼雅らにはえ宣はじ。東宮の女御になむ、返すぐ申さるべき。かの女御こそ、度々申されけれ。他人あまたあり、かの御同胞の左大辨、兼けて仕うまつらむ」と切に申されけれど、主を申しなされけるとぞ聞きしか「修理頭、おどろきて、忠保「何の故にか、女御然奏せしめ給ひけむ。私事には侍れど、仲頼の朝臣の、山にまかり籠りしも、かの女御によりて」とて、童への侘び申すことを、聞召すところや侍らむ、と畏まり侍る。忠保は、「男の好色といふものは、怪しきものに侍れば、おほけなき心の侍りて、身をも亡ぼして侍るにこそあれ。女御知り給ふべき事にもあらず」と思なる心にも制し侍るを、身の便なきまゝに申すなり「おとど、兼雅「男の好色は然ぞあるや。女あるときけば、天上の天女をも持てならさすめればにこそ。かの女御は有識にて、さやうの事を思して勞られたるにこそはあらめ。新中納言御兄弟を越してこそは物せらるなりしか。彼處に、藏人の少將などして、

申させ給へ」と宣ひつ。

〔畫詞〕 ことは右大臣殿の御方。修理頭年六十ばかりなり。宮、おとどに梨壺の御文見せ奉り給ふ。女三「この頃は、なまうで給ひそ。藤壺、隔てもこそ思せ」兼雅「今衣更の程にもせむ」とて、生れ給ひし宮の、脇息をおさへて立ち給へるを、抱きてありき給ふ。

かくてかんのおとどの御方に、大將まうで給ひて、仲忠「なほ申すべき事の侍るを、疾くわたり給ひなむや」北の方、俊隆女「此の晝ぞまうで侍りぬる。夜はこよにもとまり給はず。かの宮見奉りにぞ、かく晝間には」大將、仲忠「この東にはものし給ふや」北の方、俊隆女「わざとにはあらで、夕暮、夜の間にぞこうじ隠せらるなるや」大將、仲忠「然思すべき人にこそは。年頃いかに思ひつらむ。かの按察使の君なども、いと目やすき人にぞありける。かよる人どもを見捨てて、いかで物し給ふらむとこそ。屢、まるり來べきを、かしこに疑はしき程になり給ひぬるを、人少に

〔語釋〕
(一)兼雅が
(三)梨壺腹の皇子
(四)中の君等をおきてある處

仲忠、母を訪ふ。女二宮の噂。

(五)「こうじかくれ」は小路隱、歟、「本」こしがくれ「又」かうしかぐれ

(六)仲頼の妹

(七)女一宮

〔考異〕
(一)年—ナシ

〔語釋〕
(一)仁壽殿
(二)仁壽殿腹女二宮

(三)五宮以外の人も「さちぬも人知れず」なるべし

(四)とても奪取ることは叶はぬものと

(五)「大事」は「御車」の誤なるべし

て、心細けにおほしたればなむ、まかりありきもえせぬ」北の方、俊隆女「けにさぞなり給ひぬらむ。参らむとするを、按察使など、憎しと思へば、恥かしくてこそ。院の上は、なか今まではまかで給はざらむ」仲忠「いさや、かの二の宮を、五の御子の、世を世ともし給はず、帝后も物聞え給はぬ人の、いかで取らむとのみし給ひて、」まかで給はざともかくもせむ」とのみあれば、里にもえ。然らぬ人知れず盗まむ、入らむ」とのみあなれば、それに怖ぢて、えまかで給はぬぞや。藤壺の、さばかりのよしられ給ひしかど、情づき、人の御返事申しつぎ、えすまじきは、さてこそあらまほしくてえ給ふなりしか。これは物驗がしくぞあるや。「さては得ぬものと懲りにたるにこそはあらめ。然てのみあらむやは」とて明日ぞ、これかれ大事して迎へ奉り給へるなる」と聞え給ふ程におとどおはしぬれば、御物語など聞え給ふ。

〔畫詞〕 ことは右大臣殿。

正頼、女二宮女四宮を自邸に迎ふ。祐澄近澄等女二宮を途中に奪はんとして成らず。

〔語釋〕

(一)女二宮の迎に正頼等

(二)「思澄ら参りて」なるべし

(三)勿體ぶりに居る間に

(四)實は祐澄がかねり

(五)女二宮に懸想し居る也

(六)近澄

(七)實正、涼、藤英

〔考異〕

(一)然れど一さば

(二)大事は「大事の

(三)をば」ば」ナシ

(四)胡籙を負ひたる男ども

(五)胡籙を負ひたるものをのこら

(六)胡籙おひたるもの

(七)然れど一さば

(八)大事は「大事の

(九)をば」ば」ナシ

〔考異〕

(一)然れど一さば

(二)大事は「大事の

(三)をば」ば」ナシ

かくて、御迎に、おとど、君たち出で給ふ。左衛門督の君、忠澄「何か。まるり給はずとも、忠澄は参りて、まかでさせ奉りてむ」おとど、正頼「然れど、一所をだに、我らかしづき奉るべし。況や、七所の孫の宮たち迎へ奉りたらむに、何の事かあらむ。宿徳つくらむ間に、事惹き出でては、え効もあらじ。我主たちの御心もしらず、わかき男女、同胞と具し給ふ、やすく思ふべきにもあらざりけり」と宣へば宰相中将うち笑ひて、祐澄「聞召し懲りたる事やあらむ。さやうに好いたる人も、今は侍らぬものを」とつれなく言ふ。下には、いかでこの折に盗まむ、と思ひたばかる。藏人の少將は、物も言はで、下りて入り給ふらむほどに、入り臥しなむ。まさに殺されむやは。又、さらば然て死なむ、と思ひおはす。かくてみな出で立ち給ふ。おとど、正頼「私の大事は、この事にまさるはあらじ。此の事かく同じ心にし給はざらむをば怨み申さむ」民部卿、源中納言、右大辨、まうで給ふ。上達部は御馬にて御前、司、胡籙を負ひたる男どもあまたして、衛門督、

〔語釋〕

(一)女二宮の迎に正頼等

(二)「思澄ら参りて」なるべし

(三)勿體ぶりに居る間に

(四)實は祐澄がかねり

(五)女二宮に懸想し居る也

(六)近澄

(七)實正、涼、藤英

〔考異〕

(一)然れど一さば

(二)大事は「大事の

(三)をば」ば」ナシ

(四)胡籙を負ひたる男ども

(五)胡籙を負ひたるものをのこら

(六)胡籙おひたるもの

(七)然れど一さば

(八)大事は「大事の

(九)をば」ば」ナシ

〔考異〕

(一)然れど一さば

(二)大事は「大事の

(三)をば」ば」ナシ

宰相などは御馬にてまうで給ふ。

朱雀院の御門には、後の宮おはすれば陣居たり。御車も寄せさせず。御門にひき立てて参り給へり。上おはします。女御、仁壽「まかで侍りて、御産平かにもものし給はど、いと疾く参り侍りなむ」うへ、朱雀「かく大事とて物せらるれば、頼もしきものを。されど、今日やんごとなき迎人ども、頼もしくあめれば。男御子たちは、な率て物し給ひそ。いと騒々しからむ」と宣ふ。上おもほす御心ありて制し宣はせて、御車近う寄せさせ給ふ。左のおとど、右大將、左衛門督、近くさふらひ給ふ。五の宮いとしどけなき氣色にて、上立ち給へる御前より、二の宮の御許へ、たど入りに入り給ふ。今上「何方にぞ。あな騒がし。かのおほいまうち君は」大將の朝臣の見給ひて、仲思「いと怪しからずや」とて引き留め給へば、涙をながして、たど泣きに泣き給ふ。今上など御子のあやまりて見ゆる。思ふ心あらば、我にこそ言はめ」と宣へば、涙を拭ひてさふらひ給ふほどに、皆ひき連れて

〔語釋〕
(二)かひなくしき出立ちしたる者、女二宮を奪はんとせらる也

(六)仲忠の心、祐澄近澄等はたくめる所ありと見ゆ

〔考異〕

(一)御前に―御前の

(三)ひたぶる装束―ひたぶるの装束

(四)寄り来べくも―寄るべくも

(五)なきに―なきを

(七)やごとなく―やんとなく

(八)見給ひて―見て

出で給ひぬ。御車の左右には、おとど、大將の御車をひき並べて、御前に君だちうち圍みておはしませば、こよかしこに、ひたぶる装束したる者ども、うち群れつよあれど、寄り来べくもあらねば隠れぬ。

大將、宰相の中將、藏人の少將のなきに、これはみなたばかりるゝ様あらむ、此處をば離れぬ、彼等ぞ煩はしき、と思ほして、御車をひき別れて走り先だちて、宮

におりて、入りて見給へば、宰相の中將、かよる業の爲に片時に千里行く馬立て飼ひ給ひけるに、鞍おきて、やごとなく睦まじう仕うまつり給ふ四人、狩衣に草

鞋はきて隠れ立ちたり。をかしと見給ひて、上へのほりて見給へば、御車寄する程にあたりて、立てり。見ぬやうにして入りて、紙燭をさして、御帳の内その邊

をめぐりて見給へば、藏人の少將、直衣すがたにて、壁代と御障子との間に立てり。いとをかしと見給ひて、待ち奉り給ふに、おはし著きぬ。

御車寄せて、御几帳さして、仲忠「はや下りさせ給へ」と聞え給へばおとど、左衛



〔語釋〕
(一)我は恥かしくもなけれど

(二)仁壽殿が

〔考異〕
(一)こそあらめ—こそは
あらめ

〔五宮、彈正宮に托して
文を女二宮に贈る。〕

門督と立ち給へば、女御の君、仁壽あな見苦しや。こよには恥ぢ奉らず。物恥し給ふ人こよにものし給ふめり」大將、仲忠「宮たちもおはしまさぬを、とてさふらふなり。仲忠をばな疎ませ給ひそ。火を暗うなさむ」とて御松明も暗うなさせ給へば、さる様こそあらめとて、まづ下り給ひて、宮たちおろし奉り給ふ。おとど、左衛門督、御几帳さして入り給へば、大將、後に立ち入り給ひて、やがて御座所へも入れ奉り給はず、一の宮の御方におはしまさせて、御帳の内に入れ奉りつ。宰相の中將、祐澄「こは、大將の今日盜人の氣色を見てするにこそあらめ。宮たちもおはせて、いとようたばかりつべかりつるものを」とて齒咬をして出でぬ。少將もすべり出でて去ぬ。つとめては、つれなくて皆出で來たり。大將、見合せて、いとをかしと思ひたれど、いとまめやかにうち語り給へば、氣色いと悪くて、宰相の中將、居たまへり。
かくて五の宮、彈正宮の膝を枕にして、夜一夜、泣くく物語して、五宮「まろを

〔語釋〕
(一)女二宮
(二)彈正宮が
(三)君の御文の中に封入して女二宮に上げて下され
(四)人と宮たちにも「歎
(五)あて宮が嫌でもなかりしに何を憚りて手を出さざりしぞ
(六)「ありしぞ」なるべし
(七)女二宮
(八)女二宮を
(九)實忠の女をて君
(一〇)妻にしてよき器量と聞く
〔考異〕
(一)この宮—二の宮
(二)宮に—一の宮
(三)をば—をも
(四)にも—にぞ
(五)四聞きしは—聞きしが

ば、如何にせよとて、この宮をばまかださせ奉り給へるぞ。かよる心ありとて、宮も月頃は見給はず、上もよからず思したれど、それも思はず。宮に、我を子にして助け給へ」など宣ひあかして、つとめて御文かきて、五宮「これ、御文の中に奉り給へ。まろをば、よも憎しと思はじ。皆人に憎まれぬ人を、宮たちにも思しつらむ」と宣へば彈正宮、忠康「こよにこそ、人に憎まれて獨りのみ侍れ」五の宮、「あな痴や。同じ心なりけむ人を、何につよみてたどにはあらじぞ。わりなくとも、物をだに言ひそめつれば、その人をこそ我いかでと思ひたれ。何れの男か、人を思ひかけて、それに憂くて一人はある。上の御心を思はずば、宮をも今までかく思はましやは。昨夜は、萬のこと覺えざりしかど、とらへて参り給ひしかばこそは、え見合せ奉らずなりにしか」彈正宮、忠康「中納言の女のもとに、御文遣はすと聞きしは、それこそ人も見つべう聞ゆれ」五の宮、「よしと人の言ひしかば、文やりしかども、返事もせず」兄宮、忠康「なほそれを宣へかといふな

(語釋)
 (一)我も
 (二)女二宮を手に入れんと
 (三)女二宮を我に譲り給へ
 (四)「など」となるべし
 (五)五宮が頼む故差上る也と五宮の文を封入したることわりをいふ也
 (六)女二宮が

(考異)
 (三)思ひしを—思ひしかど—思ひしかども
 (四)この—二の
 (七)にや—にやは
 (一〇)まよひて—まどひて

り。此處にも斯くてのみやは侍らむ、いかで見むと思ひしを、然宣ふと聞きしかば、五の宮、「この御子を賜べ」忠康「それは譲り聞えむ」などて、五宮「この文を疾くく」と宣へば、二の宮の御もとに御文かき給ふ。

忠康夜の間いかど。昨夜御送もえせずなりにしをなむ。平かにや。覺束なくなむ。

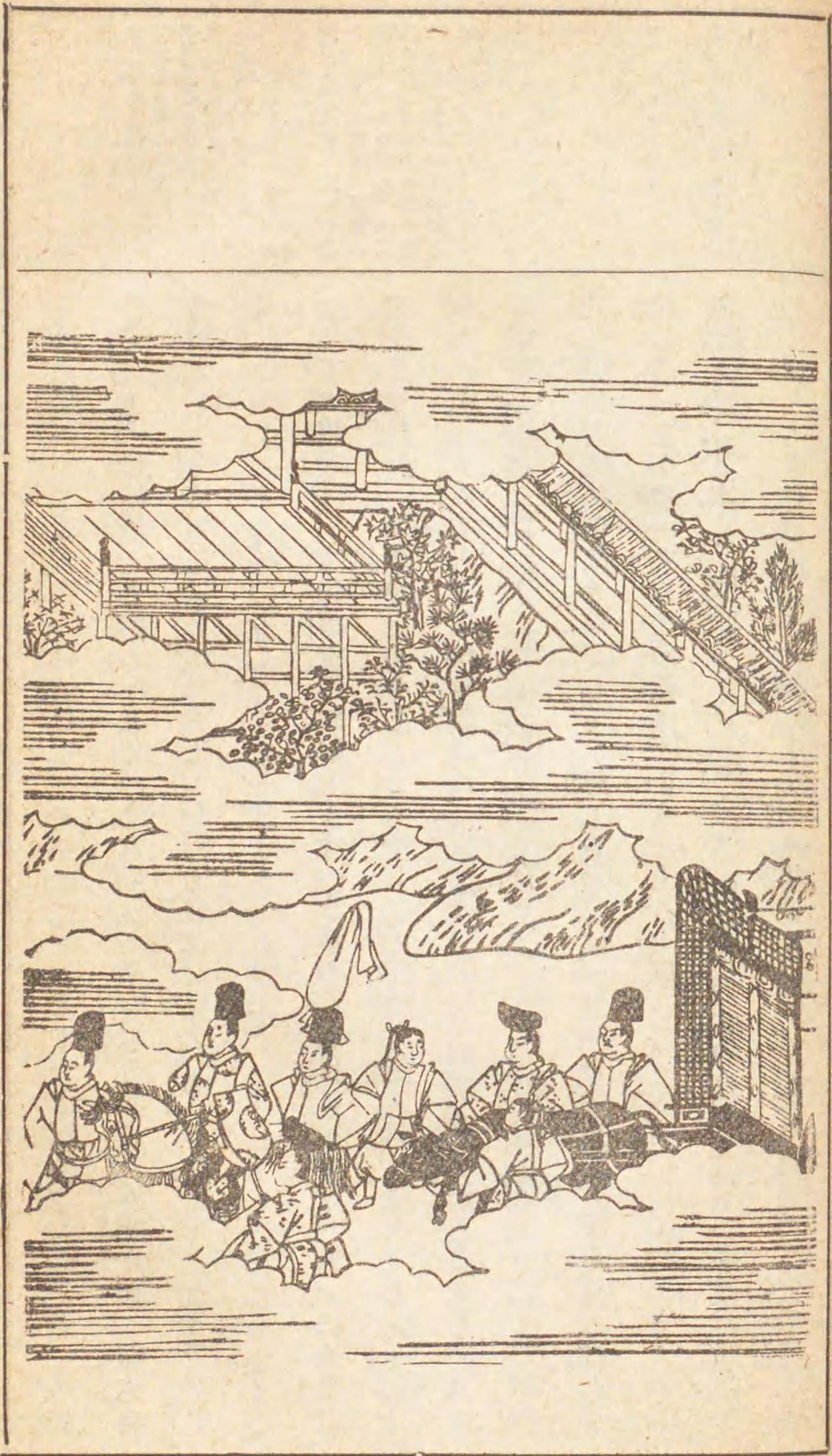
とて、

忠康これは、いと哀に宣へば、いとほしさに奉るなり。

とかき給へり。見給へば五の御子の御文には、

五宮よべは御供にと思ひしを、あさましく、上の許させ給はずなりにしかば、中空になむ。

かへり行く鴈のさとへと思ひしを雲にまよひてひとり音ぞなく今そこに参りこむ。別いても近き衛どもこそいと恐ろしけれ。



〔語釋〕
 (一) 仲忠
 (二) 女一宮の安産
 (三) 忠こそ法師
 (四) 大殿の「衍文歟、一本「大殿に」

〔考異〕
 (一) 君には一君に
 (二) 女二宮を
 (三) 御氣がかりて
 (四) 女一宮をいふ
 (五) 后宮の機嫌を損ねまじとて
 (六) 女一宮は女二宮が朱雀院を下りし時の騒ぎを聞き居る故

〔考異〕
 (一) 君には一君に
 (二) 女二宮を
 (三) 御氣がかりて
 (四) 女一宮をいふ
 (五) 后宮の機嫌を損ねまじとて
 (六) 女一宮は女二宮が朱雀院を下りし時の騒ぎを聞き居る故

と聞え給へり。二の宮、見給ひて、女二「あなうたてや」と宣ふ。女御の君、見給ひて、仁壽「けに然もし給ひてまし。あな煩はしや」など宣ふ。宰相中將、藏人の少將など、今は氣色にも出ださで、女御の君には見え奉り給はで、まうで語りひ給ひつと、よろづの事志ふかう仕うまつり給ふ。

かくて大將殿は、宮の平かにおはしますべき事を、神佛に申させ、所々に修法などさせ給ひ、御産屋をありしよりも清らにして待ち給ふに、十月といふ上の十日過ぎぬ。人々心もとながり給ふに、中の十日も過ぐれば、萬のかしこしといはる僧都、僧正、申し集めて、不斷の御修法七八壇させ給ふ。眞言院の律師して、孔雀經の御修行はせなどして、思しさわぐに、廿三日の晝つ方より悩みはじめ給ひて、その夜一夜なやみ給ふ。いとほしがり騒ぎて、大宮、かんのおとどわたり給ひて、明る日一日悩みくらし給へば、民部卿の北の方、大殿の、子産み給ひていくばくもなければ、あえ物にとて聞え給ひければ、わたり給ひぬ。宮の内より

〔語釋〕
 (一) 女二宮を
 (二) 御氣がかりて
 (三) 女一宮をいふ
 (四) 后宮の機嫌を損ねまじとて
 (五) 女一宮は女二宮が朱雀院を下りし時の騒ぎを聞き居る故

はじめ、左右の大殿、朱雀院よりも修經の使、乗り連れて、行きちがひつと、初瀬、壺坂、よろづの所々にまうで、左右のおとど、御子たちも皆おはしましぬ。

よろづの人、皆簀子に居並み給へり。

かよる折に、人々騒ぎてしづ心あらじと思ひて、例の君たちは、乳母を語りひて、萬のたから物を取らせて、「日だに暮れば盗ませよ。入れよ」とて暮るよを待ち給ふ。朱雀院には、帝やすくもおはします出で入り思ほし歎きて、おはしまさむとすれば、後の宮腹立ちのよしり給ひて、いみじき事をし給ひて、后宮「この盗人死ななむ」と手を打ちて宣へば、御心をやぶらじ、とてえおはしませぬ。

五の宮、「彼處の人々さわぎたらむ。この折に盗み出でむ」とて日の暮るよをまち給ふをも知らず、女御の君よりはじめて、宮にかより奉り給ひて心まどひ給ふに、二の宮は、何心なくて西の方に人少にておはす。一の宮、まかで給ひし夜のこと

をきと給ひにしかば、さるいみじき御心にも、女二二の宮に「おはして我を見給

〔語釋〕
〔四〕女一宮が仲忠に止められて朱雀院へ行かざりしを

〔考異〕
〔一〕恥ぢ聞え給ひて―こえて

〔二〕給ひて―給ひつ

〔三〕持ち給へる―も給へる

へよ」と聞えよ」と宣へば、然聞ゆ。宮あまたの御方々を恥ぢ聞え給ひて、まどひて泣くく入り給へり。女二此方寄り給へ。わが許なしりぞき給ひそ」とてすゑ奉り給へるに、心知りたる人々は、いみじく泣く。その夜、いとおそろしく病みあかし給ひて、その日の晝つかたより、をさく物も宣はず、たどなへになへ臥し給ひぬ。女御の君聲も惜み給はず、ふしまろび泣き給ふ。大宮、「あなかまや。かく宣へば、いと湯水も参らずまどひ給へば、我も死なむと泣きこがれ給ふめり。あまた持ち給へる族にだに、斯く宣はするを、まして唯一人持ち給へる父母、如何聞き給ふらむ。誰もかゝる目をこそは見しかど、今まではあらずやは」と聞え給へば、仁壽數多おはすれど、この宮をば、小くより、上の限なくかなしきものにし給ひて、「寶持たる心地こそすれ」と宣ひつゝ、「年頃見ぬこと」とおもほし嘆きて、迎へ奉り給ひしにも、参り給はざりしを、いとくち惜しと思ほしたりしものを、今一度見せ奉らずなりぬるにやあらむと思へば、いみじう悲

〔語釋〕
〔二〕朱雀が

〔考異〕
〔一〕こそは己を人とも―こそ己をも人にも

〔三〕聞きつるは―はしナシ

〔四〕侍ると―侍るを

しうなむ。此の宮により奉りてこそは己を人とも思したれ。片時も、見奉らでは如何はあらむ」と泣きまどひ給ふ。朱雀院より御使、「只今も、いみじう聞きつるは、如何なる事にかあらむ。定かに宣へ。いとくち惜しく、年頃いとおほつかなく思ひつるを、斯くいふかひなかなる事。只今ものせむとするを、男ども一人もなく、皆そこに物しにければなむ。心のうちに、己にあひ見むと念じ給へ。ここにも限りなくなむ願し侍る」と聞え給へ」とあり。大宮、見給ひて、大宮「斯くなむ」と申し給へば、女二ねたく、召しよ折参りなむとせしものを」と息の下に宣ふ。大宮、御返、大宮「畏まりて承りぬ。おほせごと賜へる人は、この晝つかたより、物も宣はず。いと頼もしけなくなむ。かくても、平かにあるものとは思ふ給へながら、心細くなむ。かくなむと物し侍りつれば、参らずなりにける事」となむ聞え給ふ。

とて奉り給ふ。

〔語釋〕
〔六〕女にはまたも歎妻は再び得べし親は再び得べからずの意なるべし

〔七〕犬宮

〔八〕俊隆女

〔考異〕
〔一〕衣も脱ぎあへ―衣は脱ぎもあへ

〔二〕かくも―もナシ

〔三〕弱くは―はナシ

〔四〕こそは―はナシ

〔五〕集まり―集まりて

〔九〕昔―昔は

大將殿、衣も脱ぎあへ給はず、直衣などのうへに、水を浴みつよ、まどひ給へば、人々脱ぎかへさせつ。庭に出でて、大願を立てて申し給ふ、仲忠「この人え免れ給ふまじくば、おのれを殺し給へ。片時おくらし給ふな」と伏しまろび泣く。篋子に、上達部、御子たちおはす。ありとある人は、立ち竝みてぬかづく。朱雀院の御使は降る雨の脚のごと、参りては立ち竝みてあり。萬のところくの御使あり。左右のおとど、下りておはして、「などが、かくも見え給はぬものを、心弱くは見え給ふ。よろづの事、心をしづめてこそは」とて集まりのほりて、父おとど、兼雅女にもまたも逢ひぬるものにこそあれ。親こそ、え逢はさんなれ。よしや、兼雅をば然も思ふらむ。かたのやうなる女子もあり、女親をば如何にせよと思ふぞ。昔忘れにたるか」と宣へば、仲忠「女親にはた、あるに随ひて仕うまつり侍りにき。殿にまだえ仕うまつらぬ。仲忠が代には犬を顧みさせ給へ。女子なれど、たどには

〔語釋〕
〔二〕宮あこ君誕生の時

〔三〕妻の

〔五〕私があて宮を許さぬとて君に怒られたり

〔六〕産婦の

〔考異〕

〔一〕あくれじと―あくれじとすと

〔四〕うちナシ

あらじと見給へるものなり。いとよく仕うまつりなむ。此の君徒らになり給はば、やがて淵河にも落ちいりて死に侍りなむ。更におくれじ」と聲も惜まず泣けば、かんのおとど、俊隆女「目もこそ二つあれ。一所を、親君とたのみ奉るわが子にて、なか斯くは宣ふ。我が子の御代に、我こそ死なめ」と臥しまろび給ふ。左のおとど、正頼男は、必すかよる目をぞ見る。左衛門佐の折になむ、かよる目見侍りし。人のかなしう覺え侍りしよりも、嵯峨院の思召しけむことを思ひ侍りしなむ、いと辛かりし。これも、院のかく思しさわぐらむを聞き給ふらむ所、苦しうおほえ侍らむ」大將、仲忠「それまでも覺え侍らず。かの御身のいみじきをのみなむ。御方々物し給ふとて、あたりへだに寄せられねば、御面をだにえ見奉らぬこと」と宣ふ。左のおとど、うち笑ひ給ひて、正頼「かよりける御中を、はじめは心ゆかず思ほして、勘當せられしはや」と宣へば、人々わらふ。正頼「物な思しそ。正頼生け奉らむ。人の勞れにたるならむ。かやうの事は、人勞れぬれば、斯うも

〔語釋〕

(二)正頼は湯兼雅は食物

(三)仲忠を

(四)仲忠

(六)仲忠が女一を

〔考異〕

(一)誰がのもく〜たがのをもく〜たがをもたがをも

(五)隔てたり〜たてたり

あり。おのれ、二十餘人の子どもの親なり。こよらの御子たちは、誰がのもく、
 居立ちてなむ生ませ奉りし。まづ、湯まるれ」とて、おとどは湯、父おとどは
 物とりて、すかせ給へどえすかせ給はず。辛うじてこしらへて、参りて、正頼いざ
 させ給へ」とて率て入りて、正頼人々しばし入り給へ。この主えみ奉らず、と
 侘びまどひ給ふ。(三)入れ奉らむ」女御の君、仁壽「何か。くちをしうなり給ひにたる
 ものを、今更に」と宣へど、人は出で給ひぬ。二の宮は添ひておはするに、ちひ
 さき几帳隔てたり。(五)女御の君、仁壽「おのれは、物の恥も知らず、さきにいとよう
 見給ひてしものを」と宣へば、入りて見給ふに、いと御腹たかくて、息づき臥し
 給へり。大將、仲忠「わが君は、如何に侍れとてか、かくは臥し給へる」とてかき
 起して、湯まるり給ふを、えまるらねば、仲忠「ともかくもなり給ふとも、仲忠が
 志」と、御湯聞しめせ」と泣く〜聞え給へば、一啜まるる。お物一口くよめ奉
 り給へば、すき給ひつ。よろこびて、脇息に尻かけて、かき抱きあけ給へば、心

〔語釋〕

(一)赤兒の泣聲の形容

(三)仲忠をさふ

(四)生兒は男か女か

(五)男兒を祝ひて翁といふなるべし

〔考異〕

(二)〜と泣く〜うまれ給ひぬいかにかくなど

知らひたる人抱きつきて侍る。おとど、弓走り引きて、うち聲づくり給ふ。大徳
 たち、近うさふらへど、加持高うもせさせ給はず。仲忠「弱き人は、それにまどひ
 給ふものぞ」と密に讀ませ給ふ。眞言院の律師一人、いち早く讀む。いと尊し。
 おとど、正頼「かゝる折には、人多くなさふらひそ。騒がし」とて、御湯度々まる
 りて、弦打しつと、聲づくり居給へるに、寅の時ばかりに、いか〜と泣く。お
 どろきて、女御探り給へば、後のもの平かなり。臥せ奉りて、大將やがて添ひ臥
 し給ひぬ。ないしのすけ、「仕うまつるやうあり。あやし」と聞ゆれば、仲忠「なほ
 さて仕うまつり給へ」とて起き給はず。笑ひて、物など著せかへ奉りて、「いとあ
 やし。なほ起きさせ給へ」と集まりて聞ゆれば左のおとど、正頼「よかんめり。な
 ほ休ませ奉れ。いみじく迷ひ給へる人なめり。まづ湯まるれ。そも〜何ぞ」
 と問ひ給へばすけ、「おきな」といと心よけに、ないしのすけ申す。仲忠「あなむく
 つけ。はや追ひ遣れ。いと恐ろしきものなり」と宣へばかんのおとど、俊隆女「さら

〔語釋〕
〔三〕氣をもみ給へる

ば、賜はりて率てまかりなむ」と宣ふ。宮、女「何か。しばし。今見む」と宣ふ。大將、仲忠「いみじき目見給へるものを、なにか見給ふべき」と聞え給へど、女「何か憎かるべき」とてゆるし給はず。おほん臍緒切りて、湯殿まるる。講師文よむ。左のおとど、お物湯につけて、まづ大將の主にまるらす。正頼「いみじういられ給へる、理や。よくもあらで數多侍るが、一人かけにたるだに、いかど思ふ。御後見しに参りつるぞ」とて参り給ふ。かく、いみじう悩み給ひつれど、産み給ひては、ことなる事もなし。たゞ他事なく、御身すくみてぞおはする。朱雀院に御使参りて、くはしく奏す。限なく悦び給ひて、よろづの物多く奉り給ふ。左のおとど、正頼「いたく煩ひ給ひつ」とて、例の御手づから君だちひき率給ひつよ、物調じて奉り給ふ。例の御産養、所々より有り。御産屋、いと面白ういかめしけれど、大將入り臥し給へれば、興ある事もなし。女御殿もえ入り給はず。かんのおとどのみ、夜晝

〔考異〕
〔一〕目見―目を見―目を見せ

〔二〕給へど―給へども

〔四〕給ひつれど―給へれど

〔五〕他事なく―ことなく

仕うまつり給ふ。御たち、「犬宮の御時おもしろかりしを、此度は醒めたりや」といふ。かくて七日過ぎぬれば、かんのおとど、宮に聞え給ふ。俊隆「すこしさわだち給はば、院に参り給ふべかなり。御方、とく参り給ひなむ。此度のはなをくしかる。おきなるてまかりて、徒然とさうぐしくして侍るに、もてかしづきぐさにもし奉らむ。ゆかしく思さむ時は、るて奉りて御覽せさせむ」ときこえ給へば大將も、仲忠「いとよき事なり。憎くとも、つねに参りて見侍りなむ。御覽せむと思さむ程には、迎へて見せ奉らむ」と宣へば宮、女「いさや、かく恐ろしきことなれば、またあるべくもあらぬを、吾兒をこそは」仲忠「犬がもてあそびにもとてぞや」女「然らば何かは」と聞え給へば、乳母湯まるる。ないしのすけひき率てまかで給ひぬ。

〔語釋〕

〔一〕女二宮に

〔二〕女二宮が

〔四〕「おきな」は此赤兒を

〔五〕俊隆女が

〔考異〕
〔三〕此度のはなをくしかる―こたみのいなをしかる

かくて、大宮もおとどもわたり給ひて、萬の物調じて奉り給ふ。大將、仲忠「い

〔語釋〕
(一)嵯峨院へ参りて参りがひある程の器量なりや否や

(六)此儘でも

〔考異〕
(一)給ひつれば―給へれば
(二)給ひ―ナシ
(四)わかひ居―居―ナシ
(五)給へれど―給ひつれど
(七)人―に―ナシ
(八)忘れ聞えむ―忘れむ

みじう煩ひ給ひつれば、御髪や落ちむと思ふこそいとゆゑしけれ」宮、女「さるは、少し人心地もせば院に参らむと思ふものを、かくて歇みぬるにやあらむ。と思ひしかば、いと戀しく覺え給ひしものを」仲思「それも、見所ありて、人の様に物し給ひしかば、それを思してゆかしがり聞え給ふにこそあらめ。今は效なからむや、見え奉り給ひぬべしや、見奉らむ。起き給へ」と聞え給へば、女「さらば見よ」とておき給へり。大將うち笑ひて試みに、仲思「むかひ居給へるこそつれなければ」とて御髪をかき撫でて見給へば、落ちけもなくめでたし。かくてすこし瘦せ青み給へれど、いと清らなり。仲思「かくなながらも、憎けには見奉り給はねども、今すこし人となりてこそは。しばし念じ給へ。衣更の程にをまるらせ奉らむ。吾が君、かくて見奉るこそ、徒ら人に見奉りたる心地もすれ。死にて臥し給へりし様よ。いづれの世に、左の大殿の御心を忘れ聞えむ」宮、女「物も覺えざりしに、律師の加持せしこそ、とほく聞えて、助かる心地せしか。いかでこの悦言はむ」

〔語釋〕
(一)祐澄に女二宮を
(四)越後乳母が

〔考異〕
(一)乳母は―は―ナシ
(三)ける―けるが
(五)さいなみて―おひ出でて
(六)呼び―ナシ

大將、仲思「今よく物し侍らむ。いとみじき人なり」など宣ふ程に、左近の乳母といふ、騒がしけなる氣色にて、出で来て申すやう、左近「いと恐ろしき事を聞き侍りつれ。二の宮の越後の乳母は、宰相中將に盗ませ奉らむとばかりて、多くの物賜はりにける。大なる瑠璃の壺に、黄金一壺入れて、沈の衣箱に、きぬ綾入れてこそ賜はりにけれ。かよる事知りたる下衆を、はかなき事にてうちさいなみてければ、腹立ちて、言ひのよしりければ、皆人聞き侍りつ。前々もおほくの物得てけり」と聞ゆ。宮、女「然ればこそ。それを思ひて、一夜も呼び入れ奉りしぞかし。あなかまや。聞きにくし」大將、仲思「何事ぞや」と宣へば宮、女「あらす」と宣ふ。大將、仲思「いとよく知りて侍る事ぞや。五の宮も、狩衣すがたにて、細殿に立ち給へりけり。さるさわぎに、少將入りなましかば、如何ならまし。心すとも、さるべき心か」と宣ふ。乳母、左近「左近等こそ然るいみじき物も賜はらず、恐ろしきはかりごととも仕うまつらで歇みぬれ」大將、仲思「やぶれ子持に

おはすとも、今もさやうにたばかられよかし。否とも言はじや御伯父どもに」な
ど宣ふ。

〔畫詞〕こよは御産屋のところ。

嵯峨院の花の宴。今上
朱雀院以下參會。詩歌。
仲忠講師をつとむ。嵯
峨大后今上の女四宮に厚か
らざるを怨む。

〔語釋〕
(三)實忠

かくて、年いとおそき年にて、三月かみの十日ばかり、花盛なり。嵯峨院、花の
宴きこしめさむとて、造りしつらはせ給ふ。よろづの財物をつくして、御前の物
どもまうけ給ふ。多くのまうけ物せさせ給へば、源中納言は院の家司なれば多く
のかづけ物調じ給ひて、奉り給ふ。

〔考異〕
(一)給へれば給ひつれ
(二)思して思召し

かくて、十日なむ、その日なりける。かねて、朱雀院に嵯峨花御覽じにわたらせ
給へ」と聞え給へれば、参り給ふを、内裏の帝、聞召して、朱雀院に参らむと
思ふを、同じくばその日嵯峨院に参らむ」と思して、御供にとて、度々中納言を
召すに、参り給はむともなければ、明日になりて、藏人御使にて、今上嵯峨院に参
るべきを、院の御供に、民部卿これかれ仕うまつるべければ、御供に人さふらふ

〔語釋〕
(二)實忠に勤むる也
(三)御供に参りたりとも
あて宮が我に對して薄情
なりとは思はるまじ
(七)仲忠
(八)かくて二衍文歟

〔考異〕
(一)里にはた久しう一里
には久しう一里にはさい
しやう
(四)とぞ一とや
(五)思ひしもし侍らねど
一思ふにあらねど
(六)帝には一帝ぞ
(九)などかかと宣へば
などせめ給へば
(一〇)見棄てて参りて
見棄て参りては一見す
見すすて奉りて

まじきを、里にはた久しう物せらるなるを、仕うまつられなむ。世にあらむ人の明
日見ざらむや。ひがみて」など仰せられたり。民部卿、實馬かく度々仰せらるよ
を、なほ参り給へ。かの女御、世に、志なくてあるき給ふとも聞き給はじ。申
し給ふ事を聞き給ふとぞ思さむ」中納言、實忠「何か、それをば思ひしもし侍らね
ど、久しく交らひもし侍らぬに、そこばくの帝の御前には、いかでかさふらはむ。
そが中に、嵯峨院は、いかに目癖つい給へる帝には」民部卿、實正「東人は、宮の
うちには、來ぬものか。然思ひてこそ参るべかなれ」とて、さふらふべき由奏せ
させ給ふ。民部卿よろこびて、我仕うまつらむとて調ぜられたる直衣の御衣ども
を奉り給ひて、我はあるにしたがひて仕うまつり給はむとす。
大將も、暇文出だして参り給はぬを、行幸あるべしとて召せば、え参るまじき由
を奏させ給へば、かくて宮、女「猶参られよかし。などかかと宣へば、仲忠」か
くておはするを見棄てて参りて、しづ心もなからむに、文作り、遊せよと責められ

〔語釋〕
 (一)もしぢうやくにやさしめて給はむ歟、ぢうやくは「重役なるべし」
 (二)嵯峨院の御勸にてひきしが故にこそ斯く君と夫婦にもなりたれ
 (三)さて責められて琴を
 (四)朱雀院に「の」に「衍」
 (五)追て省試といふ試験を経て進士になるべき者
 (六)「ちかすみ」は傍註の
 (七)誤あらんか

〔考異〕
 (五)舞人―才人
 (八)給ふ―給へと
 (一〇)有りしもせじ―有りもせぬ

ば、心空にて、過をしてや騒がれむ。そのうちに、嵯峨院の見付け給はど、もしぢうやくにさしあて給ふ。御前にて騒がしき目を見せ給ひしも、かの御そどのかしにて、上は責め給ひしぞかし。別いても、然てぞかくてもさふらふぞかし」など宣ひつ。その日になりて、事缺けぬべし。右のおとどは院の御供に仕うまつり給ふべければ、大將さふらひ給はではあるまじ」と騒げば、むつかりて参り給ひぬ。

辰の、一點ばかりに、朱雀院に、上達部、御子たちひき率て参り給ひぬ。辰の二點ばかりに、内裏の帝行幸し給へり。此院、喜びかしまり給ふ。花の蔭に舞人ども、樂所の者ども、皆さふらふ。文人は、博士よりはじめて、進士より出でたる人三十人、擬生も召したり。しばし有りて右大將、源中納言、新中納言、宰相の中將、右大辨、良中將、藏人の少將、ちかすみなどは文の人に召さる。嵯峨院題給はせて探韻せさせ給ふ。仰せらると、嵯峨「このえうにも有りしもせじ。公卿た



〔語釋〕
〔一〕誤あるべし「はう」
本「かう」又「け」
〔三〕未考

〔考異〕
〔二〕心勞し—心をちうし

ちに役仕うまつらせむ。右大辨季英の朝臣に、はう仕うまつらせむ。右大將の朝臣には、講師仕うまつらせむ」朱雀院「いと興あり。朝臣は、文講師する事をなむ申し侍り」内裏の帝、「御前の講ぞ、いとなく仕うまつりき。よき今日の講師に侍り」と皆ゆるし給へば大將、然ればよ、何事にあて給はむとは思ひつる、いかで仕うまつらむとすらむ、と思ほす。

かくてみな探韻す。大將、文を賜はりに参るを、嵯峨院御覽じて、嵯峨「この朝臣見る時こそ、齡延ばはる心地すれ。いと警策になり勝りにけり、この國の人には餘りにたる人かな」朱雀院、「この頃は憔悴しにたるにこそ侍るめれ。先つ頃、ほとほとしき病者をなむ持て侍りて、かしこく心勞し侍るなり」嵯峨院、「然聞き侍りき。三の内親王のもとに、とぶらひに物して侍りしかば、頼もしけなくものして侍りしを、ことなる事もなく物せられけるを喜び侍り」朱雀院、「いみじう侍りけるを、辛うじてちうはいして侍り」嵯峨院「今日此の朝臣に、何でふわざし出ださ

〔考異〕
〔一〕文題ども賜ふに高くも—文題どものたまふにかたくも

せて、おもき祿賜はせむ」院うち笑はせ給ひて、朱雀「今は、賜はすべき祿もなし」とて笑はせ給へど、いさよかつよみたる氣色もなく、いと目安くて入りぬ。つぎに源中納言目安くて入りぬ。新中納言出で來たるを、帝たち、「山籠は、いかで出で來たるにかあらむ。今日めづらしき事は、先づこれなりけり」と驚き給ふ。内裏の帝、「辛うじて召し出でたるなり」と宣へば朱雀院、「あたら、さてもありぬべき公人の、怪しうてもありつるかな。此の朝臣の、常に嘆きしものを」など宣ふ。

午の二點ばかりに、擬生の男どもに、文題ども賜ふに、高くもあらず、五位、六位なり。あらはなる所にさふらひて、近衛づかさの官人ども、左右にさふらひ、そなたに居たる、近く参りて、仕うまつらせ給ふ。探韻賜はる人の目やすきをば譽め給ふ。見苦しきをばわらはせ給へば、憶しつよ、天下の失禮を仕うまつりあり。上たちも、御文あそばす。御子たち、上達部、御心にまかせて作り給ふもあ

〔考異〕
(一)御子たち―御子たち

(二)笛―ふみ

(三)ゆるやかに吹く―ゆたかに吹く―ゆるうふく

り。朱雀院の御子たち、后腹の二の御子は、御病して、法師になり給ひて、西山におはす。大殿腹の四人、后腹の五人さふらひ給ふ。七の御子、中の君のあね、女御の御腹、それ参り給はず。九の御子は、更衣腹、わらはにて参り給はず。嵯峨院の御子は、三人ながら、内裏の御ともに仕うまつり給へり。御前ごとに皆まゐれり。文人樂所の者どもなどに物賜ふ。上たち御琴あそばし、上達部御子たち、笛仕うまつり給ふ。樂所には、樂仕うまつりあはせて、いと面白し。
申の一點ばかりに、擬生の文題とらせ給はむとすれば、あるは清く書きたるもあり、あるは半書きたるもあり。とかくし惑ひて、手をひろけて奉り参るに、途に倒るゝもあり。かく惑ふを今日の物見にはしたり。花さそふ風ゆるらかに吹く夕暮に、花雪のごとく降れるに、大將文奉るに、胡籥負ひてかうぶりに花雪のごとく散りて、仲頼右の近き衛の府のかみ、藤原の仲忠と申し給ふ聲、いと高ういかめし。嵯峨院、「よき講師の試の聲なりや」とて笑はせ給へど、つれなくて

〔語釋〕
(一)誤あるべし

(二)女一宮の御産の時の事をいふ

〔考異〕
(一)つくむ―つらむ
(二)つらむ―つらむ
(三)花を―花に
(四)雪と見るかな―雪ぞありける
(五)帝―御歌
(六)けむ―ける

入りぬ。文みな奉り侍れば、文題とらせ給ひて讀ませ給ふ。大將まるらせ給ひて讀み申し給へば、帝たちよりはじめて、皆聞き給ふ。いさよか怖ぢつとむ所なし。朱雀院、かゝるものに心強き、物に怖なき人、いかで前後知らず惑ひけむ、なほ吾が御子をおろかには思はざりけり、と思す。やんごとなき文どもをば誦せさせ給ふ。大將の文を、みな帝たち誦じ給ふ。土器まるる。新中納言いみじう褒めらる。右大辨土器まるる。
かくて、御遊はじまりて、朱雀院「老せる春を弄ぶ」と歌の題にかよせ給ひて嵯峨院に奉り給へば、御土器とりて内裏の帝に奉り給ふとて、嵯峨春くればかみさへ白くなる花をことしは君も雪と見るかな
内裏の帝
今上積りけむ花をもなどか見ざりけむ春とはわれも言はれつる世に
朱雀院

しろくとも千代しつもらば花を見にいづれの春かつれて來ざらむ
式部卿の宮、

〔語釋〕
〔三〕朱雀院第四の皇子

つもり行く花もなけきに木隠れて空にしられぬ下枝なりけり
など申し給へば五の宮、「すぐろに仕うまつりそしたるや」とて御土器まるり給ふ。

土器くだりて、中務の宮、

かくばかり枝は盛に匂ひつゝいつかは春のふかく積りし

兵部卿親王、

いにしへは春の色をや君はみなこひてををしむ花はちらめや

彈正宮、

ちる花ぞかしらの雪と見えわたる花こそいたく老いにけらしな

〔考異〕
〔一〕ナギに―すくわい
〔二〕春の―雪の

師の親王、

うちむれて花をしをりてかざさずば何にか春の老も知らまし

五の宮、

風をいたみ我らにふれる花をさへかしらの雪と見るな宮人

常陸の太守の親王、

さくら花咲かざらませば野べに出でて春の齡を何に知らまし

大政大臣、

思雅櫻花いつかあくべき野邊に出でてこゝろぐくに君がをしむに

左の大殿、

正頼もとゆひに花結びりと見ゆるまで見れどもかゝる春の花かな

右の大殿、

兼雅散りぬとて手ごとに折れば櫻花髪さへ白くなりまさるかな

右大將、

仲思さくら花幾世をふれば木隠れてみる人ごとに老を見すらむ

〔語釋〕
〔一〕我ら「我がみ」歟
〔二〕朱雀院第六の皇子歟

民部卿

實正老もみな花をり遊ぶ此のくれは春さくらやとしもにわくらむ

藤大納言

忠俊立ちよれば老をのみます櫻花折りつよかさず君は幾世ぞ

權中納言

忠澄ちる花に頭のおほく白くるは世々をへだつるやどにさけ春

源中納言

涼花の色はさかりに見えて年ごとに春のいくたび老としつらむ

左衛門の督

清雅老いぬとて春をばをしむ頃しもぞよろづの花は盛なりける

新中納言

實忠君むれて花みるけふと思はずばやまの朽木も春を知らめや

〔語釋〕
〔一〕誤あるべし

〔二〕「さけ春」は「さけば」かの誤なるべし、「本」さけやと

〔三〕「右衛門督」なるべし

とあるを、朱雀院いといたく誦せさせ給ひて、土器參らせ給ひて宣ふ。

朱雀わが前に木高くなりしもと櫻山べにえだぞ朽つと嘆きし

内裏の帝

今上朽ちぬとてなげきし枝は春を知るありし櫻の見えぬ今日かな

嵯峨院

もろともにおひし櫻のまづ枯れてのこれる枝を見るがかなしき

なむとて御土器度々になりぬ。御時よき程にて、御遊さかりて、大將源中納言な

どに、箏の琴賜ひて、みな人も物の音任うまつりあはせて、順の舞し、歌うたひ猿

樂せぬはなし。上たち、いみじう興じあはせ給ひて朱雀院、「今日はいと興ある

日なりや。いぬる年の秋仲頼が居つる所にて、此の族まかりて、人も聞かぬ所に

て、己がどち、隠したる手どもあらはして、警束に侍りけるこそいとになく侍り

けれ」嵯峨院「然聞くや。忠まる法師に陀羅尼讀ませて、かの朝臣の琴ひきける

〔語釋〕
〔一〕仲頼をいふ歟

〔二〕仲澄をいふ歟

〔四〕「など」と「なるべし」

〔七〕忠こそをいふ

〔考釋〕

〔三〕かなしき—かなしき

〔五〕源中納言—源—ナシ

〔六〕みな人—みな

- (一) 嵯峨太后
- (二) 正頼の妻大宮
- (三) 嵯峨院第四皇女、今上の御妾
- (四) 承香殿を

- (一) 考へさせ侍らむに
- (二) 考へさせ侍らむに
- (三) 考へさせ侍らむに
- (四) 考へさせ侍らむに
- (五) 考へさせ侍らむに
- (六) 考へさせ侍らむに
- (七) 考へさせ侍らむに
- (八) 考へさせ侍らむに
- (九) 考へさせ侍らむに

曉たど人などのみな集ひにけるをや」と宣ふ。
 内裏の帝立ち給ひて、(一) 後の宮に對面し給へり。後の宮、「あなかしこや。久しうもなりにけるかな。三條に侍る御子の、若菜摘にまうで來たりしまよにや侍らむ」
 帝、今上(二) 屢もまうで來べきを、まかりありきも心にまかせ侍らざりければなむ」
 宮、后宮(三) 今上は、かく今日明日になりて侍れに、聞えさせ置くべき事も、聞えさせ置きて、冥路も安くと思ひ給へるを、いとく嬉しく、わたりおはしましたる事をなむ。(四) 此承香殿に侍る人は、思ほえず老の後に出來て侍りしかば、中になしなく思ひ給へて、「願みさせ給へ」とて參らせし効なく、人數にも思ほされざなれば、恥かしう思ひ給へるを、此の位讓り侍りなとなむ思ひ給へる。「便なき事」と、これかれ聞ゆとも、昔思う給へし志叶ふるとおほして、必ずをせさせ給へ」帝、久しく思ほし煩ひて、今上(五) まだ物の心も知らず侍りし時、見なれ奉りにしかば、睦まじく頼もしきものには、彼處をなむ。あやしく人にも似給はず、疎

- (一) 考へさせ侍らむに
- (二) 考へさせ侍らむに
- (三) 考へさせ侍らむに
- (四) 考へさせ侍らむに
- (五) 考へさせ侍らむに
- (六) 考へさせ侍らむに
- (七) 考へさせ侍らむに
- (八) 考へさせ侍らむに
- (九) 考へさせ侍らむに

疎しくものし給ひしかば、思ほし直すまでとなむ、しばし物聞えざりし。宣はする事は、かやうの事は例とはせでなむ物するを、考へさせ給ふらむに、然る例あらば、何かは。然らずば、封賜はりなどをこそは、御位久しく物すべく侍るなれ」宮、后宮封賜はりなどせずとも、この位とこそ言はせまほしく侍れ。其處には、坊の母をとこそは思すらめ。此の人をば哀と思さましかば、かよる事も侍りけるを、しばし待たせもこそはし給はましか。然もや聞ゆるとて、急ぎし給へるこそは「帝、今上かよる事の疾くものし給はましかば、何の疑にかは。年頃さもあらで、彼が出來てまうで來たりしかば何心もなく、然あらむをりは然せむ」と宣ひてしかば、「空言せず」といふ族にまかりなりにたれば違へじこととなむ。彼も思ほし棄つべきにもあらぬを」と聞え給へば宮、后宮すべて幸なき者は」とて御氣色よからねば、立ち給ひて、四の宮の御方に參り給ひて、今上いと痛く酔ひにけり」とて装束解きひろけて臥し給ひて、今上いとよく案内申し給ひてさいなま

〔語釋〕
 (一)皇子をなせ早く生み給はざりし
 (二)女四腹の皇子を
 (四)産の時あて宮は里に下りたれば小き時は見ざりしと也

せ給ふなめり。萬の事かたみにならひて、哀に睦ましくこそ。あさましう打ち泣き給ひしかば恐ろしさにこそ聞えざりしか。などかは、かよるわざをも、疾くはし給はざりし」など聞え給へば、女四「あなむつかしや。何でふ然るものをか」上「今上」かよる程のをまだ見ねばぞや。かよる序に、此處のを見で、いつか。なほ見せ給へ」と宣へば、乳母召して、見せ奉り給ふ。まだ五十日にも足り給はず、いとつぶらかに、白く肥え給へり。上「抱き給ひて、今上」あなちひさや。人のはじめは斯くあるものか、我らも然ぞありけむかし。かよるものを大になすこそ、女は恐ろしけれ。宮は、いと大になりけり。はじめはいとあさましや」女四「月ごろ御覽じならひたらむを」今上「それはまかでにき。大になりたり。それをぞ小きと見しか」とて、今上「これをも對面とや言はむ」とてあこめの御衣ぬぎて乳母に賜ふ。かくて上達部殿上人座に著きさふらひて、御輿寄せてぞ「久しくなりぬ」と奏せさせ給ふ、上「今上」あな物憂や。こよに泊りなばや」と宣ふに「亥四刻」と申すに、

〔考異〕
 (三)あるものか—あるにや

〔語釋〕
 (三)女四宮

〔考異〕
 (一)よく—ナシ
 (二)ばかり—ナシ
 (四)擬生衆まで—清らにて

時なりぬとて騒ぐに、今上「しづ心なく言へば。然ば疾くまゐり給へ」とよく聞えこしらへ給ひて出で給ふに、后宮より、源中納言の奉り給へりし女の装二十くだりばかり、櫻色の細長、あはせのはかまなど、上達部殿上人に賜ふ。院の御方よりも、例の公様にてはあらで、御子たち、上達部に、例の女の装束一具、殿上人には細長はかま、下藤の文つくりなどには、腰挿棒持の綿擬生衆まで賜ふ。大將には、講師の祿とて、御馬一つ、御子たちにも御馬一つ、帝たちには、世にかしこき御帶、御佩刀など奉り給ふ。

畫詞

こよは嵯峨院の花の宴の所。